

Das Wesen des Christentums

von
Professor Dr. Adolf Harnack.



獨逸 ドクトル、ハルナック著
日本文學士和田琳熊譯

基督教の真髓

東京 眞理社藏版

明治
37 4 16
内交

020497-000-8

87-8

基督教の真髓

ハルナック/著

M37

ABI-0308





此肖像ハ柏林高異會社ノ許容ヲ得タル者也

Adolf Harnack.

婦^{きん}こたへて日ひけるは主よ然り
されど犬も案^{あん}の下に在りて兒女^{こども}
の遺屑^{たぐひ}を食ふなり。

馬可傳七章廿八節



序

吾人が今此に翻譯して日本の讀書界に紹介せんと欲する一書は獨逸柏林大學の教授ハルナツク博士が嘗て多數の學者及び學生の爲め喝采聲裡に爲したる講演なり。其が一度一冊の書籍となりて公刊せらるゝや、忽ち四方に喧傳して大に社會の注意をひき、之と相前後して世に出でたる二奇書(一はエルンストヘツケルの一原論の通俗的研究にして「世界の謎」と稱する者、二はナヤンパーレン氏の「第十九世紀の根本問題」是なり)と共に近來の三大著述と稱せらる。就中天下の耳目を聳動したるは蓋し此の書を以て第一と爲せり。一樹既に學林の表に拔んず、風從て多からざるを得ず。爾來之に對する是非の論議は紛然として停まず、甲賞乙貶、之を讚する者は烈火の熱心を以て迎へ、之を非難するものは亦氷塊の冷淡を以て之を排す。嘗に獨逸語を解する

境域のみならず、更に世界の文壇上に一大波瀾を起したりと爲すも亦敢て誇大の言にあらざる可し。褒貶の論未だ一定せずと雖も而も之を以て兎に角近來の世界的に一大著述なりと爲すは何人も亦異義を挾まざる處ならむ。

此の書の世に出づる後幾許もあらず、吾人は博士に請ふに特に日本の讀者の爲めに「エルサレムより江戸に至る基督教の歷程」に關する史的論文一編の寄草を以てしたりしに、博士は直に之を快諾せられたり。而かも吾人不幸にして尙未だ其玉稿に接するの榮を得ず。然れども是れ偏へに、博士が教務多忙にして未だ其の筆を下だすの間暇なきに因るものにして、想ふに博士も亦まさしく之を以て遺憾と爲し居らるゝや必せり。

さはれ吾人は博士が吾人の宿望を満足せしめらるゝ時の必ずや近き將來に於て之ある可きを信じ敢て其後るゝを憂へず。先

づ暫く同博士の著にして世界の注意と興味とを喚起したる此好書を紹介して以て其玉稿の到るを待たんと欲す。吾人は此譯本が日本に於ける基督教研究者を利益する處少からざるを信ずる者なり。此の書一度ひ出づるや英露佛伊其他數國の學者爭ふて之を各自の國語に翻して以て其の國民を利益せり。吾人が之を和裝して世に出だす意又實に此に存する也。若し之によりて此邦の宗教文壇に一枝の彩を添ふるを得ば、獨り吾人の喜びのみに非らざる也。

吾人は此書が先頃牧師高木氏の手によりて和譯せられて日本の讀書社會に推薦せられたるの事實を知らざるに非らず。はた其の譯書が獨逸著名の碩學と其意見を紹介するの功に於て高木氏の勞の多大なるものあるを認めざるに非らず。而かも其之あるに關らず、別に又其翻譯を世に出さんと欲す。人或は其重

復を詰る者あらん。吾人は今左に之が理由の重要なる者二三を
舉げて少しく之を辨せんと欲す。

四

一、高木氏の翻譯は原文を省略する處甚だ多く、從て原著者の
意の徹底せざる處なきを保せず。而かも吾人は著者の意を
傳へんとするに當りて敢て取捨己れの意を以てせず。却て
其全部を翻譯するを以て勝れりと思惟す。

二、高木氏は英譯によりて之を復譯せられたるも、吾人は和田
教授に附托して原本より直に之を和譯したり。

三、原著者は固と自由主義の基督教を奉ずるの士、然して高木
氏は神學の思想前者と大に異なりたる立脚地に立てり。兩
者の相容れざる固より其處なり、故を以て氏は其の翻譯中
往々氏一個の意見と批評とを加へられ、聊か煩雜の嫌ある
を免かれず。故に吾人は其評譯の筆致を學はず、則ち著者を

して勝手に其見を述べしめ、毫も吾人の私見と批評とを挾
まず。

最後に於て尙一言を附せざる可らず。吾人が此の書の卷頭に掲
ぐる處の者は著者が吾人の爲めに特に有名なる畫工に命じて
畫かしたる最近の肖像なり。吾人が讀者諸君の爲めに之を掲
げて諸君が彼大家の高説を研究すると共に、其風貌を想見する
の一助と爲すを得たるは吾人の私かに以て自ら誇さず處な
り。

小石川の寓居に於て

編輯人 ドクトル、ハンス、ハース識

原序

次に掲げたる講演は過る冬期間、余が各分科大學生六百名の前にて語りしものを神學生ワルテル、ベツケル氏の筆記せしものなり。余は其筆記の精巧なるに驚きぬ。是れ余が此處に一言同氏に謝せんとする所なり。氏の勤勉なる、余をして本講演を原形の儘にて世に公にするを得せしめたり。一二の例外を除くの外は余は唯だ文體上多少の校正を加へたるに過ぎず。余の講演は幸にして人の要求に適中する者ありたりとは聽衆が好意を以て保證せし所なれば、今之を書冊と爲すも同じく讀者を得べし。余は余の私かに希望する所なり。然るに斯かる短少時間に於て福音と其歴史とふ大問題を論ずるが如きは抑も大膽なる企圖と謂はざるべからざるも、若し本會講演の性質を明かにせば讀者も敢て余を咎むる事なきを得んか。

余は本問題を純然たる歴史上の問題として論じたり。之を爲すには不完全ながら現象の中に永遠不變の眞髓を認め、之を指示して讀者に了解せしむるの義務あり。誤謬は固より免るゝ能はざるべし。されど如何なる歴史も考古學としては寂として無言ならざるはなきなり。

福音的基督教は夥しき教派と方向とに分裂せるも、若し其中には如何なる天恵の存するや、又其生命は何處より來るやを莊重に觀察せんか、吾人は深奥なる所に於て各派の統一を感せざるを得ざるべし。余は人々の靈に於ける一致の益々強固ならんが爲め、本書が多少貢獻する所あらんことを望む。本書の目的は知識と平和とを與ふるにあり。論戰は其目的に非ざるなり。

紀元千九百年五月

アドルフ、ハルナック

序

十九世紀の末年ハルナック博士の基督教の眞髓一たび獨逸の神學界を驚かせしより批評の聲、非難の聲、囂然として起り、爾來未だ三星霜を過ぎざるに或は書冊として或は新聞雜誌の論說として本書を批評せし者の夥しきこと唯だ驚くの外なし。エアースト、ロルフス氏の著「ハルナックの基督教の眞髓と現今宗教界の潮流」の紹介せし所に由れば本問題に關する獨逸出版の書冊のみにて實に左の如き者あるなり。

ゲオルグ、ラッソン 偽基督教の非眞髓

ルードウ、ヒ、レンメ 基督教の眞髓と將來の宗教

エヅワルド、ルップレヒト 十六回の講演に於けるハルナック

クの基督教

ヘルマン、シック 十六回の講演に成れるハルナックの「基督教

教の眞髓は果して基督教の眞髓なるや

ウ・ハルヘルム、ワルテル、ハルナックの基督教の眞髓は基督
教會の是認する所なるや

マルナン、ケーレル 耶蘇は福音に屬する者なるや

エミル、ケールブラント 一九〇〇—一九〇一の冬期に於け

る基督教の眞髓に關する四論文

ヘルマン、クレーメル 基督教の眞髓

ウエー、ウオルフ、ハルナックの基督教の眞髓は果して史的

探究の結果なるや

某氏 共濟主義より見たるハルナックの基督教の眞髓

ユリウス、パウマン 新基督教と眞正の宗教

若し夫れ新聞雜誌上の論文として掲げられたる者に至りては
殆ど枚擧に遑あらず。嗚呼また盛んならずや。

本書題して基督教の眞髓と曰ふ。而かも基督教の眞髓は悉く此
書中に存せりと曰ふに非ず。吾人は本書の裏面に聖書あり、又眞
面目なる宗教的經驗あることを忘るべからず。著者は唯だ歴史
上の事實と己が經驗とに基きて基督教の眞髓を指ざし、人をし
て神學以外、教理以外、儀式以外に高尚なる宗教的生活の別天地
を開拓せしめんとせるのみ。或は本書を讀んで物足らず思ふ人
もあらん。殊に奇蹟に關し、基督に關し、又復活に關しては著者の
意見に左袒する能はざる者もあらん。ロルフス氏の如きは博士
の復活論を以て本書中最も薄弱なる議論なりとせり。然れども
吾人は本書の眼目のある所に注意して、自ら益する所あるべき
なり。博士が宗教上の合理論に反對し經驗主義を鼓吹して氣焰
萬丈なるは多くの基督教徒の多とする所なるべし。余は又本書
が基督教に對する一種の謬見を打破するの力ある事を信ずる

者なり。徒らに冷靜なる批評的眼光を以て本書の缺點を指摘し其眞價を没了するが如きは吾人の斷じて取らざる所なり。博士は本講演の終りに語りて曰く「余や此宗教の内に嚴肅なる生活を爲せしこと、既に三十年、又以て得たる所の經驗を語るに足らんか」と。博士は純然たる歴史上の立場より本問題を論ずべしと語れるも、ルーテル教會の一信徒として經驗せし、三十年間の嚴格なる宗教的生活は常に本講演の後にありて其生命となれるなり。然り彼は議論の人のみに非ざるなり。

余昨年牧師シルレル君の依囑に依り不才を顧みず本書の翻譯を諾し今や漸く完成の曉に達せしが、文拙なくして原著の美と力とを害せし者少からず。若し髣髴として著者の意のある所を示し以て我宗教界に多少の貢獻を爲すを得ば實に望外の幸なり。

附言、本書中の細字にて施したる註釋は凡て譯者の加へたるものあり。

京都にて

和田琳熊識

明治三十六年十一月廿三日

基督教の眞髓目次

本論の目的及び範圍……………	一頁
第一編、福音論……………	一〇
緒論及び歴史的事實……………	一〇
(甲) 耶蘇の福音の本領……………	四九
(一) 神の國、並に其到來……………	五二
(二) 父なる神、並に人間靈魂の無限の價値……………	六二
(三) 高調なる正義と愛の教……………	六九
(乙) 各種の重大なる關係より見たる福音……………	七六
(一) 福音と世界、即ち遁世問題……………	七七
(二) 福音と貧苦、即ち社會問題……………	八七
(三) 福音と法律、即ち世俗的制度問題……………	一〇一
(四) 福音と業務、即ち文化問題……………	一二六
(五) 福音と神の子、即ち基督論問題……………	一三三

(六)福音と教理、即ち信條問題……………一四六

第二編、歴史に於ける福音……………一五二

(一)使徒時代に於ける基督教……………一五三

(二)加特力教に至るまでの基督教……………一八九

(三)希臘教會に於ける基督教……………二二五

(四)羅馬教會に於ける基督教……………二四三

(五)新教に於ける基督教……………二六七

基督教の眞髓目次終

基督教の眞髓

獨逸 アドルフ、ハルナック著

日本 和田 琳 熊譯

第一回

經驗學派の大哲學者ジン、スチュワート、ミル曾て曰へらく、幾百千回、人類の記憶を促がすも足らざるは、昔時ソークラテースと呼べる人の世に存せし事なりと、其言や善し。然れども之に勝りて絶えず人類の記憶を促がすの必要あるは、耶穌基督と呼べる人が曾て人の間に生存せし事なりとす。謂ふと勿れ是れ吾人が幼時より口に膾炙せし所なりと。乞ふ現時の教授法を見よ。憐れ斯かる教授法にては學窓を出でし者をして胸中の一物たる耶穌基督の影像を眞の我物と爲し、全生涯、復失ふ事なからしめんこと實に覺束なきに非ずや。耶穌より來る一條の光線に一度なりとも觸れたらんには、未だ彼を知らざりし昔時に歸る事なく、多少の痕跡必ず其心奥に留まれるは論なきも、斯の如き混沌として屢々迷信に外ならざる記憶の中よりか

い生命とは望むべからざるなり。さればとて耶蘇に關し一層多く、又一層確實に知る所あらんとし、殊に耶蘇基督は如何なる人なりしか、彼が使命はそも何事にてありしやに關し、確乎たる消息もがなとて、試みに現今の思想界を尋ねれば、甲論乙駁人をして自ら論戰場裡の孤客たるを感せしむ。甲の學者に聞けば、初代の基督教は佛教と淺からぬ關係を抱きたりと答へられ、隨て基督教の莊嚴と深邃とは其遁世主義と厭世觀の中に見るべきを教えらる。然るに乙なる學者は之に反し、基督教は樂世的宗教なること、又猶太教の進歩せる者と見るべきことを陳べ、自ら以て一大卓見となせり。丙は又異論を挟みて曰ふ、福音は却て猶太教を倒したる者なるに如何で猶太教の進歩せるものと見るを得ん。否、福音は暗々裡に希臘的影響を被れる者なれば、之を希臘主義の樹に咲ける花と謂ふを得べしと。斯かる所に宗教哲學者現はれ來り説明して曰へらく、福音の中より發展し來れる純正哲學こそ福音の眞髓なれ、又其秘密の發掘者なれと。然るに之を駁する者は曰ふ、福音と哲學と何の關する所かあらん。福音の目的物は血あり涙ある人類にてあるなり。哲學の如きは強て人の附會したる者のみと。最後に最新の思想を懐ける者席上に進み來りて曰ふ、宗教史といひ倫理史といひ又哲學史と云ひ、本と皮相のみ裝飾のみ。何れの時代と

曰はず此等歴史の裏面にありて獨り全權を掌握せる者は經濟史なりとす。されば基督教も其起源に遡れば一種の社會運動に外ならず、基督は即ち下層社會の窮民を救はんとせる社會的救世者なりと。

斯の如く各々が己が立場より思ひ、の趣味を以て耶蘇基督の問題に立歸り、責めいは之に容喙するだけにても爲さんと勉むる所實に吾人の心を動かす者あり。此爭論は遠く第二世紀に於ける諾斯土教（信仰よりし知識を重んじたる基督教）の爭論を始とし、爾來基督を中心として注がれたる各種の思想の戰爭的活劇を繰返したる者なり。近來トルストイの思想のみかニイチエの思想までが福音と特別の關係を結ぶに至りぬ。思ふに此問題に關する彼等の所説は耶蘇の教訓に關する彼等の神學的、哲學的議論よりも勝りて注意すべき價あるが如し。然れども全體より見れば吾人は斯かる論争に對して絶望する者なり。思ふに此論争は終に鎮靜の時なかるべし。されば此間に立て己が見解を定めんと試みながら、暫くして研究を擲つ者ありとも誰か之を答むるを得べき。斯かる人は或は一步を進めて曰はん、要する所斯かる問題は吾人には一切無關係なり。千九百年の昔に於ける歴史及び人物が我に何の關係かある。吾人の理想と力とは現在に求むること

至當なれ、之を古き書冊の中に求めんと勉むるは木に縁つて魚を求むるの類のみ
と。一理なきに非ざるも尙正鵠を得たる者に非ず。何となれば現在の我は高尚なる
意味に於て過去の歴史より來り、又過去の歴史に由て存在する者なればなり。過去
の歴史といふも素より一切の歴史を云ふに非ず。唯だ吾人に影響し今日も尙吾人
の中に働きつゝある所の歴史のみを曰へるなり。此點に關し純粹なる知識を得る
は獨り歴史家の務たるのみならず、之より來る豊富なる内容と力とを得んとする
者の當に勤むべき所なり。吾人の福音に對する亦斯の如し。其貴重なる何物も之に
代はる能はざるは、世の大思想家已に屢々之を曰へり。精神上の文明如何に進歩し、
人間の精神如何に膨脹すとも、福音書中に輝き亘る基督教の尊嚴と其道德の高遠
とには過る能はざるべし。と。ゲートが多年の經驗と不撓の勤勉の結果得たる所
の道德的、歴史的見解を約言したる者なり。斯の如き人にして斯の如き證明を爲せ
りとせば、斯かる探究には左まで心の傾かざる者もゲートの如き人が斯く迄貴重
せし者に向て鄭重なる觀察を下す程の價值おしとせんや。若し今日ゲートの告白
に反し基督教は已に死せりと聲漸く高く又益々人の信用を博しつゝあるに當
りては、已に死亡せりと信せらるゝ其の基督教に就て一層精細に知らんとするの

情愈切ならざるを得ざるあり。
然るに事實に於ては基督教は現今益々活氣を加へ之が研究も大に動き始め、基
督教の實質と眞價との研究に熱心なると疑問探究の夥しき事三十年前の比に非
ざるは吾人が今の世に付て誇る所なり。此問題に關する實驗といひ、奇異難解なる
説明といひ、之に對する嘲笑と曰ひ、紛然たる議論といひ、終には相憎怨する者ある
に至れる事と曰ひ、其中にも眞の生命と熱心なる努力を見るべきあり。而かも之を
以て模範的努力と思ふ勿れ。又吾人を以て從來の權勢的宗教を倒して其代りに自
由を與ふる生ける宗教を得んと勉め、其結果として紛擾と半面的眞理とを生せし
めたる者の嚆矢となす勿れ。今を距る六十二年、カールは曰へり。
宗教の本義は多くの教會より放逐せられ、今や善き人々の心に潜み靜に働きつ
ゝ新天啓の至るを待ち居るべく、若しくは地上の宿を求むる幽魂の如く悄悄と
して世界を迷ひ行きつゝ、あらん。斯かる紛亂の世にありては人々右に探り左に
彷徨ひ、終には奇々怪々なる迷信と熱狂との數限りなく現出するに至るは當然
の事といふべきのみ。人の本性に本ける高等なる宗教心は暫く其影を隠したれ
ど、彼は何時までも死滅する事なく大混沌の奥に營々として目的もかく働きつ

あるなり斯かる事情の下に宗派又宗派、教會又教會相繼ひで起ると思へば再び溶けて宗教上の變態を爲し行くなり。

今の時勢を知る者は此言葉が實に今日書かれたるが如しと思ふなるべし。されど本講演の目的は宗教の本義と其進化を論ずるに在らずして、之よりも小なる而かも緊要の點に於ては一步も譲らざる問題に就て解答を與ふるにあり。其問題とは他なし、基督教とは何ぞや、過去に於ける基督教は如何而して現在の基督教は如何是なり。思ふに此問題の解決は之より大なる問題即ち宗教とは何ぞや、又吾人の信すべき宗教は如何なる性質を要するやとの問題に向て自ら光明を與ふるならん。何となれば余輩の宗教論は詮ずる所基督教論にして、其他の宗教は最早深く吾人を動かすに足らざればなり。

基督教とは何ぞ。吾人は全然歴史の立場より此問題に答へんとす。即ち一は歴史的科學により、一は歴史上の經驗より得たる生活上の經驗によらんとす。されば辨證論や宗教哲學の議論は余輩の避くる所なり。少しく其理由を述べしめよ。辨證論は宗教學上緊要なる地位を占むる者にて、基督教の正當あるを辨明し、そが

道徳上、智力上の生活に對する地位を明かにする點に於ては實に有益なる大議論たるを失はず。されど斯かる問題と基督教の實質に關する純然たる歴史上の議論とは、相混同せざるを要す。否らざれば史的探究の信用は全く地に落つるに至らん。加之ならず今日吾人の間に行はる、辨證論の中には未だ眞に模範とすべき者あらず。素より此研究も幾分かは進歩したるべけれど尙依然として憐むべき状態にあるなり。見よ辨證論は何を辨證すべきやさへも明かならず。又之を辨證する方法も確實ならざるに非ずや。此點に於て辨證論は屢、耻かしくも又亂暴なる議論に陥りぬ。辨證論者自らは以て基督教に貢献するものなりと曰へど、其狀恰も屑物を賣る商人の如く又社會害惡一切全治の機能を説く者の如し。彼等は又基督教を裝飾せんとて難多かる廢物を持來り、人間に必要な麗はしき宗教として之を世に紹介せんとせしが却て基督教の威嚴を傷けしこそ是非なけれ。而して僅かに得たる所は「基督教は無害なる宗教なれば之を受入る、事を妨げず」との結論のみ。彼等は尙飽かずやありけん、終には前日の教會綱領を取出し、之によりて證明を試みんとせり。思ふに彼等の思想や一二の添削を爲すも全體には影響せざる程粗雜の者たり。彼等が基督教に與へたる又現に與へつゝある損害は實に言語に絶せるなり。否

々基督教は崇高にして又單純あり而して其目的は唯だ一、即ち神の前に、神の力に依りて有限なる時間の中に無限の生命を保つ事是なり、基督教は倫理的、社會的秩序を維持し、又之を改良する所の妙薬の如き者にあらず、否、基督教が世界文明と人類進歩の上に與へたる貢獻を以て第一の問題と心得、之によりて基督教の眞價を定めんとするが如きは已に基督教を傷くる者なり、ゲーテ曰く『人類は長へた進歩すれども變らぬ者は人なりけり』と、然り宗教の關する所は人なり、即ち變化と進歩の中にありて尙變らざる所の人なり、されば彼辨證論者たる者は、先づ基督教は單純なる性質と力とを有する宗教ある事を知るを要す、素より宗教は宗教の爲に存在するにあらずして、有らゆる精神上の活動や又道德的、經濟的狀態に關係する者なるも、さればとて又宗教は之が隨判者たるに非ず、能く拒ぎ、能く助け、能く毀ち、能く實を結ばしむる一大勢力にてあるなり、されば吾人は第一に宗教の本性を知り、其特質を明かにすべきなり、而して觀察者が宗教に對して如何なる立場を有するや、或は之を以て己が生活上貴重なる者なりと爲すや否やは今問ふを要せざるなり。

純粹なる宗教哲學上の觀察も亦本講演の避けんとする所たり、若し本講演をして

六十年の昔にあらしめば、余輩は先づ理論的に宗教の概念を定め、然る後之に基きて基督教を論せしからん、然るに今や吾人が斯かる研究法の價値を疑ふに至りしは抑も故なきに非ず、語に曰ふ概括的斷定は虚偽を含むと、今や吾人は概念は生命を造らざるを知る、又吾人は實際の宗教は宗教的概念の中に含まると、者に非ざるを知る、否、余輩は寧ろ問はんとす、元來宗教といふが如き概念有るべきや否やと、若し之ありとせば各宗教の共通點は甚だ漠然たる形式の者ならざるが、宗教とは精神中の空處にして各人適宜に之を填充し、或者は斯かる空處のある事をすら知らずといふが如き者なるや、余は然か思はざるなり、余は唯だ人心の根底に於て何物か萬人共通の者あるを信ず、此物や歴史、上種々なる衝突と暗迷の中を潜り抜け終に統一と光明とに達したる者なり、余は又オーガステンが『主よ汝は汝の物として我儕を造り給へり、されば我心は汝に行きて休息を得る迄は安きを得ず』と曰ひし語の當れるを信ず、然れども余輩は之を證明せんとする者に非ず、心理學及び民族心理學の立場より宗教の本質を明かにし、それが正當なる者たるを論ずるは本講演の目的に非ず、余は何處までも純粹なる歴史上の立場より『基督教とは何ぞや』との問題を解釋せんとするなり。

然らば之が研究の材料は何處に求むべきかと問はば之が答は一言にて盡くる者の如し。曰く耶蘇基督と其福音はなりと然り是れ吾人が研究の起點なるのみならず又實に眼目の點ありとす然れども唯だ耶蘇基督の人物を描き彼が福音の特質を示すのみにては未だ足らざるなり何となれば凡て偉大なる人格が有する本性の一部は其感化を受けたる人々によりて始めて現はるゝ者なればなり否人格愈々大にして人心を動かすこと愈々多ければ其言行のみによりて彼が人物の全豹を知ることも愈々困難なり吾人は須らく斯かる大人物を指導者また主と仰げる人々の上に現はれたる反射と活動とに注目すべきなり基督教とは何ぞやとの疑問に對し單に耶蘇の教訓を研究するのみにては充分なる解答を與ふる能はざるは之が爲なりされば吾人は耶蘇と飲食を共にしたる初代の弟子等をも研究し彼等が耶蘇に就て如何なる經驗を爲せしやを聞かざる可らず。

研究の材料は未だ之に盡さず若し基督教の偉大なる勢力は唯だ一時代に限られたる者に非ずとせば若し基督教は一度のみならず屢々其力を現はしたりとせば基督教が後世造り出したる生産物をも觀察せざるべからずされば余輩が研究せ

んとする所は千年一日の如き教理に非ず又勝手なる解釋を施されたる教理にも非ず唯だ爾來燃えて已まず今も尙獨特の火焰を揚げつゝある一個の生命こそ我研究の目的物なれ思ふに基督自らも又其使徒等も此新宗教は其設立の當時よりも將來に於て益々大となり又愈々深遠なるべきを確信せしなり彼等は又聖靈が將來益々光明を與へて愈々高き力を開發するに至らん事を信じたりき一株の植物にても之を充分に知らんと欲せば實に其根と幹とを觀察するのみならず其皮其花其枝葉をも研究するの必要あるが如く基督教の眞價を知らんと欲せば其全歴史より歸納し來るの外なし素より基督教には古典時代ありしのみならず基督教が教ゆる如き理想的人物が自ら宗教の建設者たりし時代ありたれば此人物を深く研究するは固より至要の問題ありとす然れども研究を之のみに限るは耶蘇の使命に對する着眼點を餘りに低くする事なり彼耶蘇は獨立せる宗教的生命の活火を燃さんとして又實に燃したりき彼が人々を神に導き之をして神と共に自ら生くるに至らしめたる所彼が獨特の偉大なる點なりとす果して然らば眞に耶蘇を知らんと欲する者争かて福音の歴史を默過するを得べき。

人或は曰はん是れ至難の問題にして之を解釋せんとすれば幾多の過失と誤謬と

に陥るの恐れありと。或は然らん。されど困難なればとて此問題を極めて簡易に、隨て曖昧に説き去るが如きは没理的手段と云ふべきのみ。加ふるに此研究が益々困難を加ふる事あるも、他の側面には問題の範圍の擴張に由りて、却て便宜を得ること少からず。何となれば現象の中に實質を發見し、核と皮とを區別するには問題の範圍の廣大なる程、善ければなり。

耶穌基督及び其最初の弟子等が其時勢に於ける、恰も我等が今の時勢に於けるが如くなりき。即ち彼等が感ずる所、知る所、判斷する所、戦ふ所凡て猶太國民と同一の地平線に於てし、又同一の模型を有したりき。若し否らすとせば、彼等は血肉を有する人に非ずして、幽靈の如き者あらざるべからず。實に千七百年の間、或者は今日も尙耶穌基督の人性に關しては、唯だ彼が人間の身體と精神とを有したりしとの事を承認すれば、其れにて充分なりとせられしが、是れ世には個人的特性を有せざる人間ありとなす者なり。蓋し人間と云へば第一、一定の限界内に限られたる一定の精神的模型を有する者たるべく、第二には此精神的模型を以て、一定の限界を有する歴史的關係の内に立つ者たらざるべからず。此外に人間なる者あるべき筈なし。然らば或人物を研究し、又之に付て語らんとするに當り、其人の精神的模型と其時

勢とを知らずんば、吾人は絶對的に何をも爲す能はざること勿論なり。時としては片言隻語、能く萬世不易の金言と見ゆるわれど、其用ゐられたる言語の中にすら已に大なる制限は存するなり。況してや一個の精神的人格を叙述するに方り、如何で斯かる時代的制限、隨て今は異様に見ゆる者及び當時の風習等を看過して可なるべき。而して之を看過せざるの必要は、觀察者と被觀察者とが時を距つる事の遠きに隨ひて愈々加はるべきなり。

是故に苟も萬世不朽の眞理を確定するを以て最高の本職と爲すべき歴史家たる者は、徒らに言語に拘泥することなく、能く事物の眞相を看破せざるべからず。今徒らに全基督、全福音等の語を用ひて、單に其外形的性質のみに拘泥し、人をして之を遵守せしめんとする者あらば、是れ全ルーテルなど曰ふと同じく、此語を以て邪惡なる又虚妄なる標語と爲す者なり。余輩は之を邪惡なりと言ふ、何となれば人を束縛すればなり。又之を虚妄なりと言ふ、何とあれば然か公言する人は嚴肅に之を考ふるの意なければあり。蓋し彼等は嚴肅ならんと勉むるも能はざるなり。何とあれば彼等は何時まで己が時代の子として感じ、了解し、又判斷する者なるが故なり。福音に關しては、唯だ二様の見解あるを得べし。一は福音と曰へば凡ての點に於て、

初代の者と同一の形を有せざるべからずと爲す者、此意味に於ける福音は時と共に來り時と共に過ぎ往くなり。一は福音を以て歴史的變化を爲すが中にも、尙一定不變の價を有すとすもの、余は後者を以て正當と認む。教會歴史の始に於てすら、吾人は基督教其者が原始基督教衰頽の中に優に其生命を持続せるを見るなり。斯の如き變體作用は其後の歴史に於ても屢々見る所なり。或は形式的信條を破棄せんとする者あり。或は在來の希望と感情とに革新を與へんとする者あり。皆基督教歴史の始より存したる大問題の關する所斯の如くして起る所の變體作用は終に已む時あからんとす。然るに今研究すべき範圍は基督教の初代のみならず其全歴史を蓋へるが故に、吾人は基督教の眞髓と眞價とを定むるに一層屈強なる標準を有する者たるなり。

然り一層屈強なる標準を有せり。されど此標準や後代の歴史に於て始めて得たる者ならず、基督教其者の中に認むるを得べきなり。福音の眞髓が語る所は單純強健にして、容易に誤解さるゝの憂なく、且福音に至るの途は業々しき指導や大々的緒論を要せず。苟も生ける者を視るの活眼と眞に偉大なる者を知るの感性とを有する者は、必ず之を看破し能く時代的外皮と區別するを得べきなり。若し不幸にして

永久の者と過ぎ往く者、一時の歴史的現象と根本的事實とを判別するの容易からざる場合少からざらんか。斯かる時には彼兒童が或植物の核を見出さんとして、一葉々々と取り去りて終に何物をも残さざるに至り始めて已に取り去りたる葉は即ち求むる所の核なりしを知りたるが如き愚を避くべきなり。吾人は基督教の歴史に斯かる實例あるを見るなり。若し基督教には元來核皮の差なく、盛衰の別なく、一切平等の價値と生命とあるのみとの説出でんには、斯かる謬見は唯だ風前の燈火たらんのみ。

是に於てか余輩は本講演中第一に耶蘇基督の福音を論じ、尤も多くの時間を之が爲に費さんと欲す。之に次で耶蘇及び其福音が初代の弟子等に如何なる印象を與へしやを示し、最後に歴史上に於ける基督教の重なる變化を尋ね、以て各種の代表的性質を明かにせんとす。斯くて一方には此等歴史的現象の共通點を認めて之を耶蘇の福音に照らし、他の一方には福音の特徴を認めて之を歴史上の事業に訂だし、以て兩々相補はゞ庶幾くは事の眞髓に逼るを得んか。然れども斯かる短時間の講演なれば論ずる所素より主要の點に過ぎず、而かも主要の點を舉げて左まで

重要ならざる者を省き、以て廣大なる材料を大觀せしむるは却て利益なりと信ず。されば吾人は猶太教と其内部の事情や、或は希臘羅馬の世界に論及せざるべし。さればとて之に向て全く目を閉づるに非ず。是れ吾人の記憶すべき事件なりとす。唯だ詳細なる説明を爲すの必要を見ざるのみ。蓋し耶蘇の教訓や、大步數回すれば、忽ち吾人をして大山高岳の上にあらしめ、猶太教との關係の如きは、眼下遙かなる一小線に過ぎずして、當時の歴史との關係に至りては、全く無意義ありと感せしむるあり。斯く言へば、或は奇怪の言を爲す者かなと思ふ者あらん。見よ今日或論者は新發見にても爲したらん意氣込にて熱心に説て曰ふ、耶蘇の教訓は之を當時の猶太教の教理と相連ねて研究すべき者にて、先づ猶太教を知るに非ずんば之を了解する能はざるのみならず、之を正當に言ひ現はす事も出來ざるべしと。其言ふ所多くの眞理を含めりと雖も、其結論に至りては誤謬と云ふの外なし。若し夫れ福音を以て絶望的人民の宗教となし、茲に始めて其眞義を了解するを得べしと曰ふに至りては、沙汰の限と曰はざるべからず。其説に曰く、滅亡に瀕せる猶太の民が窮苦の餘り此世界を捨て、天界に突進し、之が市民たらんと要求せる最後の努力こそ即ち福音なれと。ざりとはい何等悲惨の宗教ぞや。此説に對して吾人の注目すべき事實

なり。そは絶望せる猶太の民が福音を歓迎せざりしのみか、却て之に反抗したる事是なり。次に注目すべきは余輩の知る限に於ては、此民の指導者等が論者の言ふ如き絶望に沈める様子あかりし事なり。終りに最も注目すべきは、此民は實に世界と其富とを捨てたるも、別に聖と愛とに由れる兄弟的團體を結び、健氣にも人生の悲惨に向て戦を宣告したる事なり。余は反覆福音書を讀みて之を考ふること愈々深ければ、當時福音を出したる事情及び福音を圍める事情の愈々顧みるに足らざるを感ずるなり。余は基督教の祖師の着眼點は實に人其者にありて、其外形的事情は彼が問はざりし所たるを疑はず。榮枯盛衰、貧富強弱に論なく、其根底にありて終始變らぬ人間其者、是れ即ち彼の着眼點にてありき。斯くの如く外形的事情の上に超然たる所、即ち福音の尊嚴のある所たり。何となれば福音は各人外形上の差異に超然たる人の眞體に迫る者なればなり。若し夫れポロを見れば、福音の尊嚴の極めて顯著なるを知るべし。彼は宛然、一個の帝王の如く、精神的に萬物を統御し、之を以て其悦としたりしなり。彼論者の如く、福音を以て衰亡時代の宗教となし、又は悲運の民の宗教と爲すは、或は堂の外觀を示す者なるべく、或は福音の形式の由來を説明する者なるべくし。されど此宗教を了解する鍵として、は拒絶せざるを得ず。論者が説

い所は要するに普通の史學的論法を應用したる者なり、此論法は他の論法に比すれば長く世に行はるべし、何となれば之によりて實際數多の疑問を解釋するを得ればなり、然れども斯かる論者は終に事の眞髓に達する能はざるなり、否、彼等は語りこそせざれ、本來斯かる眞髓なる者なしと思へるなり。

余は尙一の緊要なる點に就て一言し、以て議論を結ばんとす、他なし、凡て歴史上の判斷は絶對的なる能はずと云ふ事はなり、是れ今日——余は殊更に今日と云ふ——にありては明々白白々動かすべからざる見解たり、抑々歴史は唯だ事實が如何にありしやを示すを得るのみ、假令過去の事實を洞察し、了解し、又之を判斷するに當りても、決して純然たる歴史上の觀察より抽象して、絶對的に事件の眞價を判定し得る者と思ふべからず、斯かる判定は唯だ感情と意志とが常に爲す所にして、主觀的事項に屬す、然るを知識のみにて能く之を判定するを得べしとなす所の誤見は、人類が長歲月の間知識と科學の全能主義を夢み、人間精神の慾望は皆之によりて満足せらるべしと信じたるに基けり、然れどもそれは不可能の事たり、斯かる思想は只管研究に餘念なき時に、稍もすれば吾人の心に千斤の重を爲す者なり、嗚呼、然れども若し人類が慕へる高尚なる平和と、そが力を込めて求むる所の明白と、確實と

力とが單に吾人の知識の深淺に由る者とせば、人類の爲に如何ばかり失望すべき事にてあらん。

第二一回

耶蘇の福音の特色は何ぞや、是れ吾人が劈頭第一に討究せんとする所なり、特色と云ふ中には、耶蘇垂教の外形をも含めり、蓋し外形も亦彼の特色を表はす者なればなり、彼は學者とパリサイ人の如くならず、權威を持てる者の如く教えたり(太七の)といふならずや、今本論に入るに先ち、簡單に其材料の由來を述べざるべからず、耶蘇の福音を知るの材料は、使徒パウロが與ふる一二の大切な消息を除きては、馬太、馬可、路加の三福音書にあり、此外には耶蘇の傳記と教訓とに關する多少の材料を悉く蒐集するも、一小紙面を滿たすに過ぎず、第四福音書(此書、使徒約翰の筆に成れるに非ず、又然か記されたるを見ず)は言語の普通の意義より曰へば決して歴史的材料を供給するものに非ず、何となれば本書の記者は、或は事實を置き換へて異彩を放たしめ、或は説話を製造し、又己が工夫したる立場より高遠なる思想を説明するなど、非常の自由を以て之を書したればなり、されば第四福音書にも確かな

る傳說的要素はあれど、之を發見するは甚だ難し。耶蘇の傳記の材料としては、殆ど取るに足らず、唯注意して取るべき者少しく是あるのみ。然れども眼を轉じて福音の中より耶蘇の人物に對する最も明快なる觀察を得んと欲し、又如何なる光と温熱とを發射せしやを知らんと欲せば、吾人は第四福音書を以て第一流の材料とあさるべからず。

今を距る六十年、ダビッド、フリードリヒ、ストラウスは他の三福音書も殆ど歴史としての價值を破壊されたりと信じたるが、爾後六十年間に亘れる歴史的批評の結果再び三福音書は大體に於て信憑すべき者とはなりぬ。されど三福音書が純然たる歴史の書卷に非ざるは第四福音書と撰ぶ所なし。蓋し此等書卷の目的は單なる事實の報道に在らずして、福音の宣傳に存したればなり。實に福音書の目的は人をして耶蘇の人格と使命とを信せしむるに在りき。或は耶蘇の言行を畫き、或は舊約書を引照す、皆此目的の外ならず。斯く曰ふも此等福音書は歴史の材源として價値なしと曰ふに非ず、且その著作の目的も他より出でずして、半ばは耶蘇の目的と合する所ある也。此外福音書に大目的のありとして人の擧ぐる所、一として取るに足らず。唯、記者によりて各自枝葉の目的ありしならんのみ。本と福音書は黨派的書卷に

あらず、又深く希臘思想の感化を受けし者にもあらず、之が内容より曰へば基督教の元始時代、即ち猶太的時代、更に生物學上の語を借りて曰へば、古生物時代とも稱すべき短期の世に屬す。假令第一、第三の福音書に明かなる如く、其文體に於て又文章の組立に於て請賣的なりとするも、兎に角之によりて斯かる古代の消息を知るを得るは感謝すべき、歴史上の攝理と云ふべし。抑々福音書が世の文章中一種異彩を放てる者なるは、現今批評家の一般に認むる所、特に記述の體裁の如き、凡て後代の著作と大に趣を異にせり。是れ一は猶太教師の談話法に倣ひ、一は教訓を問答體と爲すの必要に應じたる者にて、其簡にして力ある所、僅々二三十年の後に於てすら、已に摸倣する能はざる者あり、然るに福音が一たび希臘羅馬の大世界に移植せられて以來、希臘人の文學的形式を採用したるが爲め、福音書の文體は一種異様にして而かも威嚴を具ふる者となりぬ。用ゐられたる希臘語は、譬へば透明なる面被の如く能く其上より福音の真相を視るを得べし。隨て之を希伯來語又はアラマイック語に翻譯して舊に復せしむるは平易の業のみ。されば此等福音書が大體に於て最初の傳説を傳ふる者なるは疑ふを要せず。

此傳説が形式上如何程確實なるやは第三福音書に就て知るべし。此福音書は思ふ

にドミシアン帝の時一希臘人の筆したる者にて此書の發端若しくは彼が第二の著書使徒行傳を讀む者は記者が希臘文學上の言語に通せしのみならず、又實に文章の達人にてありし事を知るに足らん。然るに福音書を筆するに當り彼は從前の文體を棄つるに忍びず、其用語、文章の構造、文體其他數多の點に於て甚だしく馬太馬可を摸倣せり。唯だ餘りに沒趣味なる者あれば惜氣に訂正せるを見るのみ。然るに彼の福音書には尙一の注意すべき者存せり。即ち記者其發端に記して曰ふ、我凡ての事を詳細に考究して通曉する所ありと。されど其材源を穿鑿すれば彼が主として馬可の福音書、並に馬太が用ゐたる一の材源に據る者なるを發見すべし。思ふに此尊敬すべき歴史家は此二書を以て最良の材源と信じたるなり。如何なる歴史家も福音書中の傳説に換ふるに他の傳説を以てするを得べしとなし、又其必要ありと考へたる者なし。

尙一の考ふべき點あり、即ち此傳説は耶蘇受難の記事を除くの外は殆ど凡てガリラヤ的性質を有する事是れあり。若し耶蘇の活劇史が實際此地理上の限界を有せざりしならんには、斯かる傳説を生せざりしなるべし。何となれば耶蘇の傳を修飾せんとする者は、必ずエルサレムを以て其活動の本舞臺なりしが如く記すべきを

以てなり、第四福音書は即ち其適例ありとす。然るに他の三福音書がエルサレムに關して殆ど曰ふ所なきは、却て其信據すべきを示すに非ずや。

若し記事の一致、神の默示、完全無缺てふ標準より福音書を判断せば、大に不満足なる點あるべし。否、一步を下りて普通の人間の標準より見るも尙不完全の點少からず。後世妄りに添補したる如き形跡は素より之を認めずと雖、獨り第四福音書中耶蘇を求めたる希臘人の記事のみは(約翰傳十二、章廿一節)吾人の常に注意すべき所なり。吾人は又初代基督教會の傳トマスと後人の經驗とが福音書中に散見し居るを見るべし。今の人稱もすれば必要もなきに斯種の斷案を急ぐ者あるは余の亦取らざる所、加ふるに耶蘇の生涯は舊約の豫言を成就せりとの信念は實に傳説を傷くる者と云ふべく、又數多の物語中奇蹟的事項が誇大に叙述されたるは疑ふべからざる事實なり。さればとて福音書は、大に神話的要素を含めりとのストラウスの斷言も信ずるに足らず。假令神話的なる語をストラウスの用ゐたる如き曖昧にして、不完全なる意義に用ゆるも、尙彼の斷言は誤れりと曰はざるを得ず。吾人は唯だ耶蘇の幼年時代の物語に於て僅に斯かる神話的記事を見るべきのみ。斯の如く福音書に關しては種々なる難題われども、之が影響は記事の真髓に及ぶ者も及ぶ者も非ず。且斯等の難

題も一は四福音書の比較研究により、一は史的研究に熟達せる健全なる判断力により解決せらるゝに至るべきなり。

然らば福音書中の怪談即ち奇蹟的記事は如何。ストラウスを始め數多の學者は斯かる記事に避易し、果ては福音書を以て全然信するに足らざる者として排斥するに至りぬ。然るに最近三十年間に於ける歴史的科學の一大進歩とも云ふべきは、一層理解力に富める善意の判断により斯かる記事の歴史的價値を認め、之を利用せんとするに至れる事なりとす。今之に對する現今歴史的科學の立場を簡單に叙述するは、余が諸君に對し又本問題に對する義務と感ずる所なり。

第一、福音書編纂時代には奇蹟頻繁殆ど之を見ざるの日なかりき。現今に於てこそ一種の「スピリチュアリズム」を除くの外は奇蹟とし云へば必ず宗教問題に關する者と思ふなれ。されど彼時代は然らざりき。當時奇蹟の生じたる原因一にして足らず、人皆以爲へらく奇蹟の裏面には慥に一種の神ありて、奇蹟を爲す者は即ち此神なりとされど此種類の神に對する關係は必ずしも宗教的ならざりき。且精密なる意義に於ける奇蹟なる者は人の未だ知らざりし所なり。人智漸く進んで自然律を知り又其應用を知るに及びて、始めて奇蹟の眞義を了解すべきなり。其までは可

能と不可能との別規則と例外との別に關して一の定見あるなし。此區別の未だ明瞭ならざる間、否此區別が未だ問題ともならざる間は眞正の意義に於ける奇蹟は存せざるなり。自然律を知らざる者、争で自然律の違犯を感ずるを得んや。されば當時の所謂奇蹟は現今日よ所の奇蹟と同一の意義を有せざるは明なり。當時の所謂奇蹟は唯だ非常なる出來事の意に外ならざりき。人々不可思議の世界あるを信じ、此世界は無數の箇所に於て我等の世界と秘密の往來を爲す者なりと想像しぬ。所謂神使と稱する者を始め、魔法師、庸醫に至るまで此不思議なる力の一部を有する者とせられぬ。斯の如く奇蹟の意義一定せざりしを以て、奇蹟の眞義に關する爭論は已む時なかりしなり。或は非常に奇蹟を尊重し、之を以て宗教の眞髓に接觸する者となし、或は之を嘲笑して語るに足らずとなせり。

第二、凡て偉人に關する怪譚の起る、必ずしも其人死して後長歲月を待たず、否僅々數年をも俟たずして極めて短時日、否往々一日にて足ることさへあるに、人稍もすれば單に怪譚を含めりとの理由により、傳説を排斥し、又は之を以て後世の捏造と爲さんとするは、實に一個の偏見とこそ曰ふべけれ。

第三、大凡そ時間内に起る者は、自然律に従ふ者にて、此自然律を犯す所の奇蹟な

空欄

る者世にゐるなしとは動かすべからざる吾人の確信なり然れども吾人は又知れり宗教心に溢れ宗教を眞に我物とせる眞正の宗教家は己が唯だ盲目無情の自然律のみに支配される者にあらで自然界は或高尚なる目的に用ゐらるゝ者あると隨て人は己が中なる聖き力によりて萬物を最も善く利用するを得べしと確信せる事を「我は過ぎ往く世界の力と其束縛より自由なるを得べし」との経験は個人の心には常に一の奇蹟として感ぜらるべきなり是れ高等なる宗教には缺くべからざる経験にして之を失はば其宗教も亦倒れんのみ個人に於て然り人類歴史の大行路に於て亦然りされど斯かる経験あるに係はらず若し宗教家にして自然律犯すべからずとの原則に執着する者あらばそは如何なる意義に於て然るやを極て正確又明瞭ならしむべきなり大學者と雖も自然と精神の兩界を判然區別する能はざるこそ毫も怪むを要せざるなり且吾人は主として道徳的経験の世界隨て比喩の世界に住める者にて概念の世界に生くる者に非ざるが故に神聖なる者及び自由を與ふる者を見ては之を以て自然律に干渉し之を破り之を停止せしむる所の偉大なる勢力とあすに至るは避くべからざる自然の勢なり假令此觀念は吾人の想像若しくは比喩に過ぎざるも苟も世に宗教の存する限は決して亡ぶる事な

かるべし。

第四、自然律素より犯すべからずされど吾人は未だ自然界の中に働き又互に相働ける凡ての勢力を知悉せるには非ず物質的勢力と其活動の範圍とを殘る限を覺く知れるに非ず若し夫れ心理的勢力に關しては吾人の知識は更に僅少なるを覺ゆ強固なる意志と深き信仰とは身體的生活に影響して往々奇蹟と思はるゝ現象を起すことあるは我等の見る所なり世には可能と現實との間に明確なる區別を爲し得たる者あるか未だ一人もなし又精神は如何程迄他の精神に影響し如何程まで身體に影響するかを明言し得たる者あるか未だ一人もあらず然るを尙自然界に於ける非凡の現象と見ゆる者を悉く虚偽なり錯誤なりと斷言し得る者何處にかある素より世には奇蹟なる者なけんされど不思議なる者説明の付かざる者は甚だ多きなり今日の吾等は之を知るが故に昔時の奇蹟談に遇へば前よりも一層注意を加へ判斷を下すに一層躊躇する所あるに至りぬ大地は常に不動なりと曰ひ驢馬が物言へりといひ或は一言の下に風浪靜まれりといふが如きは吾人の信せざる所又將來とても再び信する事なけん然れども跛者は歩み聾者は見聾者は聞くを得たりといふが如きは一概に虚妄として排斥すべき者に非ざるなり。

以上論じたる所により、諸君は福音書中の奇蹟談に關し、正當なる見解と結論とに達するを得べし。されど此原則を一々實際に應用するに當りては、尙常に不確實なる點あるを免れざるべし。今余の知れる限に於て、奇蹟談を次の數種に分類せんとす。

- (一) 深き感動を興ふる自然現象を誇大せるより生じたる奇蹟談
- (二) 説話及び譬喩より出で若しくは心の出來事を外界の事實と爲す事より生じたる奇蹟談

(三) 舊約聖書中の豫言に應はせんと欲したるより生ぜる奇蹟談

(四) 耶蘇の精神力に由りて病を癒されたりとの奇蹟談

(五) 吾人の理解する能はざる者。

然るに大に注意すべきは、耶蘇が馬可を始め、其他の福音書記者が思ひし程重大なる意義を己が奇蹟に置かざりし事なり。彼は曾て嘆ずるが如く責むるが如く語りて曰へり、「爾曹は休徴と異能とを見ざれば信する能はず」と(四傳四章四十八節)斯く曰へる耶蘇が奇蹟の信仰を以て己が人格と使命とを知るに至る唯一の橋梁なりと信じたる筈あらんや。此點に於て耶蘇は福音書記者と根本的に意見を異にせりと爲さ

るを得ず。且記者は其語の影響する所を知らずして、次の如き記事を載せたり。曰く「耶蘇は人々が信する事なきに由りて、ナザレにては異能を行ひ給はざりき」と(馬太十三

十八)是れ實に注意すべき記事なり。何となれば此記事は奇蹟談を承認するに如何に慎重なる可きや。又其奇蹟談は如何なる種類に屬する者あるやを他の方面より

吾人に教ゆる者なればなり。

斯く論じ來れば、福音書に奇蹟物語あるを理由として、福音を避けんとする事の非かるは明なり。假令斯かる物語あるも、否斯かる物語の中にすら吾人が興味を感ずべき實在の存するあり。諸君よ茲に研究する所われ、假令奇怪なる者に遇ふも失望する勿れ。若し解する能はざる者あらば、之を捨てよ。時としては、永遠に捨て置かざるを得ざる者もあらん。或は後年に至りて、真理の意外の邊より現はるゝ事もあらん。余は再び言はん、諸君よ失望する勿れ。奇蹟問題の如きは福音書中樞要の地位を占むる者に非ざるなり。要點は奇蹟問題に在らずして他にあり。即ち吾人は頑固なる必然律に束縛せられて如何ともする能はざる者なるか。若しくは茲に萬物を統御する神ありて、我等は此神の自然を服従せしむる力を祈り、又之を経験するを得るやどの終結問題はあり。

我、福音書は、耶穌發育の歴史に關して、何等の明瞭なる消息をも與へず、唯だ彼が公の活動に就て告ぐる所あるのみ、就中二の福音書(馬太傳路加傳)は發育史の序論として、耶穌降誕の物語を載せたるも、顧みるを要せざるなり、何となれば假令其中に幾倍信すべき記事ありとするも、我研究の目的より見れば殆ど無意義なればなり、記者自らも再び之に説き及びたる事なく、又耶穌が曾て此事を語りとも記し居らず、却て記者の言ふ所に據れば、耶穌の母と姉妹とは彼が公けの活動を見て驚愕爲す所を知らざりしと云ふに非ずや、ポロも亦語る所なかりき、之を以て見れば、最初の傳説中には、耶穌降誕の物語を含まざりしや、明かなり、耶穌の生後三十年間の歴史に關しては、何等の傳ふる所あらず、是れ豈に驚くべき疑惑の伏魔殿ならずや、耶穌の傳記を得る能はずして、耶穌を論せんとす、知らず論ずる所何事ぞ、例へば茲に人の傳記を書かんとするに、唯だ一二年間の生活を除くの外は、其發達の歴史に付て全く知る所なしとせば、如何、耶穌の傳記に關する材料は斯の如く缺乏せるも、他側に於ては、其内容甚だ豊富なる所あり、三十年間の沈黙も何物をか吾人に語る所あらんとせり、之が内容豊富ありと曰ふは、次の三要件あるが故なり。

- (一) 此材料は綱領に於ても應用に於ても、耶穌の教訓を極めて明快に描寫せる事。
- (二) 此材料は耶穌が終に如何にして其使命を果せしやを示すこと。
- (三) 耶穌が如何なる印象を弟子等に與へしや、又弟子等が如何に其印象を傳播せしやを示す事。

是れ事實上三大要件にして、又議論の終決點なり、吾人が耶穌の特色を語るを得るは實に之あるが爲なり、少しく謙遜して之を言へば、耶穌の願望と生涯と使命とを知るは決して望まき事には非ざるなり。

若し夫れ三十年間の沈黙の如きは耶穌自らも之に關して弟子等に告ぐる所ある必要を認めざりしは、福音書によりて知る所なり、然れども消極的には之に關して尙言ふを得べき所少からず。

第一、耶穌が「ラビ」の學校に通へりとの事は甚だ疑はし、彼は曾て神學的教育を受けし者の如く、若くは聖書註解に達せし者の如く語りし事あらず、使徒保羅に至りては曾て神學教師の膝下にありし證蹟、其書簡中に歴々たるも、耶穌に於ては毫も其形蹟を見ざるなり、彼が會堂に入りて教を爲し、人を驚かしたるは、是が爲なり、耶

蘇が聖書を呼吸したるは事實なるべきも、彼は役人的教師の如くはあざりき、
 第二、其頃猶太に「エッセテス」派と稱する記憶すべき僧侶の一團ありしが、耶蘇は
 少しも之と關係せざりし筈なり、若し多少の關係ありしとせば、彼は其徒弟の一人
 たりしなるべく、而して其徒弟なる者は其保證として、是迄學びたる事と正反對の
 主義を宣言し、又之を實行せざる可からざりき、而して此「エッセテス」派が律法上の
 清淨を重んずるは其極度に達し、不潔ある者は勿論、律法を輕する者にも近づく事
 は其嚴禁する所なりき、彼等が或は孤獨的生活の辛酸を嘗め、或は特別なる住所を
 撰び、或は毎日幾回となく沐浴したる理由は、茲に存せり、然るに耶蘇の生活の状態
 は全く其反對に出で、世の罪人を求めて之と共に食したりき、已に此根本的相違あ
 るを見れば、耶蘇が此團體と相違ざかり居たりしを知るに足るべし、然り兩者は其目
 的と方法とに於て相背馳せるなり、若し耶蘇が弟子等に與へたる訓言の中に、稍「エ
 ッセテス」派に接近せるが如き者あらば、そは唯だ偶然の事のみ、何となれば二者全
 く精神を異にすればなり。
 第三、若し我等の知る所悉く偽ならずとせば、耶蘇の生活の裏面には曾て大波瀾
 若くは大革新あざりき、其訓言の中其談話の中或は威せし或は責め或は友誼を

以て誘ひ或は己と父なる神との關係若くは己と世界との關係を語る時、何れの所
 にも耶蘇が曾て精神上の大變化を受け、若しくは激烈なる心の戦を爲したる痕蹟
 は見えざるなり、譬へは地底深き所より湧き出づる泉流の清くして且自然なるが
 如く、耶蘇の口より出づる所は極めて自然にして恰かも紛らふ事なき、明々白々の
 眞理を語るが如くなりき、試に問ふ人僅に三十歳にして既に胸中の大戦を終へ、
 前に崇拜せし者を火中に投じ、曾て火中に投せし者を崇拜するに至れる者にして
 能く耶蘇の如く語るを得る者何處にかある、又問はん己が精神上の革新を爲し、以
 て人を悔改に導かんとする者にして、一言自己の悔改に及ばざる者果して世にあ
 るや、されば假令耶蘇の心には深き感動と誘惑と疑惑と有りしからんも、以上述べ
 たる如き大波瀾と大革新の存せざりしと疑ふを要せざるなり。
 第四、耶蘇の生活と言語とを見るに、彼が毫も希臘思想の感化を受けざりし事明
 かなり、是れ殆ど不思議に堪えざる所、何となれば當時ガリラヤは希臘人の群集せ
 し地たるのみならず、此地方數多の市都にありては希臘語の通用されし事、恰も現
 今「ファンランド」に於ける瑞典語の如き者ありしを以てなり、此等の市都には希臘
 の教師あり、哲學者あり、而して耶蘇が毫も希臘語に通せざりしとは考ふべからざ

る事なり。而かも耶蘇が幾分にては彼等の影響を被れりとなす事、或はプラトーン
 や、ストアックの哲學が、假令通俗的にも耶蘇の耳に入れりと云ふが如きは、絶對的
 に維持すべからざる説なり。若し宗教上の個人主義、即ち神に對する個人の靈及び
 個人の靈に對する神てふ思想を以て希臘的なりとせば、若し或は主觀主義(形體上
 を重んずる事)、或は個人の充全ある自家責任、或は宗教と政事との分離を以て
 悉く希臘的なりとせば、耶蘇も亦希臘思想の系統中にある者と云ふべく、隨て希臘
 の空氣を呼吸し希臘の泉に飲みたる者といふべし。然れども吾人は此等の思想を
 以て希臘國民固有の者と爲す能はず。否、事實は寧ろ其反對を示せる者の如し。當時
 他の諸國民と雖も、斯かる知識と感情とを有する迄に進歩し居りしは事實なり。素
 より此進歩はアレキサンドル大王が世界諸國間の障壁を打破したる以後の事に
 して、且此等諸國民中多くの場合に於て最も自由的進歩的なりし者を希臘的要素
 となす。然れども「エホバ」よ我唯だ汝と共ならんには天地は我が問ふ所にあらず(詩
 七十三篇)と歌へる詩人が、ソークラテースやプラトーンの事を知れりとは余の信
 ずる能はざる所なり。

既に足りぬ三十年間の沈黙の中より、又耶蘇の活動時代に關する暗黒の中より、吾
 人は重要な事項を知り得たり。

宗教は彼の生命なりき、敬神は彼の呼吸なりき、彼が凡ての生命凡ての感情凡ての
 理想は、皆神との關係より出でたりき。さればとて彼は唯一の熱火の外何物をも認
 むる能はざる多血的、熱狂的宗教家の如く語りし事あらず。彼は説教を爲しては又
 涼しくして麗はしき眼を以て此世界を眺め、己を圍める大小の生靈に注目しぬ。彼
 は全世界を得るも若し生命を失はば何の益あらんと(太十六)宣言しつゝ、尙此世
 の生物に向ひては暖き同情を寄せぬ。耶蘇の最も驚くべく又最大なる所は此處か
 りき。譬喩と確言を用ゆるを例とせる彼の談話は、人間談話の有らゆる種類と、人
 の感情の凡ての程度を現はしぬ。されど必ずしも彼は甚だしく熱情的、憤慨的なる
 語調を厭はざりしのみならず、諷刺的反語をさへ避けざりき。而かも斯の如きは寧
 る例外に屬す。彼の心は常に平靜にして激せず、何事をも唯一の目的に歸せしめん
 とせり。彼は曾て情激して狂せるが如き言語を漏したる事なく、又豫言者に見る所
 の煽動的語調を現す事稀ありき。彼の双肩には至大なる使命の懸れるが故に、彼は
 小心翼翼として周囲の生靈より來る凡ての印象に其耳を傾注したりき。是れ耶蘇
 の心事平靜にして波立たず、頑として巖の如き者ありたるを證するに足る者なり。

悲む事と泣く事、笑ふ事と躍る事、富と貧窮、飢ゆる事と渴くこと、健康と病氣、兒戯と政治、聚むる事と散らすこと、家を出で旅立すること、旅館と歸省、婚姻と葬式、生ける者の奢れる家と死ぬる者の墓種蒔く者と刈取る者、葡萄園の主人と市場にある怠れる僕、失へる羊を求むる牧者、海中に眞珠を求め得て歸る商人、小麦の粉の中に醜態を入るゝ女、銀を失ひて搜索する女、不義なる裁判官と寡婦の訴訟、此世の食物は消滅すべき事、師弟間の精神上の關係、王者の榮光と執權者の野心、可憐の兒童と忠なる僕等、凡て此等の譬喩は、耶蘇の説話に生ける力を與へ、精神の幼稚なる者をして容易に了解する所あらしめたりき。

是れ管に耶蘇が譬喩を用ゐたるを示すに止まらず、非常の場合にも彼の精神が自由快活なりし事、到底豫言者の比に非ざる事を示す者なり。彼處の花、此處の童兒、空の鳥、屋上の雀、何れも彼の涼しき眼を引きぬ。『ソロモンの榮華の極の時だにも、其裝ひ此花の一に若かさりき』とは彼が野の百合を嘆賞するの言葉なりき。彼は元來超世界的なるに、此世界を擯斥せざるのみか、世界萬有は彼が知れる神と關係ありて、神は即ち其保護者なるを知りぬ。曰く『爾曹の天の父は之を養ひ給へり』(馬太傳六章二十六節)と譬喩にて語るは、彼が最も得意とせる所なりき。而して譬喩のある所は自ら同情

あるを示す。彼は枕する所さへなかりしに、其語る所は世と全く斷ちたる人の如く。からず又大愼悔を爲したる人若しくは熱狂せる豫言者の如くもあらず、却て其心に坦然たる平和の海を湛だへ、能く人を生かすの力を有てる者の如し。彼が彈せし所は最強の音調なりき。彼は人に向て避く可からざる決心を促し、一人たりども之を逃るゝを許さざりき。而して人には極めて不思議なる事も、耶蘇には平易なる真理なりければ、其語る所も平易ある真理を告ぐる者の如く、而して之を語るには母が愛兒に教ゆるが如き言葉を以てしたりき。

第三回

前回には福音書を論じ、そが耶蘇の發達に關して沈黙せるとを陳へ、次に耶蘇の説教法の特色に移り、其語る様は豫言者に似て、又豫言者の如くならず、其言葉は常に平和と喜悅と確信とに満てるに及びぬ。彼は『汝等の財寶のある處には汝等の心も亦あり』といひて斷乎たる決心と戰の必要を説きながら、又、神は善き人にも惡しき人にも太陽と雨露とを與へて萬物を化育し、其實を結ばしむとの譬(馬太傳五章四十五節)を説き、彼が心の平和なる側面を現はしぬ。彼は常に『神我と共にあり』との意識の中に

生活せり。彼の食物は神の旨を行ふ事にてありき。されど尤も注意すべきは彼が語る所豪膽なる悔改者の如くならず。さればとて世を一蹴せる遁世者の如くも非ざりし事なり。耶蘇の最も偉大なる所其心に眞の自由のある所茲にあり。變化極りなき天地萬象一として彼が目を誘はざるはあかりき。彼乃ち取て之を譬喩となせば茲に一段の光彩は加はりぬ。彼の眼光は自然界の幕裡に徹し、何れの處にも生ける神の御手あるを認めたりき。

茲に耶蘇の現はれし頃既に人あり、先ちて猶太人の間に働き居れり。之を「バプテスマ」の約翰と、なす。抑々ヨルダン河の邊に一大運動の始まれるは僅に數月前のことなりき。此運動は數百年間此民を騒がしたる「メシヤ」運動と全く性質を異にせり。素より約翰も「神國近矣」と叫びぬ。而して其意味は主の日、審判の日、即ち世の終の近ける事にてありき。然れども約翰の所謂審判の日は神が異邦の民を罰して猶太國を隆興するの日にあらず。實に猶太人の審判かるゝ日を指せり。曰く「誰が爾曹に來らんとする怒を避くべきことを告げしや。爾曹我等が先祖にアブラハムありといふ事を意ふ勿れ。我爾曹に告げん神は能く此石をもアブラハムの子と爲らしめ給ふなり。今や斧を樹の根に置かる」(馬太傳三章七)と。アブラハムの子なるや否は此審判の

問題にあらず。問題は唯だ正義を行ひしや否やにあり。斯く言ひたる約翰は先づ自ら悔改をなし、聖き生活に入りぬ。其徴として身には駱駝の毛衣を纏ひ、蝗蟲と野蜜を食とせり。されど遁世者を造るは彼の目的にあらず。少くとも其主眼にあらず。彼が悔改を勧むるや、人を撰ばず人の職業如何を問はず。而して其教ゆる所は極めて簡單なる真理なりき。即ち税吏に向ひては曰く「定例の税銀の外に多く取るとなかれ」(路加傳三章十三節)兵卒に向つては曰く「人を強暴し或は誣訴ふることを爲す勿れ。得る所の給料を以て足れりとすべし」(路加傳三章十四節)富豪に向ては曰く「爾の食物を分ち與へよ」(路加傳三章十一節)而して凡ての人に向て曰く「貧き者を忘るゝ勿れ」(福音書中此句なし。蓋し約翰十一節)と。約翰が求むる悔改の徴は斯の如きのみ。素より此徴の裏面には彼が眼目とせる精神上の變化を含めり。悔改の洗禮てふ一個の行爲は彼の目的にあらず。彼が唯一の目的は信賞必罰なる正義の神の前に正義の生活を爲さしむることなり。彼が儀式、犠牲、律法等に付て語りし事なきは蓋し重を置かざりしが故ならん。眼目は人の品性と道徳的行爲との如何にあり。審判の日にはアブラハムの神、此標準に照らし、て此民を審判べしとは約翰の信する所ありき。

此處に暫く一考する所あらしめよ。實に此點に關しては疑問解答已に百出せるに

疑問は尙息まざるなり。素より約翰が神の王權と神の聖なる道德法とを宣傳したるは明白なる事實なり。又彼が其同胞なる猶太人に向つて、唯一の要點は己が心の状態と德行とに最も多く心を用ゆるに在りと言へることも明かなり。又彼が道德的と考へたる者の中には決して特別なる訓練を要する者若くは人爲的の道德等を含まずして、唯だ普通の道德を指したる者なる事も明なり。然れども茲に次の如き疑問あり。

第一、若し「心の聖善なる事は永遠の價值を有す」どの單純なる真理が約翰の唯一の眼目なりしとせば、何の必要ありてか彼は審判日の來る事、木の根に斧の置かれし事、消えざる火にて焼かるゝ事を語りしや。

第二、曠野に於ける悔改の洗禮と、審判日近けりとの教とは要するに當時の政治的、社會的狀態の反射若くは生産物にあらざるか。

第三、約翰の教は何の新らしき者を含みたるや、約翰が宣傳せし所にして未だ猶太教が言はざりし者は何ぞや。

以上三種の疑問は互に親密なる關係を有せり。以下此等の疑問に付て詳説せん。
第一、戲曲的、世終學的、結構、即ち神國の到來、世終の切迫等——之を歴史に見るに凡

そ、深き經驗と眞面目なる心より、神を語り、神聖を語る者は概して世終の切迫を世に警告するを常とす。唯だ其意義に救世と審判の區別あるのみ。今之が理由を説明するは難きにあらず。蓋し宗教は唯、神の中に神と共に住む事のみならず、それが自然の結果として人生の意義を悟り、人間の責任を感ずるをも含めり。人若し此地位に達せば彼は必ず發見せん。宗教なければ人生は無意義にして個人も團體も五里霧中に彷徨して、終に倒るゝの外なきを「彼等は迷ひて思ひ」に己が道を辿り行けり」とは之の謂ひか。されば神を見たる預言者が世を擧て迷の淵に沈みながら尙平然として意に介せざるを見ては、憂と懼を抱かざるを得ざることを、恰かも旅行者が其友の知らずく千仞の谷に急げるを見て、之を救はん爲には何物をも惜まざるに似たり。危機一髪而かも警戒を興ふるの機未だ過ぎたるに非ず、「引返せ」と絶叫するの時、尙存す。されど一刻の猶豫は萬事を水底に葬らんとす。時は逼れり、「最早や瞬時も躊躇すべきにあらざ」とは時の古今を問はず。國の東西を論せず。預言者が其民を悔改めしめんとする警醒の聲ならずや。今預言者約翰は其國の歴史を達觀し國民が臍を嚙むべき審判日の已に逼れるを見たり。彼は斯かる不信仰、無智、輕薄、放逸の民が遠き以前に滅亡する事なくして、今日尙餘命を存するを見て怪訝の念に

堪えざりしなり。されば悔改の時機なほ存せる事は約翰には最大奇蹟と思はれ、只だ神の寛仁大度を謝するの外なかりき。然れども彼は世の終の來る最早遠きに非るを確信せり。斯の如く世終近にありとの觀念は常に悔改運動に伴ふて起る者なり。而して此觀念が如何なる形にて現はるゝやは其當時の事情に由る者にて左支で大切なる問題に非ず。思想上の組織と化したる宗教ならば、或は世終の近きを叫ばざらんも、實際的宗教は噴火山的と死火山的との別こそあれ、一として世終の觀念を有せざるを得ざるなり。

第二、政治的社会的状態を以て此宗教運動の原因となす事——本問題に對する余

の立場を簡單に示さんに、諸君の知る如く當時猶太の平和的神政時代は已に遠き過去に屬し、恐ろしきアンチオカス、エビファチス(紀元二世紀の頃猶太の宗教を撲滅せんとしてシリヤの王也)の時代より當時に至る二百年の間、干戈相續き民寧日かく、マカベー家の王國起るかと思へば忽ち内亂外敵の爲に瓦解しぬ繼で羅馬人國境に攻入り、鐵拳を揮つて猶太人の希望を悉く破壊し去れり。之に加ふるに「エドム」人の成上り者へ「ロデ」王の壓制は國民の生活上の快樂までも奪ひ盡し、憐れ此民をして手痿へ足痿へたる不具者となし了りぬ。嗚呼、茲に至れば人間の眼より見れば、此國の運命を挽回するの望は

既に絶え果てたり。昔時神が彼等の祖先になしたりと云ふ立派なる契約も思へば、只だ虚構に過ぎざりしが如く、猶太人の命數も已に盡きたりと見えぬ。斯かる時代に彼等が世に絶望し絶望の餘り神政體と離る能はざる關係ある者をも捨て、顧みず世の榮華も、政治上の權力も、名譽、財産、勞力、争闘も今は顧みるの價なく、其代りに天與の新王國が貧き者、虐げらるゝ者、弱き者の爲めに設けらるゝありて、此處には柔順なるもの、忍耐なる者、義の冠を戴くべしとの思想に達するまで、間一髪を餘すのみ。加ふるにイスラエルの國神、耶華エホバに對する觀念は數百年來移り變りて、今は耶華を以て強者の武器を碎き、祭司の虚禮を賤め、正しき審判と憐憫とを好み給ふ者なりと信せし時なれば、隨て此神は憐れなる者を救はんが爲に、寧ろ其民の憐れなる様にあらんとを希へる者なりと教ゆるに至るは人の陥り易き傾向なり。實際に於ても時勢の必然的結果なるが如く見ゆる所の宗教と其希望とを構成するは、何の苦もなきとなり。斯かる宗教は神の奇蹟的干渉を待望むこと、貧苦の海に沈む事とを特色とせる悲運主義シラビズムに外ならず。恐ろしき時勢は斯かる多くの思想を造り、又之を發達せしめたり。されば偽りの「メシヤ」の野心的計畫や、熱狂的「パリサイ」人の政略は此原則に照らして説明すると容

易からんも、約翰の教訓の眞義を説明するにも同じく之に據らんとするは甚だ當を得ざるなり。世界解脱の觀念が其歩を進めて、人々神を仰視するに至れるとは素より之によりて説明するを得ん何となれば艱難は祈るとを教ゆればなり。然れども艱難其者は決して道徳上の力を生ずる者にあらず。然るに約翰の教訓にありては道徳上の力てふとは其第一の要素にてありしなり。約翰が道徳力に訴へ萬事を道徳と責任との上に置かざるべからずと教えたるは、單に窮せる者の神頼みといふ心より出でたるにあらず。又時勢より汲取りたるにあらず。其由て來る所は永遠の源泉にてありき。

回顧すれば我祖國が無殘の敗北をなせし後、フヒテが此ベルリンに於て著名の大演説を爲せしは今を距る事百年を出でず。抑々フヒテは此演説によりて何を爲せしや。彼は先づ國民の前に鏡を掲げ、彼等の罪惡と其結果、即ち輕躁、不信仰、我儘、迷妄、懦弱等を之に映せしめたり。其次は如何劍を取つて立てと命せしや。否らず。彼等は已に劍を取るの力を失へり。否劍は已に彼等の弱き手より奪はれたり。然らば彼は何を命せしや。曰く罪を悔ひ、心を改め、神を信じ、凡ての道徳力を強め、靈と眞に歸り、靈によりて面目を一新すること。是なり。彼が強き人格は同志の人の助力と相待つて國

民に非常なる感動を與へたり。彼は塞がれる力の泉を再掘するを得たり。何となれば彼は己を助くる眞の力を知り、自らも曾て生命の水を飲みたるとあればなり。素より時勢の必要が彼を導き、彼を憤起せしめたるは疑なき事ながら、若し其演説を以て唯だ國民悲運の産物に過ぎずとすものあらば、笑止千萬と言ふべきなり。否彼の演説は寧ろ悲運と戦はんが爲めに爲されたるなり。フヒテスマの約翰の教訓も、否、耶穌基督の教訓も、亦同一轍のみ。約翰及び耶穌の教が此世と其政治を捨てたる人に向つて語られたること、但し約翰に付ては之に關する直接の記事なし。國民を悲境に沈めたる教導者と係りなきこと、凡て世俗の事に目を注がざりしこと等は、或は時勢の結果として説明することを得ん。然れども約翰耶穌の宣傳せし救世策に至つては決して時勢の産物に非ざるなり。否國民の道徳心を喚起し、凡ての望を唯だ此一點に繋がんとするは俗眼より見れば寧ろ迂遠なる方法ならざりしか。然らば人を屈するも人には屈せざる其強健なる力は何處よりか來れる。是に於て吾人は第三の問題に入る。

第三、約翰の運動の新要素は何ぞ。——神は人類の上に最上權を有せること及び宗教上至重なる者は聖と善となることを主張し、以て宗教中の異分子を排斥せんと

せしは所謂新要素といふべきか否然らば約翰及び基督は何の新らしき者を齎らせしや諸君よ抑々宗教に於ける新奇なる者は何ぞやといふ如き問題は宗教家の提出すべき問題に非ざるなり人類は耶蘇基督より以前已に長く生存し心靈上知識上少なからざる経験を爲せし者なるに今に及んで何の新らしき者の起るべき理あらんや加ふるに一神教は遠き以前より信奉せられ且つ一神教的敬神の念は已に幾分か模型的となりて早くより處々に存在し終には一學派の間に否全國民の間に現はるゝに至りぬ誰か此點に於て詩篇の作者が「主よ我只だなんちと共あるを得ば天も地も復問ふ所にあらず」(詩七十三篇二十)と曰へる強く且深き宗教上の個人主義に卓越するを得る者ぞ誰か豫言者ミカが「人よ彼先きに善きことの何事なるを汝に告げたりエホバの汝に要めたまふことは唯だ正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神と共に歩むことならずや」(米迦書六)と曰へるに勝るを得る者ぞ然るに既に數百年以前に於て斯くは語られたるなり是に於て猶太の學者は吾人を難して曰ふ汝等は基督より何を得んとするや彼は何の新らしき者をも携へざりしなり」と余はヴルハウゼンと共に答へて曰はん素より耶蘇の教訓も約翰が説きたる悔改の教訓も已に昔の豫言者の語りし處たり且つ當時の猶太の傳説中に

も發見するを得べし否々「パリサイ」の人も已に之を知れり然れども惜むべし彼等は唯だ之に加ふるに多くの異分子を以てせり即ち本來單純なる教訓を一變して煩累に堪えざる者曲解されたる者實行に適せざる者となし千百の儀式條文を造り之を宗教の眞髓と心得其大切なるや憐憫と審判とに比すべしと爲し以て教訓の眞價を失はしめたり彼等は實に事の輕重を區別するを知らず彼等の目には萬物悉く同平面に横はれり彼等は凡ての者を同一の織物中に織込さんとせり而して聖と善とは必竟此世の一大織物中の一緯線に過ぎずと思へり是に於て諸君は再び問はん「然らば所謂新らしき者とは何ぞや」と然れども一神教にありては斯問題は甚だ不適當なり若かず次の如く問はん「は約翰及び基督の教訓は純粹無雜にして活方に満てる者ありしや」と然らば余は答へて曰はん諸君よ乞ふイスラエル國民の全宗教史を檢せよ又一般の歴史を研究せよ何れの時代何れの所にか神と善との使命に關して約翰及び耶蘇の教訓はと純粹にして且つ眞面目なる者ありしや蓋し純粹と眞面目とは相伴ふを常とす聖と善との清き泉は昔時より開かれ居りしも泥沙其中に堆積して水爲に濁れたり「ラビ」及び神學者來つて之を蒸溜せんとして多少成功したるも終に其甲斐なかりき今や清泉新たに開け祭司や神

學者が宗教の眞髓をして窒息せしめんとて堆積せし泥沙を破つて噴出せるなり。余輩は祭司等が宗教の眞髓を窒息せしめたりと曰ふ、何となれば之を歴史に見るに神學は屢々宗教的生命を死なしむる者あればなり、次に要素と爲すべきは力なり。「パリサイ」の師は曰ふ神を愛し又隣を愛せよとの命令は凡の事を含めりと、其詞の麗はしき、耶蘇の口より出でたらん心地するなり、されど之に伴ふ實行は如何、嗚呼此國民、就中「パリサイ」の弟子等は眞面目に此詞を實行するの徒を擯斥したるあり、詞は麗はしきも心は弱はし、弱きが故に却て有害なりき、詞のみにては何をも爲さず、唯だ詞の裏にある人格の力を待て始めて事を爲すべきなり、然るに「彼は學者の如くならず、權威を持てる者の如く教わたり。」(馬太傳七章)とは弟子等が耶蘇より受けし感覺からずや、弟子等の爲めには耶蘇の言葉は生命の語、萌へ出で、實を結ぶ種子にてありき、所謂新らしき者とは即ち是れ。

「バプテスマ」の約翰は此種の説教を以て已に運動に着手しぬ、彼も亦國人の指導者に向て反對の地位を占めたり、何となれば「改心せよ」と叫びて只一途に悔改と善行との途を教ゆる者が宗教と教會の役人的番人等に向ひて反對の地位に立つは當然のこととあればなり、されど約翰は終に悔改の説教の外に出でざりき。

斯かる處に耶蘇基督は顯はれぬ、彼は先づ何處迄も約翰の言ふ所を善しとし、且つ約翰の人物を承認せり、恐らく約翰の如く耶蘇より讚辭を受けたる者はあらじ、耶蘇曰はずや「婦の生みたる者の中、未だ「バプテスマ」の約翰より大なる者は起らざりき」と、(馬太傳十一)耶蘇の事業は約翰より始まり、約翰は耶蘇の先行者なりとは耶蘇が屢々人に告げたる所なり、終に彼は約翰より洗禮を受け、約翰が起せし運動に身を投じたりき。

然れども耶蘇は約翰の事業のみに足を止めざりき、彼の顯はるゝや約翰と同じく「天國は近けり悔改めよ」(馬太傳四)と教えたれど、其教が此處には喜の使命となれることを面白けれ、耶蘇に係はる傳説の中に、耶蘇が語る所は「福音」にして、恵と喜とを與ふる者なりと感せられたる、と程、確かなる者は、あらず、福音書の記者、路加が耶蘇の公生涯に門出する記事を書き始むるに、豫言者イザヤの語を引用せるは善き思ひ附きと云ふべし、曰く「主の靈、われに在ます、故に貧き者に福音を宣べ傳へんとを我に膏を沃ぎて任じ、心の傷める者を醫し、又囚人に釋さん事と替者に見させん事を示し、又歴へらるゝ者を縦ち、主の禧はしき年を宣べ播めんが爲に我を遣はせり」(路加傳四章十八節)又耶蘇自からも語りて曰く「凡て勞れたる者、重きを負へる者は我に

來れ我なんぢを息ません。我は心柔和にして謙遜者へんそんあれば我わが軛くわを負ひて我に學べ
 汝等心に平安を得べし〔馬太傳十一章二十八、二十九〕是れ實に耶蘇の言行を一貫せる思想にして
 其教えし所行ひし所の主旨は悉く其中に含まれぬ。然るに耶蘇の教は疑もなく約
 翰のそれをして遠く下流に漂はしめたりき。約翰は言はず語らず祭司學者と反對
 の位置に立ちたるもの、未だ公然相衝突するに至らざりき。滅びて且つ興らんこ
 と〔路加傳二章三十四節〕古き人に對する新らしき人及び神の人等の思想は實に耶蘇に始ま
 れり。耶蘇は役人的指導者に反對せり。指導者に反對せるは取も直さず普通一般の
 人心に反對せるなり。見よ彼輩は神を以て己が家の儀式を自ら監督する專制君主
 となせども、耶蘇は常に神と共なるを意識し、神の前に呼吸せり。彼等は只だ神の律
 法を通じて神を見んとせり。其律法や自家の細工によりて、谷あり、岐路あり、間道あ
 る一大迷路と化し去れり。耶蘇は時と所を撰ばず神を見、又神に接觸せり。彼等は千
 を以て數ふべき神の命令を抱持し之によりて神を知るを得たりと信せり。耶蘇は
 唯だ一の命令を抱持し之によりて神を知れり。彼等は此宗教を世俗的職業と化し
 去れり。世には之は忌はしき者はあらず。然るに耶蘇は生ける神と靈魂の貴重な
 る事とを世に告げぬ。

今耶蘇の教訓を大觀するに之を三項目に分つことを得べし。而して此等の項目は
 孰れも全教訓を含めり。全教訓は充分に各項目の中に現はる。

(一) 神の國並に其到來、

(二) 父なる神並に人間靈魂の無限の價值

(三) 高調なる正義と愛の教、

抑○耶○蘇○の○説○教○の○雄○大○あ○る○は○其○單○純○に○し○て○而○か○も○豊○富○な○る○所○に○存○す○其○單○純○な○る
 や以上三項目中何れを擧ぐるも其本義を盡せるによりて知るべく、其豊富なるや
 各項目が思想の無盡藏なるが如きにより、又耶蘇の語れる確言と比喻の中には汲
 んで悉きざる意義の存するによりて知るべし。殊に注意すべきは耶蘇の言葉の背
 面には耶蘇の自ら立てることあり。されば數百千年を経たる今日彼の言葉は尙生
 けるが如く吾人の耳に響くなり。『語り給へ然らば我見る事を得ん』とは之を證する
 味ある語なり。

吾人は進んで三項目を研究し其中に藏れある思想を開陳せんとす。何となれば耶
 蘇の教の本色は實に此處に存すればなり。之を論し終れば更に福音と人生の大問

題との關係を明かにせんとす。

(一) 神の國並に其到來

耶蘇の所謂神の國は、一には凡て舊約的豫言者的に想像されたる審判日并に將來起るべき目に見ゆる神の王國を指し、一には今耶蘇の使命によりて始まらんとする心靈界の王國を指せり。耶蘇の教は此兩極に跨かりて其間には多くの階段と奧義との存するあり。一方には神國の到來は將來の事件にして神國は有形的世界なりとせられ。他方には神國は靈の世界に屬する者にて今や已に到來して方さに人の心の戸を叩きつゝありとせらる。諸君は神の國並に其到來てふ觀念は一定の意義を有するものにあらざるを知るならん。耶蘇は此觀念を猶太の宗教的傳説より取り。此觀念や傳説中に於ても已に重を爲す者なりしが、耶蘇は此觀念の中、尙生ける力ある要素を採用し之に新たなる者を加へたり。彼が排斥したるは傳説中殊に世俗的快樂を本とせる希望のみなりき。

耶蘇も猶太の思慮ある宗教家と同じく、神の國と此世の國とは萬事正反對なること及び此世は惡と惡人との世界なることを深く悟れり。是れ決して座上の空想にあらすして自ら見自ら感じたる強き生ける經驗に外ならず。左れば此世の國は當

然滅亡すべく、又滅亡せざるべからず。而して之を滅亡せしむるは戰に由るの外ならず。とは彼の確信せる所なりき。戰ふべし。而して勝つべし。とは惡の世界に對する。耶蘇の思想にして、此思想や實に昔時の預言者に於けるが如く、耶蘇の心には、瞭々として活劇を見るが如き者ありき。斯くて此活劇の終に彼が父なる神の右に座し、十二の弟子等が位に座して、イスラエルの十二の血族を審判するの光景に至るまで、歴々として彼の眼に浮びしならん。耶蘇の想像や全く當時の思想と符合せりき。是に於てか説をなすもの少からず。曰く此戰爭的活劇の「パノラマ」こそ實に耶蘇の教の眼目にして、又其根本思想あれ。其他は凡て附隨の件又枝葉の問題のみ、恐らくは後人の附會したる者ならん。中心問題は唯だ將來に對する戲曲的希望のみと、余は此説に左袒する能はず。苟くも新紀元を開く第一流の人物を批評するに當り、唯だ時代思想の産物として之を論じ、其人の獨特なる又偉大なる點を後に置くこと。の如何に背理なるかは世既に定説あり。蓋し成るべく物の特色を除きて凡を同一の平面に置かんとする傾向は、或人には眞理に忠なる心より出で寧ろ稱讚すべき事なるも、其結果や人を誤謬に導く恐れあり。若夫れ識ると識らざるとの別こそあれ、凡そ大なる者を否定し、崇高なる者を平凡視せんとする傾向に至りては更に強

き者あるを覺ゆ。抑、神の國と惡魔の國とが兩々相對持して互に挑戰し、將來起るべき最後の戦には昔時天より放逐されたる惡魔が地に於ても征服さるべしとの思想は耶蘇が當時の人と共有せし所たり。耶蘇は自ら此思想を造りたるにあらず。唯だ此時代思想中に生長し以て此思想を抱持せしのみ。然りと雖も、神の國は顯はれて來るものに非ず。路加傳十七、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百の思想及び神の國は已に來れりとの思想に至りては實に耶蘇獨特の創見と曰はざるを得ず。

一方には神國に對する戲曲的、未來的觀念あり他方には「神の國は汝等の衷こころにあり」(路廿七)と曰ひ、靜且つ強なる神の力なりと教えらる。諸君よ此兩極を調和せしめて其間に架橋するは決して容易の業に非ず。然るに如何なれば人は他の傳説や教訓に於ける如く、此兩極の矛盾に氣付かずして兩者並存する者なりと思へるや。此理由を了解せんと欲せば、先づ過去の歴史に遡りて攻究すべきなり。余思ふに今より數百年の後には吾人が後世に遺す思想の中にも多くの矛盾發見せられ、吾人が能くも之を不問に附したるを怪する、の日あらん、吾人が眞髓と思ひし者の中には多くの無味乾燥なる介殼現はれ來り。何とて昔時の人は斯くまでも近眼にして物の眞髓を明かに見分くるの明なかりしやと人をして了解に苦ましむるの時あら

ん。今日にては吾人が毫も區別を認めざる所にも、何れの日か刀を加へて之を分解する者なきを保せんや。されば吾人は切に望む、他日公明正大なる裁判者出で來りて、吾人の思想を判斷するに、吾人が知らず、傳説より受けて自らは之を矯正するの力なく又其必要を感ぜざる如き者に據らずして、吾人自己の中より發したる者により、又傳説と時代思想とに如何なる變化若くは改善を加へたるやに據らんことを。

抑も神の國に關する、耶蘇の教に付て、傳説と獨創とを區別し、核と皮とを分つは歴史家に取りて困難なる責任重き事業たり。此事業は果して何處迄進み得べきや。耶蘇の教より其本來の特色を取去り、之を一種の道德論に過ぎざる者となすは吾人の欲せざる所なり。耶蘇の教を單に時代思想の産物として説明する論者は或は惜氣なく其教の特色と力とを捨つべきも、吾人は之に倣ふを欲せざるなり。傳説の中に荷くも一片の道德力を認むるを得ば、耶蘇は之を捨てざりしかれど若し其中に國民の利己的希望を増進せしむるが如き者あらば之を捨つるに躊躇せざりき。唯だ夫れ此撰擇を見るのみにても、耶蘇の言葉と教訓とは深き智識の泉より出でたるを知るべきに、此にも優る證據は尙數多あるなり。若し耶蘇の所謂神國と其到

來の眞義を知らんと欲せば、耶蘇の語れる比喩を讀み深く考ふる所あるべきなり、然らば其何を曰へるなるやを覺るを得べし、耶蘇の教によれば神の國は個人を通じて來る、即ち個人の心に入り之を占領するによりて來る者たり、神國とは神の支配する所たるは言ふまでもなき事ながら、其支配たるや聖き神が各個人の心を支配する事にて、語を換へて曰へば神自ら其力を以て臨む所即ち神の國たるなり、此立脚點より見れば有形的、世界史的解釋を爲す者の言ふ如き戯曲的分子は消えて跡なく、隨て未來に關する有形的希望も亦悉く絶滅せるなり、或は播種たねまきの譬馬太傳十三章廿三節、或は價高き眞珠の譬馬太傳四十三章四節、或は畑に藏れたる寶の譬馬太傳四十三章四節、諸君若し此中より任意に撰びて靜思する所あらんには、神の國は即ち神の言葉、否寧ろ神自身なるを知らん、されば神の國は天使と惡魔との問題にあらす、王と侯伯との問題にあらす、唯だ神と靈魂、靈魂と其神とに關する者たるなり。

第四回

吾人は神の國と其到來に關する耶蘇の教を論じて前回の講演を終りぬ、而して此教が審判日に關する舊約的、豫言者的觀念より基督に始される靈的王國の到來て

ふ思想に至るまで、有らゆる意義を包含せることを述べ、最後に眼目は第二の意義にある所以を示さんと試みたり、今之を詳論せんとするに先ち、此兩意義の中間に存する二個の重要な思想に付て語る所あらんとす。

第一、惡魔の國の破壊と惡鬼の征服とを以て神の國の到來と爲す事——此思想に由れば、此時迄は世は惡鬼と惡魔の天下にして、彼等は人々否、全國民を己が所有となし、意の儘に之を壓制したるあり、今や耶蘇は惡魔の業を毀たんが爲に來りぬと宣言せしのみならず、實際惡鬼を逐出して人を救ひたりき、話頭一轉、抑々福音書中最も奇異の念を起さしむるは、惡鬼に關する記事甚だ多く、いて、而かも大事件なるが如く記載されたる事なりとす、是に於てか福音書を以て荒唐の記事に富める者とあし、之を排斥する者少からず、茲に知り置くべきは之に似たる記事が當時の希臘、羅馬及び猶太の文書中にも多く發見せらるゝ事なりとす、惡鬼憑依の觀念は當時何れの地方にも行はれ、學者は之に依りて多くの病症を説明したりき、唯だ夫れ斯の如き説明あり、此故に精神病者が實際或る靈物の來りて我身體に宿れりと爲すに至るは怪むを要せざるなり、試に今日の科學が神經病の大部分は惡鬼の憑依に由ると説明し、新聞紙は此學説を全國に普及したりと假

定せよ、忽ちにして我こそは悪鬼に憑れたる者なれと信ずる精神病者の續々として出づるや必せり、學説と信仰とは強く人心を動かす者なれば、數百年來否、數千年來精神病者中に憑依病なる一種の階級を見るは自然の理なり。されば悪鬼及び其憑依に關する特別の觀念、若しくは教理を獨り福音及び福音書に歸せんとするは歴史に暗き者の愚論のみ、福音書中惡鬼に關する觀念は當時世に行はれたる思想より出でたるに外ならず、今の世は此種の精神病者を見る稀なりと雖も、全く其跡を絶ちたるに非ず、斯かる病者ある時之に處する最良の道は、強き人格より出づる言葉なるは昔も今も同一轍なりとす、強き人格の言葉は能く惡魔を威嚇し、又之を壓伏して病者を平癒せしむべし、當時、パレスチナには此種の病者甚だ多かりし者の如し、耶蘇は彼等の中に惡鬼と惡魔の力ありとなし、彼を信する者の爲に驚く許りの力を以て之を逐出したりき、是に於て論歩は第二の要點に入る。

第二、今は獄中の身となれる「バプテスマ」の約翰は憐れ一團の疑惑に襲はれぬ「來るべき者」は耶蘇なるか、之を耶蘇に問はんとて二人の弟子を遣はしぬ。(馬太十一、三、一) 嗚呼此疑問は世に哀れを感せしむる者はあらじ、又之に對する主の答は世人の心を起たしむる者はあらじ、委しき物語は之を省き直に耶蘇の答を聞かん、曰く

爾曹が聞く所見る所をヨハネに往きて告げよ、替者は見、跛者は歩み、癩病人は

潔まり、聾者は聞き、死者は復活され、貧者は福音を聞かせらる。(馬太十一、五、一)

是れ即ち神國の到來にてあるなり。否、斯かる救世的事業の中に神國は已に存したりき、耶蘇は貧苦、疾病其他有らゆる人間の悲運と戦ひて實際之を征服したるを示し、約翰をして新時代の方さに到れるを悟らしめんとしたりき。憑依病者を治するが如きは救世事業の一端に過ぎざりしも、耶蘇は之によりて己が使命の意義と證據とを示したるなり。さればこそ彼は病者、貧者及び憐れなる者に行きたるなれ、而かも彼等に對して耶蘇は世の道德家の如くならず、又涙脆き感情家の跡を留めず、倫理學者の如く惡の分類を爲すにもあらず、平癒を求むる病者の信仰を問ふ暇なく、又苦痛と死とに興味を感じたる事もなし、彼は曾て病は即ち健康にして、禍は即ち福ありと曰ひしことあらず、病を病とし健康を健康と呼びたりき、彼は有らゆる災禍と悲運とを以て恐るべき者、惡魔の國に屬する者となしぬ、然れども彼は己の中に世を救ふの力あるを自覺せり、而して弱者を健かにし病を癒す事は、只だ己が事業の一進歩に過ぎざるを知りぬ。

尙言ふべき事あり、神の國は耶蘇が人の病を癒し、殊に人の罪を赦すことによりて

來る。此處即ち神國は心の中に働く力なりとの觀念に移る所なり。彼は病者、貧者を呼べると同時に罪ある人を招きたりき。此招こそ眼目の存する所なれ。人の子は喪ひし者を尋ねて救はん爲に來れり。〔路加十九〕是に至りて始て神國は外形的の者に非ず。又單に未來的の者にも非ざるに至りぬ。而して救はるべき者は國民に非ず。國家に非ず。實に個人にてありき。個人は新たなる人間となるべく、而して神の國は人の力なると同時に目的たるなり。曰く人々は畑に隠れたる寶を求めて之を得たり。〔馬太十三章〕曰く彼等は所有物を悉く賣りて價高き眞珠を買へり。〔馬太十三章〕曰く彼等は悔改めて兒童の如くなれり。されど之により贖はれて神の子、神の勇士とはなれり。

「人々勵みて天國を取らんとす、勵みたる者は之を取れり」と曰ひ。〔馬太十二節〕又天國は種子の如し、生長して實を結ぶべし。〔各所にあり〕と曰ふ。何れも耶蘇が這般の意義を含ませたる者と知るべし。故に天國は人の心奥に入る所の一種の精神的勢力にして、只だ靈によりて知らるべきなり。されば一方には神の國は天にありて審判日と共に來る者となしながら、尙神の國は此處に視よ、彼處に視よと人の言ふべき者に非ず。夫れ神の國は爾曹の衷にあり」と耶蘇は言へるなり。〔路加十七章〕

天國は已に耶蘇の救世事業に由りて來り、又現に來りつゝありとの思想は、後に至り弟子等の抱かざりし所たるのみならず、彼等は一步を進め神の國を以て全然未來的の者となしぬ。而かも變れるは唯だ名稱のみにて根本思想は依然たりき。此點に於ては、メシヤてふ觀念と其經歷を同ふせり。余輩が後に見る如く異邦に於ける基督教會の中には、耶蘇を「メシヤ」と呼びて其使命を曰ひ現はしたる者一人もなかりしが、其眞髓は尙滅びざりしなり。然り神國に關する教訓の眞髓は滅びざりき。而して神國の三要素は左の如くありき。

- (一) 此國は超世界的にして上よりの恩賜なり、自然的生活の結果にあらず。
- (二) 此國は純然たる宗教的福祉にして、生ける神との靈的關係なり。
- (三) 此國は人間至大至重の經驗にして、其生存の全部を貫きて之を支配す。何となれば之により罪は赦され、人の悲境は破らるべければなり。

神國は謙遜ある者に來り、之を變へて新らしき人、喜べる人とは爲すなり。人生の意義と目的は茲に至りて始て其秘密を破りぬ。とは耶蘇の感じたる所、又弟子等の感じたる所なりき。人生の意義は常に超自然界に求むべきなり。何となれば自然的存

在の終極は死なればあり。死すべき生命とは無意義の語ならずや。此明白なる真理を晦ます者は詭辯論に外ならず。然るに今や有限の世界に永遠の國は入り來りぬ。耶蘇此國に關し教へて曰へらく「永遠の光入り來りて世は面目を一新せり」と。此外耶蘇の宣傳せる所は凡て神國に關係せる者と見るを得べし。然り耶蘇の全教訓は寧ろ神國の教と曰ふべきあり。されど若し第二の側面より其教訓の特色を觀察せば、此問題をして一層明瞭ならしむるを得べし。

(二) 父なる神、並に人間靈魂の無限の價值。

神は父なり、人の靈は無限に貴としとの思想は、今様の思想感情を有する人をして耶蘇の教訓を直接明瞭に了解せしむるには極めて適當なりとす。蓋し此言葉の中に含ざるゝは耶蘇の教訓中靜息的、慰安的要素にして、即ち人は神の子なりとの觀念なりとす。余が之を靜息的と曰へるは熱情的要素と區別せん爲なり。靜息的要素の中にも特に強大なる力の藏れあるは勿論なり。神は父なり、人の靈は神と交るを得る程に貴とし、此二の思想の中に耶蘇の教は悉く含ざるゝを見ても、耶蘇の福音は他の積極的宗教(一定の教理及び儀式を有する宗教を云ふ)の如く律法的、儀文的ならずして宗教の純

粹なる者たるを知るべし。福音は此世と未來の矛盾、理性と熱情の矛盾、又勤勉と遁世、猶太主義と希臘主義の衝突の上に超然たり、能く世間萬事を支配するを得れども之が束縛を受くる者にあらず、吾人は今聖句に照して耶蘇の所謂「神の子」の眞義を明かにせんとす。

(甲) 主の祈禱(太六の九)

(乙) 惡鬼の爾曹に服し、事は喜とする勿れ、爾曹が名の天に録しるされしを喜とすべし(路十の)

(丙) 二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに爾曹の父の許なくば其一羽も地に隕つることあらじ、爾曹の頭の髪また數へらる(太十の二)

(丁) 若し人全世界を得るとも其生命を喪は、何の益あらんや(可八の)

第一、主の祈禱——抑々主の祈禱は殊に莊嚴なる瞬間に於て耶蘇が弟子等に教えたる所なり。弟子等は約翰が其弟子に祈る事を教えたる如く我等にも教えよと願ひたれば、耶蘇即ち主の祈禱を教えたるなり。凡そ高等なる宗教の品價は唯だ其祈禱によりて定まる。今主の祈禱を見るに、誠まことに心中一切の不安を平なげたる者、少くとも神の前に出でたる時に於て、然る者の語りし所たり。是れ苟くも深く主の祈禱を

思ふ者の皆感ずる所なり。神を呼んで「父よ」と曰へる中には安然として神の中にあ
りとの確信を見るべく、又願ふ所は必ず聽かるべしとの確信あるを見るべし。彼は
天を仰ひて妄りなる願望を捧げず、又此世の幸福を祈らず、唯だ持てる力を失はざ
らん事及び神との一致を強固ならしめん事を祈りぬ。斯の如き祈禱は全心全靈を
傾けて神との關係に集注する事に由りて始て爲し得べきなり。此外の祈禱は之に
比すれば輕薄なる者たり。何とあれば枝葉の問題に屬し若しくは五官的空想を動
かす者たればなり。然るに主の祈禱に至りては超然として高く、雲井遙かなる所、神
人相語るの感あらしむ。さればとて世事に關し祈らざるに非ず、見よ主の祈禱の後
半は此世に關する者ならずや。然れども其祈禱や永遠の光に照されたる者なるを
思へ。假令心靈に關するも區々たる事件に神の恩恵を求め、又は特殊の幸福を願ふ
ともそは甲斐なき事なり。耶蘇曰く、此等の物は皆爾曹に加へらるべしと。(太六章)曰
く神の名曰く神の意曰く神の國、斯かる永久不變の要素は此世の關係にも推及さ
れたり。利己に關する者や區々たる事件は皆其前に溶け去りて残る者は唯だ四の
み。即ち日用の糧、日毎の罪、日毎の誘惑、生活上の害惡に關して祈る事是なり。實に福
音書中最も善く福音の本義を明かにし、又福音が生みたる意向、感情を最も確實に

示す者は主の祈禱なりとす。若し福音を以て遁世的、熱狂的若しくは社會的教訓に過
ぎずとなし、其眞價を認めざる者あらば宜しく主の祈禱を示すべきあり。主の祈禱
の教ゆる所に由れば福音は即ち神の子として全生活を送るべき事、神の聖旨と神
の國とに一致すべき事、永遠の幸福と安全とを悦ばしく確信する事たるなり。
第二に「惡鬼の爾曹に服し、事は喜とする勿れ、爾曹が名の天に録されしを喜とす
べし」との語中最も著しく現はれたる思想は、我は神の中に隠れたりとの意識が此
宗教の要點たる事なり。神は今も永遠の後も父として我を護るべしとの謙遜にし
て自信ある信仰には、此世の大事業は愚か此宗教の力に成れる事業すらも及ぶ能
はざる所たり。宗教的經驗の眞價は徒らに感情の發揚や、目に見ゆる事業に由りて
量るべきに非ず、「我父よ」と呼ぶ者の心に滿つる喜悅と平和とに由りて知るべきな
り。

耶蘇は如何なる點まで神は父なりとの思想を應用せんとせしや。是に於て第三の
語に移るべし。「二羽の雀は一錢にて賣るに非ずや、然るに爾曹の父の許なくば其一
羽も地に隕つることあらじ。爾曹の頭の髪また數へらる。」見よ苟くも恐怖のある所
否、生命のある所、自然界中最小の生活物にまで神は統御者なりとの確信は及ぶべ

さきあり。或は雀を語り、或は野の百合を説く、皆耶蘇が弟子等をして禍と死との恐を除かしめんが爲なりき。弟子等は生にも死にも生ける神の御手は常に離れざる事を知るべくありき。

されば第四の語は最早驚くを要せず耶蘇は「若し人全世界を得るとも其生命を喪はゞ何の益あらんや」と曰ひて、人間の貴重なる事を最も強く現はしたりき。曰く「天地の主を呼びて『我父よ』と言ふを得る者は天地よりも高く、其價や全世界よりも貴し」と。此壯大なる言語は實に嚴肅なる訓誡の語調を以て語られたり。神の恩恵と人の天職とは「我父よ」なる一語に含まれたるなり。之を希臘人の教と比較す、何ぞ其相違の著しきや。如何にもプラトーンは高調なる心靈の歌を謠ひぬ。彼は心靈と目に見ゆる世界とを區別して、心靈の起源は永遠の過去にありと教えたり。然れども彼か所謂心靈は知識的にして無知、無覺の物質と相對する者たり。且つ彼の使命は世の知者の爲に語るに在りき。之に反し耶蘇基督は世の貧者のみならず、苟も人間の顔を有する者は凡て之を招き、且つ告げて曰く「汝等は生ける神の子にして多くの雀よりも勝れるのみならず、全世界よりも勝れり」と。余近頃斯の如く記されたるを讀めり。曰く「眞に偉大なる人の眞價は彼が全人類の價を高くする所に存すと、實

際に於て大人物の最高の意義は茲にあり。斯かる人が人類即ち無知、無覺の自然以上に登りたる人類の價を増加し、之を進歩せしめたるは事實なり。然るに耶蘇基督に由り始めて各個人の價は極て明白となり、最早何人も打消す能はざるに至りぬ。耶蘇に對して如何なる意見を有するやは人々の勝手たらんも、耶蘇が歴史上人類を

此高地に擧げたる事は何人も否定する能はざるべし。

耶蘇が斯の如く人間の價を高く評價せし裏面には、低き評價も亦存したりき。彼は財産の多きを誇る者に向ひては「汝愚かなる者よ」(路十二)と曰ひ、凡の人に對ては「我が爲に生命を失ふ者は之を得べし」(太十)と曰ひ、尙進んで「其生命を惡む者は之を保ちて永生に至るべし」(約十二)といふを得たり。耶蘇より先に出でし者の中にも斯く觀じたる者少からず。彼等は面被を隔て、朦朧たる眞理を認たり。又此眞理は人を救ふの力ありてふ、樂しき秘密をも感じたりき。然るに今や耶蘇の語る所を聞くに、極めて平靜單純にして確信に滿てる語調を帯びぬ。其語る様は恰かも樹上の果實を取るが如く、自然にして毫も怪める痕跡なかりき。深遠重大の眞理を語るにも極て單純ある言語を以てし、此外に途を知らざる者の如く、又明々白々人の既に熟知せる所を語るが如くなりき。以て、耶蘇の特色を證するに足るべし。

曰く父なる神、曰く神の攝理、曰く人は神の子なる事、曰く人間の貴重なる事、四者何れの方面にも福音の全部は現はれぬ。然れども此等は凡て奇説なる事を知らざるべからず。否、宗教上の奇説は茲に始めて充分なる顯現を爲しぬ。獨り宗教と曰はず、有らゆる宗教的現象は、感覺的經驗や精密科學の立場より見れば、凡て奇説たるなり。何となれば、宗教は感覺以上の一要素を輸入し來り、之を以て自然界に干涉する者となせばなり。此要素は宗教に於ては最も大切なる者となす。然るに基督教以外の諸宗教は、何とかして此世の事物と相纏綿して、俗人に入り易き要素を含ましめんとせり。隨て只だ一時代の精神的状態にのみ適する者とはなりぬ。之に反して耶蘇の語れる所を見よ。何ぞ俗人に解し難きや。曰く爾曹の頭の髪また數へらる。曰く汝は全世界よりも貴し。曰く汝は人の未だ見し事なき力に己を托するを得べし。是れ一個の冗談なるか。若し然らずとせば、是れ實に宗教發達の極致なるべし。宗教も此處に至れば最早や肉體的生活に隨伴する一現象に非ず。其共働者に非ず。又其一部の聖化せし者にも非ず。今や一步を進めて宗教は生活の基礎と意義とを示す第一、且つ唯一の者なりとの最大要求を爲すに至りぬ。茲に至れば現象世界は凡て宗教の附屬物たるのみ。若し此世界が自ら唯一の存在者なりと主張するあらば、宗

教は之を相手として戦ふべし。宗教は唯だ一の經驗を與ふ。而かも此經驗により世界は新現象を呈するに至るべし。永遠の者出で來れば一時の者は其手段としての存在を爲すのみ。而して人は永遠の側面に立てるあり。是れ即ち耶蘇の思想にして、此中より一點一劃をも取り去るは即ち之を傷くる者なり。耶蘇は神の攝理の思想を人間及び世界の凡に應用したり。彼は人は永遠の生命に其根を有せるを示したり。彼は神の子たる事は神の恩恵にして、又吾人の義務なる事を教えたり。斯の如くして彼は宗教が永く探り、て得ざりし者を固く執へて、茲に成功の曉に達したり。余は再び曰はん、人は耶蘇と其使命とに對し勝手なる意見を有するを得べきも、耶蘇に由りて人類の地位の高められたる事、即ち人類否、吾人自らが相互の地位を一層見上ぐるに至りし事は何人も疑ふべからざる事實なりとす。或は之を知らざる人もあらん、されど眞に人間を尊重することは事實上、神を父として承認する事にてあるなり。

(三) 高調なる正義と愛の教

是れ即ち第三の項目にして、全福音は又此中にも含まるゝを得べし。吾人は之を倫

理的使命と呼ぶも敢て福音の價を傷くる事なきを得べし。耶蘇は國民の中に深遠豊富なる倫理の存在せるを認めたりき。抑々「パリサイ」人の道德を評するに唯だ其儀文的、兒戲的側面あるを知りて他を知らざるは公平なる批評と云ふべからず。彼等が神聖なる道德は宗教的禮拜と相纏ひ、又儀式の爲に化石の状態とあり、殆ど反對の性質を帯ぶるに至れるは論を待たずと雖も、尙其中には未だ化石せず、又死せざる者ありき。其倫理組織の奥には尙何者か生ける者ありき。人若し耶蘇に向て我何を爲すべきやと問ふ者あらば、彼は斯の如く答ふるを得しなり。曰く「爾曹に律法あり、宜しく之を守るべし。爾曹は自ら爲すべき事を善く知れり。律法の全體は爾曹の知れる如く神を愛し、又隣を愛することなり」と。然れども吾人は耶蘇の福音を彼が獨特の倫理思想として表現するを得べし。今之を四種に分ちて説明せん。とす。

第一、耶蘇は倫理と外形的禮拜并に儀式の遵守との聯絡を切斷せり。偏頗心と利己心とを以て宗教的儀式と結合せる「善業」を行ふが如きは耶蘇の全然顧みるを欲せざりし所あり。彼は隣人、否己が父母の餓死するをも顧みずして、其代りに神殿に献物を爲すの徒を憤れり。此點に於て彼は一步も譲る能はざりき。愛と云ひ、憐憫と云ひ、手段に非ずして目的なり。若し愛と憐憫とが人の爲に施さるゝに非ずして、他に

目的ありて爲されんか、其價は忽ち消えて唯だ耻辱を残さんのみ。

第二、倫理上の問題に臨めば、耶蘇は根底に遡りて人の動機を察するを常とせり。彼の所謂高調なる正義は全く此點より了解すべきなり。高調なる正義とは他なし、人の心奥を探るも尙正義の存する者是なり。吾人は此處にも單純明白に見ゆる眞理を有す。而して耶蘇が此眞理を言ひ現はすや、極て鋭き者あり。曰く「古は教えて曰ふ……されど我爾曹に告げん」と(太五章廿七)見よ、耶蘇の倫理思想には新しき者あるなり。彼は此眞理が未だ曾て斯の如き明晰なる論理と權威とを以て語られし事なきを知れり。所謂山上の垂訓の大部分は耶蘇が事業の善惡も、天國と地獄の別も、皆人の動機如何によるとの教訓を、人間の種々ある關係や失敗の各部門に付て語れる者なり。

第三、耶蘇は自ら道德と承認して利己主義や儀式主義と分離せしめたる所の者を凡て一の根底即ち動機に歸せしめたり。愛是なり。彼は愛の外何物をも認めざりき。或は隣人を愛せよと曰ひ、或は善きサマリア人の愛を説き、或は敵を愛せよと教ゆれども愛は一なり、數種あるに非ず。愛は精神の全部を占むべき者にて、精神は死すとも愛は死せず。此意義に於て愛は已に新生命たるなり。耶蘇の所謂愛は常に人の

爲に注がる、愛を意味す。唯だ此意味に於てのみ愛は存し又生けるなり。
 第四既に曰へる如く耶蘇は道德を有らゆる異分子と分離せしめ、又當時の公共的
 宗教と分離せしめたり。されば福音を以て普通の道德を教ゆる者なりと爲すも決
 して謬見に非ず。然るに茲に耶蘇が宗教と道德とを結合せしめたる唯だ一の要點
 あり。此結合點の何たるや、之を説明するは容易ならず。唯だ吾人自ら感知すべきの
 み。或は耶蘇の九福の教に習ひて謙遜の一語を以て之を現はすは當れるに庶幾か
 らんか。耶蘇の目には愛と謙遜とは一なりき。謙遜は其自身にては徳と云ふを得ず。
 純粹なる受働的狀態にして心の缺乏を現はす事、神の恩恵と罪の赦とを願ふこと、
 即ち神に對し全く己の心を開く事なり。耶蘇以爲へらく此謙遜語を換へて曰へば
 神を愛する事——諸君よ、パリサイ人と税吏の譬を思へ（路十八章九）——は人が善
 を爲す心の定住的狀態にして、凡て善行は皆之より出で之に由りて生長すべしと。
 「我儕に罪を犯す者を我免す如く我儕の罪をも免し給へ」とは謙遜の祈、又愛の祈な
 り。隣人に對する愛の源も茲にあり。心の貧しき者餓え渴く如く義を慕ふ者は同時
 に和平を求むる者、矜恤ある者たるなり。
 耶蘇は此意義に於て道德と宗教とを結合せしめたり。人は此意義に於て宗教を道

徳の精神と呼び、道德を宗教の身體と呼ぶを得べし。是に於て吾人は耶蘇が神を愛
 する事と隣人を愛する事とを、殆ど同一視する迄に相接せしめたる眞意を解す
 るを得べし。即ち地上に於ては謙遜にして神を愛する唯一の證據は隣人を愛する
 事あるのみ。

耶蘇は高調なる正義と愛の新しき教とを以上四項目に分ち、之によりて先人の未
 だ知らざりし方法に於て倫理の範圍を定めたり。若し耶蘇の意のある所を解する
 に苦む事あらば、吾人は常に山上の垂訓に於ける九福の教に歸るべきなり。此處に
 は倫理と道德とが根本に於て相結合し、外形的、枝葉的問題と分離せるを發見すべ
 きなり。

第五回

前回の終に余は九福の教を引用して、そが一種有力なる方法に於て耶蘇の宗教を
 現はす者なるを示したるが、今や他の側面より耶蘇が愛憐と憐憫とを宗教的生命
 の實證と爲せし事を示さんとす。耶蘇は最後の教訓に於て審判を説き、綿羊と山羊

とを別つ牧者の譬(馬太二二五)を以て明瞭に説明したるが、其教に曰く、審判の日に善人と悪人とを別つ唯一の標準は憐憫の問題なりと。而して此問題は人々が耶蘇に食を與へ、水を與へ又た彼を訪へる事ありやとの宗教問題の形式を有す。此奇説は次の語によりて解決せらるべし。耶蘇曰く「爾曹わが此兄弟の最と微き者の一人に行へるは即ち我に行ひしあり」と(馬太四七)是れ耶蘇の心には審判に於ける結局問題は憐憫の點にある事及び人の宗教上の地位の正常なる事を證明する者は唯だ憐憫を行ふの動機にある事を最も明瞭に説明せる者なり。如何なれば憐憫は然か貴きや、曰く憐憫を行ふは即ち神を摸倣する事なればなり。耶蘇曰へり「爾曹の天の父の憐憫の如く亦憐憫を爲すべし」と(路六章)憐憫を行ふは即ち神より與へられたる特權を行ふなり。何とあれば神の義は、目にて目を償ひ齒にて齒を償へ」との規則によりて成就する者に非ずして、實に其憐憫の力の下に立つ者なればなり。暫く茲に留まりて一考せしめよ。一方には希臘の詩人及び思想家あり、他方には、パレステナの豫言者ありて、何れも正義の觀念と義なる神の觀念とに生ける力を與へ、傳來の宗教を改造せしは、宗教史上に於ける一大進歩にして、新宗教の建設とも謂ふべかりき。希臘の諸神は之によりて高尚なる文明的の神とあり、武斷的にして

計り難き猶太の神、エホバは今や聖なる神となり、其裁判に對しては戰々兢々たるも、尙安んじて之を信任するを得るに至りぬ。隨て今迄は分離し居たる宗教と道德の二大範圍は互に接近し來れり。何となれば神は聖なる者、義なる者と成りたればなり。余は思ふ當時發達したる歴史は即ち吾人の歴史なりと。何となれば若し此宗教上の一大革新なかりせば、人類若くは世界史てふ共通性の者は存する能はざりし善なればなり。此發達より來る最も直接の結果は己の欲せざる所は人に施す勿れ(太七の十二)との格言に言盡されぬ。此命令や單純にして甚だ盡さざるが如きも、若し之を人間の有らゆる關係に應用して公平に考ふる所あらば、其中には人を教化する所の驚くべき力あるを發見するを得べし。

然るに此命令が含まれる最後の意義は尙残りぬ。憐憫の前には正義も膝を屈するに至り、又人類同胞犠牲獻身の念が勢力を有するに至り、茲に始て吾人が爲し得る最後最要の進歩を見るべきなり。是れ第二の宗教革新と云ふべきなり。其格言は亦同じく簡單にして盡さざる所あるが如し、曰く「人に爲られんと思ふこと、爾曹亦人に其如くせよ」と。而かも之を正當に了解すれば吾人は高尚なる見地に導かれ事物を理解するの新方法と自己の生活に對する新判斷とを其中に認むるを得べし。我

が爲に生命を失ふ者は之を得べし』との思想は此命令と相並びて、眞の生命は唯だ一時の者に非ず、又感覺的存在に固着せる者にも非ざる事を確め、以て人間價値の變動を來さんとする者あり。

以上余は簡單ながら高調なる正義と愛の教の中に、耶蘇の教の全部が包括さるゝ事を述べんと試みたりき。曰く神の國、曰く神は父にして人の靈は無限に貴し、曰く愛の中に現はれたる高調なる正義、三者之を詮すれば一に歸す、何となれば神の國は要するに人の靈が永遠慈愛の神の中に著へたる財寶に外ならざればなり。されば此思想より進んで基督教が耶蘇の言葉より得たる信望愛の三角的思想に達するまで僅かに數歩を餘すのみ。

論歩は更に進むべし。余輩は已に耶蘇の教訓の特色を明かにせり、是より進んで第二部に入り福音と個々事項との重大なる關係を論せんとす。茲に余輩が掲げんとする六種の問題あり、何れも最重の問題なれば何れの世にも然か感せらるべきなり。假令教會歴史の進路には此等問題の或者が數十年の間其姿を隠す事あらん、然れども他日倍舊の勢力を以て再現するの時、到るや必せり。

(1) 福音と世界、即ち遁世問題

(2) 福音と貧苦、即ち社會問題

(3) 福音と法律、即ち世俗的制度問題

(4) 福音と業務、即ち文化問題

(5) 福音と神の子、即ち基督論問題

(6) 福音と教理、即ち信條問題

此中最初の四は相聯關せるも、終の二は各々獨立の問題たり、是より余は此六問題に基き耶蘇の教訓に含まれたる最重の關係に付て、僅かに其要領を叙述するを得ん事を希望す。

(一) 福音と世界、即ち遁世問題

福音は根本思想に於て、又實際的應用の眼目に於て、甚しく遁世的なりとは廣く世に行はるゝ説にして、加特力教會は勿論、今は新教徒の中にも斯く信する者少からず。或は同情と賞讃とを以て此説を唱道するのみならず、大胆にも基督教の眞價と眞義とは佛教と同じく世界を否定する所に存すと公言する者あり。或は福音が現今の倫理的原則と矛盾せる事、隨て今は無用の長物となれる事を證せんが爲め、殊

に福音の遁世的側面を擧ぐる者あり。加特力教會は、疑もなく絶望の結果として一種奇體ある遁路を發見せり。即ち前にも曰へる如く、彼等は福音が遁世の特色を有する事を承認し、之を理由として眞の基督教的な生活は唯だ遁僧主義——彼等の所謂『宗教的生活』——に於て實現せらるゝと教えたり。然るに彼等は遁世的ならざる『劣等』の基督教にても『尙足れり』として之を許容せり。余輩は今此奇怪なる許容に論及せざるべし。唯だ耶蘇に全く従ふことは獨り遁僧のみ之を能くすとは加特力教の教なるを示し置かんのみ。十九世紀の大哲學者、大著述家たる、シヨツペンハウエルも同様の異見を抱きたりき。彼が基督教を賞揚せし唯一の理由は、基督教が聖アン・トニウスや、聖フランシスクスの如き大遁世者を出したるにあり。彼は基督教より遁世主義を取去れば、他は一切不必要にして人を躓かすに過ぎずと爲せり。斯かる所に、トルストイなる人物現はれ來り、シヨツペンハウエルよりも遙かに深き觀察と怪きまで強き感情と、彼が獨得の言語力とにより、福音の遁世の特色を擧げて痛論し、之を以て人の守るべき法則と爲さんとせり。彼が福音より得たる遁世の理想は温にして健、其中には隣人の犠牲と爲るべき事をも含めるは否定すべからず。されど彼も亦遁世主義を以て基督教の著しき特色なりと觀じたる一人なり。教育ある

人にしてトルストイの書を読み、感激する者數千を以て算ふべし。されど彼等は心密かに基督教が遁世の特色あるを喜び安心する所あるべし。何となれば若し果して然らんに、基督教は彼等と毫も係りなきに至ればなり。彼等が世界は恵と秩序とを以て己等を益する爲に造られたりと信せるは正當なり。又彼等が基督教にして若し此主義に反する要求を爲すが如きあらば、此に由りて基督教は自然に背ける者なるを知るべしと思へるも正當なり。若し基督教が此世の生活には何等の目的もなしと曰へりとせば、若し基督教が萬事を來世に移植する者なりとせば、若し又基督教が此世の快樂を以て全く價なき者と宣告し、絶對的に遁世的、瞑想的な生活を主張する者なりとせば、基督教は實に世の活力ある者の敵たるのみならず、實に人間の本性に背く者なり。何となれば人の能力は使用する爲に與へられ、大地は耕やす爲に、又人の用に供せらるゝ爲に與へられたりとせば、吾人の本性の首肯する所なればなり。

而して福音は實際此世界を否定する所の教に非ざるか。茲に人の屢々引照し、又何人も其意義を誤解するの憂なき聖句あり、曰く『若し右の眼なんぢを罪に陥さば、抉き出して之を棄てよ』又曰く『若し右の手なんぢを罪に陥さば、之を斷りて棄てよ』富

める若き人には答へて曰ふ、往きて爾が所有を賣りて貧き者に施せ、然らば天に於て財たからあらん。『天國の爲に自らなれる寺人あり』の二十九『凡そ我に來りて其父母、妻子、兄弟、姉妹、また己の生命をも憎む者に非ざれば、我弟子となる事を得ず』の路十四此外にも斯かる語句あらんが、之を讀まば、福音が全然、遁世的の者たるは論を俟たざるが如く、感せん。然れども余は之に對して三箇の觀察點より、眞理は寧ろ他邊にある事を示さんと欲す。第一には耶蘇出現の有様並に彼が生涯の特色及び方針を觀察し、第二には弟子等が耶蘇より受けたる感化を觀察し、第三には余輩が福音の特色に付て已に論じたる者より推論せんと欲す。

第一、福音書中、注意すべき一節あり。即ち耶蘇の語に曰く、『ヨハナ來りて食ふこと、飲むことを爲ざれば、鬼に憑れたる者なりと人々言へり。人の子來りて食ふことをし、飲むことを爲れば、又食を嗜み、酒を好む人なり』といふ 二十六、二十九見よ、人々が耶蘇に被らせたる惡名の中には、大食家、豪飲者なる名稱もありたるなり。之に依りて、耶蘇全體の態度と生活の方法とが、ヨルダン河畔の大説教者と全く異なる感覺を人に與へたるを見るべし。彼は世に行はれたる遁世的な生活には、毫も拘泥せざりき。彼は富者の家に行きぬ、されど貧者の破屋をも厭はず。人と共に食し、婦人や兒童と交りぬ。

傳説に據れば、婚姻の席にも列れる事あり。彼は人が己の足を濯ふに委かせ、又頭に價高き油を灌ぐを禁せざりき。尙あり、彼は喜んでマリヤ、マルタの家を訪ひぬ。而して彼等が家を出でん事を求めざりき。彼は信仰篤き人に遇ひて心悅べる時と雖も、之をして其職業と地位とに留らしめたりき。余輩は耶蘇が斯かる人に向ひ、所有を賣りて我に従へと曰へるを聞かず。彼は人々が神の己に定め給ひし地位、職業を守りながら、信仰の生活を送るを得るのみならず、是れ寧ろ彼等には相應しき事と思へる者の如し。直ちに耶蘇に従ふ事を命せられたる少數の人のみが、耶蘇の弟子には非ざりき。彼は何處にも神の子等を見出しぬ。隠れたる神の子等を發見して、之に力ある言葉を懸くるは、耶蘇に於て無上の悦ありき。彼は弟子等に向て遁僧的講社を造れと命せし事なく、日常の生活に於ても彼を爲すべし、此を爲すべからず等の戒律を與へざりき。苟くも辭句に拘泥せず、公平なる心を以て福音書を讀む者は斯の如く自由にして活力に滿てる精神は到底、遁世主義の拘束に甘んずべき者ならざるを知るべく、隨て福音書中遁世の色を帯びたる語句あるも、唯だ文字に隨て概括的斷定を下すべきに非ずして、一層廣く又一層高き見地より判斷すべき者なるを知るべし。

第二弟子等が耶蘇を遁世者と思はざりしは明かなり。彼等が後に至りて福音の爲に如何なる犠牲を爲し、又如何なる意義に於て世界を捨てしやとの問題は之を後回に譲り、此處には、彼等が隱遁的生活を以て其旗章と爲さざりし事を認め置かんとす。彼等は働く者の工錢を得るは宜べなりとの法則を守りぬ。彼等は、其妻を去らざりき。使徒ペテロは傳道旅行に其妻を携へたりと謂ふに非ずや。エルサレムの教會が共產制度の如き者を組織せんとせし事の記事(徒二の四十)を除きては、使徒時代に於て毫も遁世主義の人の團體ありしを聞かず。且此記事とても敢て顧みるを要せざるなり。何となれば歴史上、信を置き難きのみならず、少しも遁世的性質を帯びざればなり。否却て各信徒は從來の地位、職業を保ちながら基督信徒として生活すべき者ありとの信仰が、到る所に勢力を占めたるを見るなり。之を佛教の發達史に比較するに已に其出立點より、霄壤の差異あるを認めべし。

第三の論點は最も重要なり。諸君は余が耶蘇の根本思想に付て説きたる事を未だ忘れざるべし。曰く信神、曰く謙遜、曰く罪の赦、曰く愛憐。吾人は此中に他の格言、少くとも律法的格言を入るべき餘地を見出さざるあり。之と同時に耶蘇は如何なる意義に於て神の國は世界と反對の位置に立てるやを明かにせり。若し「何を食ひ、何を

飲み、何を着んと思ひ煩ふ勿れ」或は「天に在ます爾曹の父の憐憫の如く、亦憐憫を爲すべし」等の語を捕へて遁世思想なりと曰ふ者あらば、彼は未だ此言葉の眞義と莊嚴なる性質とを解せざる者なり。彼は未だ神人合一の境には遁世問題の如きは、殆ど顧みるに足らざることを知らず。若くは毫も斯ある經驗を有せざりし者たるなり。以上の理由により吾人は福音を以て遁世的使命を有すとの説に反對せざるを得ず。

然るに耶蘇は人に三敵ある事を教えたり。而かも此敵を避くべしと教えず。却て之を征服せよと命じたりき。所謂三敵とは何ぞ、曰く此世の財寶、曰く憂慮、曰く利己心。是なり。諸君よ、耶蘇は世を通れよと曰はず。此三敵を撲滅する迄戦へど教えたり。暗黒界の三勢力を顛覆せよと命じたり。所謂此世界の財寶とは廣く此世の金錢及び貨物を指せるあり。委しく曰へば吾人を奴隸にし、又之に由て他人を奴隸となすの力を有せる金錢貨物を曰へるなり。蓋し金錢は力の凝結したる者なればなり。耶蘇が此種の敵を語るや、恰も人格を有せる者に付て語るが如くなりき。或は武装せる戰士、或は一個の帝王、或は惡魔其物として語りたりき。耶蘇が「二人の主に事ふる」と能はず」と曰へるは正に此敵を指してなり。人若し此世の財寶を以て無上の價値

ある者と心得、全心之に傾き、戦々として唯だ之を失はざらん事を悞れ、最早之を放つを欲せざるに至れば、彼は已に此敵の奴隸となれるなり。されば基督に従ふ者にして此誘惑の危険を感ずる者あらば、此敵と平和條約を結ぶべきにあらず。須らく開戦すべきなり。否、開戦するのみならず、之を征服すべきあり。若し今日耶蘇をして吾人に語らしめば、彼は凡ての人に「汝の所有を悉く捨てよ」とは曰はざるべし。されど今尙耶蘇より斯く命せらるる者、豈幾千百のみならずや。然るに此語を自己に應用するの必要を感ずる者、曉天の星の如きは怪むべき限にこそ。

第二の敵は憂慮なり。耶蘇が之を以て左程までに恐ろしき敵と爲したるは一見甚だ解し難き者あり。然るに耶蘇は「此れ皆異邦人の爲す所なり」と曰ひぬ。素より彼は主の祈の中に教えて曰ふ「我儕の日用の糧を今日も與へ給へ」と。されど斯かる信任的祈願は彼の所謂憂慮に非ざりき。所謂憂慮とは人をして區々たる日常事業の奴隸と爲らしむる所の煩悶を曰へるなり。即ち一步々々と吾人を誘ひて、終に此世の捕虜と爲す所の憂慮を曰へるなり。斯の如きは實に屋上の雀を守り給ふ神に對する暴慢と謂ふべし。是れ天父との根本的關係、即ち天父に對する信任を破壊し以て人の魂を滅ぼす者なり。省れば、吾人は彼財寶に對し又此憂慮に對し、耶蘇の教訓の

真理を充分に知らんと勉むる程、眞面目ならず。又深く感せざる事を告白せざるを得ず。絶對的に「憂慮する勿れ」と命ずる者誤れるか、憂慮の爲に心を弱くする吾人は誤らざるか。人は一切の憂慮を捨て、萬事を神に任せて始て眞に自由、強健、敗を取らざる者となる事は、吾人已に幾分か之を経験せり。嗚呼、吾人にして若し區々たる事に空しく憂慮する事なからんには、如何に大なる事業は完成せられしならん。又如何に強大なる力の出でしならん。

第三の敵は利己心なり。人は世を遁るべきに非ず、己を制すべし、己を制して己を捨つる迄に至るべし。とは耶蘇が此所に要求する所なり。曰く「若し右の眼なんちを罪に陥さば、抉き出して之を棄てよ。若し右の手なんちを罪に陥さば、之を斷りて棄てよ」と。其意に曰く「若し肉慾増長して汝の心を汚し、或は利己心の爲に汝の心に新たなる主人出で來らば、汝は之を征服すべし。是れ神が不具者を喜び給ふが故に非ず。斯くせずば、汝が健全なる部分をも保つ能はざるが故あり。是れ素より容易からぬ要求なり。されど之を爲すには、彼遁僧に倣ひて凡てを捨つるを要せず。萬事舊の如くして可あり。唯だ人生、死活の別るゝ所に於て、戦を爲す事と、斷乎として己を捨つる事を要するのみ。

以上挙げたる三敵に對して吾人が爲すべき事は己を捨つるにあり。是に於て基督
 教と遁世主義との關係は解決せられたり。遁世主義は曰ふ凡て此世の福利は本來
 何等の價をも有せず。然れども福音の研究は決して斯かる結論に到達する者に
 非ず。何となれば世界と其中にある凡の物は皆な主の物なればなり。(詩廿四)然れど
 も人は福音に關して次の如く問ふを得べし。即ち名譽、財産、親戚、朋友の如きは天與
 の幸福あるや、或は之を捨てざる可らざるかと。假令耶蘇の語中此等を捨つべしと
 概括的に曰へる者あるも、吾人は耶蘇の教訓の全部より判斷を下して其意味を制
 限すべきあり。福音の要求は聖き自省と嚴肅なる警醒と、心の敵を征服する事なり
 然れども己を捨つる事に關して、耶蘇が要求せし所は吾人が考へんとする所より
 も遙かに多かるべきは疑を容れざるなり。

以上之を總括して曰へば、福音は決して嚴密の意義に於て遁世的の者にあらず。何
 となれば福音は信神、謙遜、赦罪及び憐憫の使命なればなり。此高所には何物も近く
 能はず。此墙壁内には何物も侵入する能はず。加ふるに此世の幸福は決して惡魔よ
 り來るに非ず。凡て神より來るなり。故に曰く「爾曹の天の父は凡て此等の物の無く
 てならぬ事を知り給へり。彼は野の百合を裝ひ空の鳥を養ひ給ふ」と。福音の中には

遁世者を入るべき餘地を有せず。其求むる所は戰なり。財寶、憂慮、利己心を相手に戰
 ふべき事なり。福音は愛を求む、而して又愛を與ふ。此愛や人に事ふるの愛、己を犠牲
 にするの愛たるなり。此戰と此愛とは即ち福音的意義に於ける遁世あり。若し此外
 の意義を耶蘇の福音に負はせんとする者あらば、彼は福音を誤解せるあり。彼は福
 音の尊嚴と眞面目とを損ふ者なり。何となれば茲には凡ての所有を施し、又焚かる
 爲に我身を與ふる(四前十三)よりも更に大切なる者あればなり。即ち己を捨つる
 事と愛とは是なり。

(二) 福音と貧苦、即ち社會問題

是れ余輩が研究せんとする福音の第二の關係なり。此問題は第一の問題と近き關
 係を有せり。此問題に關しても現今種々なる意見あれども、要するも二個の相反對
 せる意見に歸す。第一説に曰ふ、福音は主として貧者に對する社會的大使命にして、
 他の部分は左まで大切なる者に非ず。唯だ一時の裝飾若くは古き傳説に非ずんば、
 初代の基督教徒が加へたる改造のみ、而して耶蘇は大なる社會的改革者にして、悲
 境に沈める下層の民を救はんとして起りたる者あり。彼は萬人平等、貧者救濟、壓制

鎮壓の主義に基きて、社會的綱領プログラムを作れり、然り耶蘇を了解するは只だ此一途あるのみ、實際彼は斯くありき、否吾人は斯く了解するより外、途なきが故に、彼は斯くありきと曰ふなりと、數年來此意義にて福音に關する書籍及び小冊子の出版せられしあり、何れも善意にて耶蘇基督を辯護し、又彼を稱揚せんとする者なり、然るに同じく福音の本領は社會的使命に在りと爲せる論者の中にも之と反對の結論に達せし者あり、斯かる論者は耶蘇の教訓の本意は、社會の經濟的改造にありたりとの事を證明せんとしたる結果、福音を以て全然無用の夢想的綱領に過ぎずと説明するに至りぬ、彼等は曰ふ耶蘇の此世に對する見解は温和なりしも、又虛弱なる所ありき、彼は身自ら壓制の下に苦める下層社會より出でたるが爲め、強者、富者に對する猜疑の念を抱きたり、隨て收穫ある業務を忌み、富を造るの必要を解せず、是に於てか彼は世界——即ちパレスチナ——に貧困主義を擴め、その憐れなる状態と相對比して、茲に天國を建設せんとするの方案を造れり、此方案は到底實行に適せざる者にて活氣ある人の厭ふ所たりと、福音を以て社會的使命に外ならずと爲す、第二種の説は先づ斯の如き者あり。

此二種の論者は觀察の方法を同じくして其結論を異にせり、然るに又茲にかの二

説と全く異なる印象を福音より得たる第三の説あり、其説に曰く耶蘇を以て當時の經濟的、社會的狀態に向て直接に同情を有せる者と爲すが如きは勿論、少しにても彼が經濟上の問題に興味を有したりと爲すが如きは、牽強附會の説のみ、福音は經濟上の問題に對しては絶對的に獨立せり、素より耶蘇は經濟界より比喩及び實例を引きたる事あり、又貧者、病者及び凡て悲境に陥れる民に向て同情を有したりき、されど彼が純粹なる宗教上の教訓と、彼が救世主としての働とは、此民の世俗的地位の改良を毫も眼中に置かざりき、然るに向耶蘇の福音を社會的狀態と關係せしめんと欲する者あらば、是れ其目的と精神とを世俗化する者なりと、我國(即ち)に於ても耶蘇を己の如く保守家なりと考ふる者少からず、斯かる人は曰ふ、耶蘇は當時存在せし社會上の階級も制度も、凡て神の定め給ひし者ありとして之を尊敬したりと。

諸君の知れる如く此點に關しては異説甚だ多く、論聲甚だ喧しく各自根氣と熱心とを以て自説を辯護せり、若し事實を知るべき適當の見地を發見せんと欲せば、先づ當時の事情に付て觀察する所なかるべからず。

遠き昔時より耶蘇の時代に至るまでパレスチナを支配せし社會の状態に關して

は、吾人の知る所甚だ不完全ありと雖も、吾人は唯だ著しき特色を擧ぐるを得べく、殊に次の二點を確立するを得べし。

第一、バリサイ入及び祭司より成れる優勢なる階級——此中祭司の一部は當時の政治上の執權者と聯合せり。——は貧民の窮狀に對して甚だ冷淡なりき。素より凡の時代、凡の國民に於ける斯かる階級に比して殊に惡かりしには非ざれば、兎に角惡かりしは事實なりき。加之ならず彼等が餘りに禮拜上の儀文と彼等の所謂禮拜上の「正義」を重んじたるが爲、貧者に對する同情と慈悲とは冷却したりき。富者の壓制暴虐なりし事は、詩篇の作者を始め凡て涙ある人が歌はんとせし無盡藏の題目たりし事久し。若し當時の富者にして甚しく貧者に對する義務を怠らざりしならば、耶蘇が彼等に就て語れる所も亦異なる者ありしならん。

第二、壓制されたる貧民の階級は實に困難と悲運の中に戰へる無數の民より成れり。斯かる民には悲運は生活の別名にして、悲運即ち生活なりき。當時此階級の中には神が昔時約束し給ひし事と、其慰安の言葉とに切なる情と、動かぬ希望とを繋ぎ、謙遜、忍耐、以て救の日の來るを待てる民衆ありし事は、明かに知るを得べきなり。彼等は心渴き喘ぎ、エルサレムの神殿に詣りて神を拜し、奉り其眷顧を祈らんとすれば、金錢なき身の憐れさ、無法にも衝返されて、神殿を仰ぎ見る能はざりし事も屢となりき。されば彼等はイスラエルの神を崇め、天を仰いで熱き祈を捧げて曰ふ。番人よ、夜は未だ明けざるか。——以賽亞（二十）彼等は斯の如く心の戸を開て神を受入れんとしたりき。されば詩篇の中にも、後に起れる類似の猶太文學の中にも、貧てふ語は殆どイスラエルの慰の日を待てる信神家の符號となれる程にて、耶蘇も此慣例を見て之に倣ひぬ。されば福音書中に「貧なる語に遇ふ事あらば、別に説明なき以上は唯だ經濟上の貧とのみ思ふべからず、實際に於ても當時は經濟上の貧と宗教上の謙遜及び神に心を開く事とは大體に於て相結合し、バリサイ入の嚴肅なる修徳や規則的に行はるゝ正義と相對して、頗る異彩を放ちたりき。事情果して斯の如くなりしとせば、現今吾人が用ゆる貧富ある語の意味を其儘當時の語に應用する能はざるや明かなり。さればとて當時の「貧なる語の中には經濟上の貧をも含めるは勿論の事なるを忘るべからず。余輩は次回に於て「貧てふ語に特別の難點あるにも係はらず、耶蘇の用ゐたる貧の眞義は如何なる方向にあるやを明かにせんと試むべく、又之を明かにするを得るや否やを探究すべし。然れども吾人は此點に關して何時までも暗黒の中に迷ふを要せずとの希望を有す。何となれば福音の根本的特色

は已に此問題に向て光明を與ふる者なればなり。

第六回

余は前回の終に福音の所謂「貧」に關する問題を語り、耶蘇の眼中にありし貧は神に向て心を開ける者をも指したること、隨て耶蘇が貧に付て語りし所は特別の説明なき以上は、吾人の所謂貧と同一視すべきに非ざるを告げたり。されば今本問題を研究するに當りては、耶蘇が明かに心の貧き者に付て語りし者を除かざるべからず。例へば九福の敎の始なる「貧」に付ては、之を馬太の如く「心の貧しき者は福なり」と爲すも、或は路加の如く單に「貧しき者は福なり」と爲すも、耶蘇の意の在る所は心を空くして神を受くる人なる事は、其次の句「天國は即ち其人の物なればあり」に由りて知るべし。今一々斯かる例を擧ぐるの暇なければ、唯だ二三の觀察に由り最要の點を確立して已まんのみ。

(一) 耶蘇は此世の幸福を有する事は靈魂の爲めに由々しき危険なりと信じたり。是れ此世の幸福は人心を無情ならしめ、世の煩の纏ふ所となし、卑劣なる快樂に誘ふ者なればなり。曰く「富める者の神の國に入るは如何に難ひ哉」と

(二) 天國を建つるは悲惨の世界に若くはなしとの思想を抱ける耶蘇は、先づ此民が悉く貧困可憐の様に陥らんと事を願へりとの斷定は——此斷定は色々の方面に應用せらる——取るに足らず。眞理は寧ろ反對の方向に在り。耶蘇は艱苦を艱苦と呼び、不幸を不幸と呼びぬ。彼は艱苦と不幸を歓迎せざりしのみか、之を艾除せんが爲に目醒ましき戰を爲せり。唯だ夫れ此意義に於ても、耶蘇の全事業は一個の救世事業にして、即ち艱苦と悲運とに對する戰なり。否、彼が悲運と貧苦の壓力を感せし事寧ろ重に過ぎざるか、彼の力は餘りに多く、此處に注がれざりしか又之を拒くべき力たる同情と憐憫とに向て彼が附與したる意義は、倫理的行動の全部に比して寧ろ過大ならざりしかと思はるゝ程なり。斯かる推察は素より正當なる者に非ず。何となれば耶蘇が艱苦と悲運よりも懼るべき罪ある者あるを知り又憐憫にも勝れる救濟力即ち赦罪なる者あるを知りたるは、耶蘇の言行に照らして疑を容れざればなり。是に於て耶蘇が貧困と不幸とを奨勵せざりしのみか却て之と戰へる事、及び人にも斯く戰へと命じたる事は最早事實として確立すべきなり。教會歴史の中には乞食を奨勵し貧困主義を唱道せる基督教徒あり。人に賞められんが爲に好んで不幸災厄に沈める者あり。斯の如き者は決して耶蘇に倣へる者と曰ふの權

利を有せず。然れども、耶蘇は彼福音宣傳者として、或は教會の牧者として、己の全生涯を献せんとする人。——斯の如きは耶蘇が凡の人に要求せし所に非ず、唯だ神の特撰に懸かる者の爲すべき所にして、神の特別の恩恵たるあり。——に向ひては一切の所有と此世の幸福とを捨てよと命じたり。さればとて乞食となれとは曰はざりき。否、寧ろ彼等は其天職に従事する事に由りて、麵包と生活上の需用品とを得べきを信すべく教えられたるが如し、之に關する耶蘇の思想は福音書中に載せられざるも、幸にして使徒保羅によりて吾人に傳えられたり。即ち哥林多前書第九章に書して曰く、『此の如く主、福音を宣べ傳ふる者は福音に由りて生活せん事を定め給へり』と。^(十四節)耶蘇は獨り牧者、傳道者に向つてのみ無財産を要求せり。是彼等が全生活を其天職の爲に投ずるを得んが爲なり。而かも乞食的生活を要求せざりき。乞食的生活を勸むるは、フランシスカン派の誤解にして、耶蘇の教に似て非なる者なり。暫く茲に論歩を留むるを許せ。世に基督教會の牧師の職に在る者は殆ど皆斯の如く考ふるを常とす。曰く一切の所有を捨つべしとの耶蘇の命令は、我等牧師には適用すべき者にあらずと。異邦の民に福音を宣傳するにあらざる純然たる教會の牧師が斯かる言を爲すは多少理なきに非ざるべし。何となれば耶蘇の命令は福音の

傳播に従事する者に關すればなり。又曰ふ者あらん、愛の命令の外に絶對不易の法則あるべからず。若し之ありとせば人は基督教的自由を害せられ、基督教は自由にして歴史の進歩に伴ふを得べしとの高尚なる權利をも制限せらるべしと。然れども余は問はんとす、宣教師と曰はず、牧師と曰はず、凡て神の特別なる僕として呼ばれたる者が、耶蘇の此命令を遵守したるが爲に、基督教が被りたる利益は實に非常なる者に非ずやと。牧師たる者が他人の厄介に爲らざる限に於て、己が財産を有するは不可なきも、是より以上を望むべからざる事は彼等の嚴密なる主義たるべきなり。されど余は疑はず何れの日か人の靈魂の保護者たる牧師の富有の生活は、世の非難を受くるに至ると恰も一時跋扈したる僧侶に對するが如き且、到らん事を見よ。此點に關する吾人の感覺は次第に鋭くなり行くに非ずや、誠にさもあるべき事なり。若し貧き者に向ひては服従と満足の必要を説きながら、己は富有にして尙も財産の増加に汲々たる者あらば、最早人は高尚なる意味に於て之を適當と認むる者なきに至るべし。健かなる者は病める者を慰むるを得ん、されど財産を持てる者が財産なき者に向ひ、如何にして財産の人に益なきを悟らしむるを得んや。耶蘇が神の言葉の宣傳者は此世の財産を捨つべしと命せし事は、尙教會の歴史に於ても尊

崇すべき者たるなり。
 (三) 耶蘇は貧苦と艱難を壓伏せんが爲に社會的綱領を作らざりき。即ち一定の條項を有せる綱領を作らざりき。彼は經濟上の事情や、一時限りの關係に手を觸れざりき。若し假りに耶蘇がパレスチナの爲に有益なる法律を規定したりとせんか。如何なる結果の起りしならん。斯の如き法律は今日用をなして明日廢物となるべき者。徒らに福音を束縛し又之を混亂せしむるに過ぎず。爾に求むる者には與へよ。〔馬太五章四十〕と曰ふが如き、其他之に類する命令に對しては其度を越えざる様注意すべきなり。斯かる命令は時と場合に照して了解すべき者にて、即ち一塊の麵包、一碗の水、若くは一枚の衣服にて事足りぬべき猶豫の出來ざる場合に對して曰へるなり。斯く論ずるに當り忘るべからざる事は、余輩は今經濟上尙幼稚なる東洋の地に於ける福音に付て語りつゝある事なり。耶蘇は社會改革者に非ず。彼嘗て曰はずや、貧者は常に爾曹と共にあり。〔馬太廿六〕と之に由りても耶蘇は社會の眞相の變らざるを信じたる者の如し。彼は相争ふ相續者間の調停者たるを欲せざりき。彼は經濟上社會上の生活より起る幾千の問題を解釋することを辭退せり。事情已に斯の如きにも係らず、尙福音の中より一定の社會的綱領を引出さんと試むる者、續々出づるの

みか福音的神學者にして之を試みたる者又現に之を試みつゝある者さへあるなり。斯の如き企圖は曾に絶望に終るのみならず、危險甚しき者なり。若し夫れ社會的綱領を作るに當り、舊約中の律法と社會制度とを借りて福音中の足らざる所を補はんか、混亂、錯綜、吾人の堪ゆる能はざる社會を現出する事ならん。
 (四) 世に未だ福音の教の如く強健なる社會的使命を以て現はれ、且之と同化したる者はあらじ。佛教の中にも之なし。何を以て之を曰ふか。己の如く爾の隣人を愛せよ。とは耶蘇が極て嚴肅に語れる所なるが故。又彼が此語に由りて一切の生活上の關係、隨て饑渴、貧苦、悲運の世界に光明を與へたるが故。而して終りに彼が此語を以て一個の宗教的格言と爲したるのみならず、宗教上至大の格言と爲したるが故なり。諸君よ今一度審判日の譬を想起せよ。此譬に據れば人間の價值と運命との問題は、凡て隣人に對する愛の如何によりて決せらるると曰ふならずや。又富める人とラザロの譬を思へ。余は今人の多く知らざる物語を諸君に紹介せんとす。そが人に知られざるは吾人の知れる福音書中に斯く記されざるが故なり。吾人は唯だ希伯來の福音書に於て之を見る。即ち富める青年の物語を記して曰く
 或る富める人、主に曰ひけるは、師よ、われ生命を得る爲めに何の善き事を爲すべ

きか。答へて曰ひけるは人よ、爾律法と預言者に従ふべきなり。富める人曰ひけるは、是れ我已に爲せる所なり。耶蘇曰ひけるは、往きて汝の所有を悉く賣りて貧き者に分ち與へよ、而して來り我に従へ。是に於て富める人其頭を掻き始む。彼は其言葉を悦ばざりき。主彼に曰ひけるは、爾は如何なればわれ律法と預言者とに従へりと曰ふを得るや。律法の中には己の如く爾の隣人を愛すべしと記されたり。見よ汝の兄弟、アブラハムの子等は汚れたる衣を着て横はり、飢えて死ぬる者あるに、爾の家には多くの財寶滿つれども、其一だに彼等には與へられず。

之によりて耶蘇が貧者の物質上の困難を如何に感じたるやを見るべく、又斯かる困難を救ふことを彼が如何に「己の如く爾の隣人を愛せよ」の命令より導き出したるかを見るべし。己が傍には悲運に苦みて將に死なんとする人あるを見ても冷然之を忍ぶを得る者は、未だ愛隣の大道を語るに足らざるか。福音の教ふる所は單に人の責任を分つ事と人に助力を與ふる事のみならず、此教訓の中には重大なる意味の含まるゝあり。此の如き意義に於て福音が甚しく社會的なるは、恰も個人の靈魂には無限獨立の價值ありと爲す點に於て福音が甚しく個人的なると相對せり。福音が人類を結合して同胞の交を爲さしめんとせるは、福音史上に於ける偶然

の現象に非ずして、寧ろ福音の本色と謂ふべきなり。福音は人類生活其者の如く、廣く人間の要求其者の如く深き一大團體を人類の中に造らんとする者あり。福音は實に或人の善くも曰へる如く、利益の衝突に基ける社會主義を一變して、靈の一致に基ける社會主義と爲さんとする者なり。此意義に於ける福音の社會的使命は、至大至重なり。余は神に感謝す「人間らしき生活」とは何ぞとの問題に對する解答は、歴史と共に變遷し來り、又大に琢磨せられたるを、而して耶蘇は遠き以前に於て既に之が解答を與へたり。然るに彼は曾て己の境遇に付て悲惨なる言葉を漏らしたる事ありき。曰く「狐は穴あり、天空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する所なし。」(馬太八住處といひ、日毎の食物と云ひ、身體を清潔にする事と云ひ、凡て耶蘇の要求せし所なりき。彼は此要求を満足せしむるは地上の生活に必要な事と考へたり。若し自ら之を得る能はざる者あらば、他人宜しく之に與ふべしと思ひしなり。されば今日憫然の民を悲境に救ひ、之に善き境遇を與へんとして心身を勞する者等に對して、耶蘇は同感を有する者なるは疑ふべからず「生くる者は其生くるに任せよ」といふよりは寧ろ「生くる者は其死するに任せよ」といふの適當ある彼の生存競争主義の如きは、全然福音の精神に反對する者あり。且つ福音の教によれば吾人は貧者を助

くるに於ても、奴婢の如く之を遇すべからずして兄弟の如くすべきなり。終りに曰はん、吾人の富は決して一個人の私有物に非ざるなり。素より福音は富の使用法に關しては何等の規定をも與へずと雖、吾人は自ら財産の所有者なるが如く思はずして、唯だ隣人の爲に家産を守る者と心得べしとは其意のある所たるを疑はず。否々、耶蘇は殆ど狹義に於ける私有財産なる者なき人類の團體を造るを得べしと思ひしが如し。是に至りて吾人は容易に解決する能はざる問題に入りぬ。思ふに斯の如き問題は寧ろ提出すべき者に非るべし。何とあれば此問題の中には耶蘇の末日に關する思想、並に耶蘇にのみ固有なる地位を包含すればなり。且吾人は斯かる問題を提出すべき必要を認めざるあり。要は耶蘇が艱難貧苦に關して弟子等に如何なる情操を起さしめたるやにあり。福音は嚴肅にして恐るべき力ある社會的使命にして、貧者の爲に協同主義、同胞主義を宣傳する者なり。然るに此使命は人間靈魂が無限に貴き事を承認する事と相關聯し、又神國の教の中にも含まれぬ。吾人は此使命を以て神國の教の骨髓なるといふを得べし。されど法律制度、其他強て社會の現状を變更せしめんとする命令の如きは福音の中には存せざるなり。

(三) 福音と法律即ち世俗的の制度問題

福音と法律との關係は次の二大問題を有す。第一、福音と政治的主權者との關係、第二、福音と法律制度との關係是なり。但し茲に法律制度と曰へるは政治的主權者と云ふよりも更に範圍の廣き意味を有せり。第一の問題に對する解答は誤に陥るの患少なしと雖も、第二の問題は之に比すれば複雑にして之が解答も比較的困難なり。隨て之に對する意見も甚だ多し。

第一、福音と政治的主權者との關係。——余は尙耶蘇が政治上の革命家にあらず、又自ら政綱ゴチラシエス、プログラムを爲りたる事なしとの事を今更明言するの必要あるか。耶蘇にして求めだにせば、天父は忽ちに十二の天軍を送るべかりしも、耶蘇は之を求めざりき。彼を奉じて王と爲さんとする者あれば、彼は何處へか逃げ去りぬ。然るに終に臨んで全國民に向ひ己の「メシヤ」たる事を發表すべき時、到りぬと信せし時は、——如何にして此決心を爲すに至りしや、又如何にして之を執行せしや、吾人は知る能はず。——彼は王者の如く堂々として、エルサレムに入りぬ。されど彼が預言の中より己を發

表するの形式を撰ぶや、政治上の發表と相距ると最も遠き者を取れり、又彼が「メシヤ」としての義務を如何に了解せしやは、彼が商人等を神殿より逐拂ひし事によりて知るべし、耶蘇が斯の如くして神殿を清めたるは主權者に反對したるにあらず、唯だ政治上の權力を人の靈の上に弄するを攻撃したるのみ、何れの國民の中にも眞の主權者と相並んで、一個或は寧ろ二個の無權的主權者ある者あり、政治的教會及び政黨是なり、政治的教會は最も廣き意味に於て、又極めて多様ある方法に於て統御の權を弄せんとする者あり、即ち靈魂と身體と良心と此世の財貨とを支配せんとする者なり、政黨の望む所之に同じ、政黨の首領等が一たび民の指導者となるや、暴虐到らざるなく、其弊や專制君主の其よりも甚だしき者あり、耶蘇時代の「パレストナ」は恰も此状態にてありき、祭司及び「パリサイ」の人等は國民を束縛し、其精神を殺せり、斯かる無權的主權者に對して耶蘇が峻嚴冷冽なりしは、實に人をして痛快ならしむる者あり、之と戦ひ、其豺狼的性質と偽善とを暴露し、之に向て審判日の恐るべきを知らしむるに於て彼は毫も倦まざりしのみならず、屢々聖き憤を含みたりき、然れども耶蘇は彼等が有すべき正當なる權利を認めたり、曰く「往きて己を祭司に見せよ」(馬太八)と、又彼等が神の律法を人に教ゆる事に關しては「凡て彼等が

爾曹に言ふ所を守りて行ふべし」(馬太廿三)と曰ひて彼等が本職を承認せり、然るに耶蘇は此人等に向て馬太傳二十三章に曰へる如き猛烈なる譴責の語を與へたり、曰く「噫、爾曹禍なる哉、偽善なる學者と、パリサイの人よ、爾曹は白く塗りたる墓に似たり、外は美はしく見ゆれども内は骸骨と諸々の汚穢にて充つ」と(七十)斯かる靈界の主權者に向つて耶蘇は弟子等の心に聖なる不虔を滿たしめたり、之と同時に王なるヘロデに對しても酷烈なる語をなして曰く「爾曹行きて其狐に告げよ」(路十三)の王を指す」と之に反して吾人が僅少ある材料より判斷し得る所に由れば、耶蘇は劍を帯びたる眞正の主權者に對しては全く異なる態度を示せしなり、彼は斯かる主權者が實際正當なる權利を有せる事を承認し、自らも其法律を避んとしたる事なかりき、耶蘇が「更に誓ふこと勿れ」(馬太五)と命じたるは、決して主權者の前にも誓を立つる勿れとの意に非ず、苟も一片の常識だにあらば此命令の眞義を誤解する事あらざるべし」と「ヴェルハウゼン」の言へるは正當なり、然れども吾人は耶蘇が主權者に與ふる地位を積極的方面に於て、餘りに高く見ざる様注意するを要す、人の屢々引照する「カイザル」の物は「カイザル」に歸し、また神の物は神に歸すべし」(馬太廿二)との語を引きて耶蘇の主權者に對する關係を證明せんとする者あれども、此語は

屢々人の誤解する所となれり。若し之に基きて耶蘇は神と王とを相併立せる、若くは密かに相同盟せる權力者となせりと曰ふ者あらば、正鵠を得たるものに非ず。是れ毫も耶蘇の念頭に存せざりし所たり。彼は寧ろ二者互に分離すべき者にして神と「カイザル」とは二の相異なる世界の主たる事を教えたるなり。耶蘇が此區別を爲し二者相距ること遠くして衝突の起る患あき程あるを示したるによりて此議論の争點は解決せられたり。差出されたる銀貨は此世の貨幣にして、「カイザル」の像を刻せり。故に之を「カイザル」に歸すべく、同じ理由によりて人の靈魂と其凡ての力とは「カイザル」の預り知る所に非ず。是れ神に屬すべき者たるなり。此二者の限界を相混同することは耶蘇の許さざる所にて、此處實に第一の要點の存する所たり。此點已に明瞭となりたれば吾人は耶蘇が王に税金を納むる事に異議なかりし眞意の存する所を知るべし。是亦大切なる點なり。即ち耶蘇は自ら主權者を尊敬せり、又人の之を尊敬せんことを欲せり。されど彼が主權者に對し如何程の尊敬を拂ひしやと曰へば、それは中立的なりき。

之と相對し耶蘇が主權者に關して語れる第二の言葉あり。此言葉は第一の者はど人の引照せざる所なれども、却て深く耶蘇の心を知るに足るべき者あり。且此言葉

が吾人に大切なる第二の理由は、吾人をして一般に法律制度に對する耶蘇の態度を觀察せしむるを得ればなり。今簡單に之を觀察せんとす。馬可傳十章四十二節以下に左の如き句あり。

「耶蘇彼等を召びて曰ひけるは、異邦人の君と見ゆる者は其民を治め、また大ある者どもは彼等の上に權を執る、これ爾曹が知る所なり。されど爾曹の中にては然かすべからず。爾曹の中大ならんと欲ふ者は爾曹に役はるゝ者とならん、また爾曹の中、首たらんと欲ふ者は凡の人の僕とならん。」

諸君は此中に人間價値の變動を見るならん。即ち耶蘇は何の躊躇する所もなく、常人の思想を轉倒せり。大ある者となる事、高き地位を占むる事は耶蘇の眼には人の僕たる事にてあるなり。耶蘇の弟子等も人の上に立たんとする事なく、凡ての人の僕となるべしと教えられぬ。次に諸君は耶蘇が權を執れる者、即ち當時の主權者に對して如何に判斷せしやを注意せよ。彼等執權者の行動は武力の上に置かれたる者なり。已に武力の上に置かれたるが故に、耶蘇に取りては道德的判斷の外に立てるなり。否、寧ろ其反對に立つ者なり。耶蘇は彼等に付て「是れ此世に權を執る者の爲す所あり」と曰ひ、更に弟子等に向ひては「されど爾曹は然かすべからず」と曰へり。法

律といひ、制度といひ、何れも腕力と實際的權力とに基ける者なれば、少しも道徳的價值を有する者にあらず。然れども彼は斯かる執權者に従ふ勿れとは命せざりき。唯だ彼等の價值(即ち無價值)に従ひて之を尊ぶべしと教えたり。又吾人は彼等と異なる否、寧ろ反對の主義によりて自己の生活を律すべし、即ち腕力を用ゆる事なく却て人に仕ふる者となるべしと教えられぬ。是に於て吾人は已に法律制度の一般の立場に論進せり。何となれば凡て法律は其違犯者に向つて、腕力を加ふる事を極めて大切なりと思へるが故なり。

第二、福音と法律制度との關係——此問題に關しても同じく二箇の相異なる見解あり。第一の説は現今にては殊にライプチヒのソーム教授が其著『寺院法』に於て唱道せる所にして、トルストイの意見に接觸する所あり。此説に由れば靈界と法律とは其實質上、正反對の地位に立つべき者にて、教會が法律的制度を構成するに至りしは福音の性質に矛盾し、又福音に基きて造られたる教會の性質に矛盾する者なり。と。教授は更に論を進めて曰ふ、教會初代の歴史を見るに、基督教が法律的制度に主座を興ふるに至らし、其瞬間、人間第二の墮落は始まれり。と。然れども教授は法律其者を非難せるにあらず。之に反しトルストイは福音の名の下に、一切法律の存在

を許すべからずとせり。トルストイが福音の最高の主義と爲せる所は是なり。曰く人は如何なる場合にも己が權利を主張すべからず、又何人たりとも否、主權者たりとも人の惡に對し有形上の抵抗を爲すべからずと。さればトルストイの曰ふ所に由れば、主權者と法律とは一も二もなく廢止すべき者なり。此説に反對する第二の説に曰く、福音は法律及法律上の關係を保護するのみならず、之を聖化して宗教の範圍に入る者なりと。以上は簡單ながら本問題に關する二箇の重なる見解を示したる者なり。

此第二の説に關しては多言を要せず。若し福音を以て一時代に於ける法律、及び法律的關係を悉く保護し又之を聖化する者なりと言ふ者あらば、是れ福音を嘲弄する者なり。凡そ事物を放任し若くは之を忍容する事は、之を批准し又之を保存する事と同一に非ざるなり。否、寧ろ吾人は嚴肅に問ふ所なかるべからず、福音は果して之を忍容せしや、或は此點に於てはトルストイの考が寧ろ當れるに非ずや。是れ稍々困難なる問題なるが故に吾人は少しく歴史に遡つて探究する所あるべきあり。

イスラエルの貧しき民、虐げらるゝ者が己等の權利の爲めに叫びたるは既に數百

年來の事なりき。之を預言者の言葉に見るも詩篇の作者の祈に聞くも、此叫喚の聲は今日尙深く吾人の心を痛ましむる者あるなり。而かも此聲や何時までも空しく地に響きたりき。當時の法律制度にして壓制的執權者の暴力の下に立たざる者なく、又彼等の意の儘に變更若くは利用せられざる者なかりき。されば今茲に制度行政の事を語り、又之に對する耶蘇の關係を研究するに當りては、決して今日の法律上の關係を以て論すべきに非ず。何となれば今日の法律は半ば基督教に基きて生じたる者なればなり。耶蘇の周圍にある國民は如何なる者なりしやと曰ふに、其大半は數代の間、空しく己の權利を要求し、法律は即ち暴力なりと心得たる民にてありき。斯かる國民の中に在りては法律に對して絶望的となるは實に已を得ざる事なり。一方には地上に於ける公平に付て絶望し、他方には法律の道德上の價值に付て絶望せり。這般の感情は福音の中にすら幾分か伺ふを得べし。然るに爰に此感情を矯正する所の第二の要件あり。即ち耶蘇が凡ての眞乎宗教家と同じく神は此世、若し然らずば未來に於て、必らず義の審判を果さずば已まざるべしとの堅固なる信仰を有せし事是なり。是亦注意すべき點なり。斯かる正義の上の應報としての法律は、耶蘇の排斥せざりし所たるのみならず、彼は之を以て崇高にして他を支配す

る觀念となし、且、神の尊嚴より出づる働なりとせり。——神の慈悲が此應報に如何ばかり影響する者なるやとの問題は今茲に論すべきに非ず。——されば耶蘇が全體、法律及び行政を擯斥したりこの説は到底維持すべからず。耶蘇の思想に由れば何人も己が權利を得べきのみならず、其弟子等も他日神の審判を助けて自ら人を審判くべかりき。耶蘇が排斥せるは唯だ暴力即ち無法を以て實行せらるゝ法律、即ち專横殘忍を以て國民に臨む所の法律なりき。彼は眞正の法律を信せり。又眞正の法律は必ず實行せらるべきを確信せり。彼は眞正の法律を行ふには腕力を用ゆる必要だに、あしと感せしは、確かに之を信じたりき。

是に於て吾人は最後の論點に入るべし。耶蘇の語中には彼が弟子等に向て一切、法律上の要求を擲ち、以て己等の權利を捨つべきを命じたる者あり。諸君は皆其言葉を知れるならん。余は只一語を擧げて説明せんとす。曰く「惡に敵すること勿れ。人なんぢの右の頬を打たば亦他の頬をも轉らして之に向けよ。爾を誣へて裏衣を取らんとする者には外服をも亦取らせよ。」(太五の卅)之によりて見れば、耶蘇は權利を擯斥し、凡て法律的生活を一掃せしめんとしたる者の如し。是に於てか屢々此語を指して福音と實際的生活との衝突を證明せんとする者あり。或は基督教が已に其

祖師の精神を失ひたる事を證明せんとする者往々之あり。之に對して吾人は次の點に注目すべきあり。

(甲) 前にも曰へる如く耶蘇は神、必ず世を審判くべしとの確信に懈ちたれば、最後の勝利を得べき者は壓制者にあらで、壓制を被むる者却て其權利を得べしと信じたり。

(乙) 此世の權利は本と小事のみ、之を失ふも憂ふるに足らず。

(丙) 世は悲むべき境遇にあり。不義は獨り天下に横行し、被虐の民は空しく權利を渴望しつゝあるなり。

(丁) 最要の點は是なり。神は正義に加ふるに慈悲を以てし、其日を善き者にも惡き者にも照し給ふが故に、耶蘇の弟子たる者は其敵に向ひても愛を示し、柔和なる心を以て敵の武器を奪ふべきなり。

是れ即ち根本思想なり。之によりて彼言葉の意義を制限すべきなり。斯くても耶蘇の要求は左程まで超世俗的なるか。吾人には實行すべからざるか。吾人は現に家族朋友の間に於ても惡に報ゆるに惡を以てせざれ、嘲弄に酬ゆるに嘲弄を以てせざれと教ゆるならずや。若し各人己の權利を主張する事のみを知りて、權利の侵害

を受くるも置て問はざる事あるべきを學ばずば如何なる家庭か。又如何なる團體か。存立するを得んや。耶蘇が其弟子を見る恰かも朋友の一團の如くなりき。されど耶蘇は未だ満足せず、更に兄弟の一團となし以て益々擴張する所あらんとしたり。若し然りとせば吾人は如何なる場合にも敵に對して己が權利を主張すべからざるか。人は絶對的に柔和の武器を取るべきか。トルストイの曰へる如く主權者は人を處罰すべからざるか。隨て主權者は消滅すべき者なるか。土地家屋は無法の攻撃を受くるも國民は手を拱して戰を避くべきか。余は敢て言ふ。耶蘇の彼言葉は全然斯かる精神に出でたるに非ずと。彼が如き解釋を爲すは愚にして又危險なる誤解たり。耶蘇は心常に個人を思ひ、個人の心が常に愛の性質を帯びん事を思ひたるなり。然るに耶蘇の所謂愛を以て權利の主張、善意の裁判、嚴正なる處罰とも相併立する能はざる者なりと爲すは一個の偏見にして、斯かる思想を耶蘇の言句に求めんとするは抑々徒勞なり。何となれば耶蘇の目的は世の法律制度以外に在ればなり。然れども吾人は福音的要求の尊嚴を傷けざらんが爲めに次の如く附言するを得べし。曰く耶蘇の弟子たる者は權利の主張を已むるを得べき筈なり。彼等は相憐み相扶けて兄弟的國民とあるべし。此國民の中に在りては法律を行ふに腕力を要

せ。人々良心に従て自ら服従すべし。此の如き國民的結合は法律制度の力に據るに非ず。唯だ愛の働によつて成さるゝなりと。

第七回

前回には福音と法律及び制度との關係を論じ、耶蘇が神を現世、來世の審判者なりと確信せし事及び弟子等をして權利を放棄せしめんと勉めたるを見たり。抑々耶蘇は瑣々たる當時の世俗的關係には心を留めざりき。況してや一層複雑なるべき將來の世俗的關係をや。彼が重大なる關係と認めたる者は唯だ一。即ち個人と神の國との關係ありき。耶蘇は思ひぬ、人は高價の眞珠を得ん爲には凡の所有をも賣る者なれば、況して人間最高の關係を得んが爲には、此世の權利は愚か凡を捨つるをも辭すべきにあらす。斯くて耶蘇は之と關聯して別に人と人との一致に關する新教訓を興へぬ。此一致や法律に由る一致にあらで、愛に由る一致なり。柔克く敵を服するの道たるあり。嗚呼、高くも亦輝ける理想ならずや。思へば基督教の建設と共に斯かる理想は吾人に興へられしなり。人間歴史の前途に高く掲ぐべき目標は實に是ならずや。素より此理想に達し得べしと思ふ者なけん。されど之に近づく事は

不可能にあらす。否、是れ吾人の義務たるなり。今や二三百年前と事變はり、人は既に此理想に向つて道德的責任を感じるに至れるのみか、眼光鋭き豫言者の人は既に愛と平和の國を以て、痴人の夢に非ずと觀破せるあらずや。

然るに或論者は曰ふ、是れ今日の難問題をして益々困難ならしむる者なりと。蓋し人々汲々として權利の擴張の爲に競争しつゝあるは眼前の事實なればあり。斯の如きは果して基督教の精神に適へるか。福音は斯かる競争を禁せざるか。否、權利の擴張は扱置き、既に持てる權利すらも捨つべしとは福音の教ゆる所ならずや。然らば吾人基督教徒は世の就業者をして權利の競争を斷念せしめ、唯だ忍耐と服従とのみあるべきを論さるべからざるか。

此問題の爲には終に基督教に向つて非難を加ふる者あるに至りぬ。吾人は社會主義に傾ける熱心なる政治家(而かも基督教徒たる)の尙咄くを聞く。曰く福音は此點に關しては吾人を棄て、顧みざるものゝ如し。良心が善しと感ずる所の勞力をも福音は抑制せんとするにあらすや。實に福音は絶對的柔和と服従とを要求したる結果、人生の戦に必要な武器を奪ひ、人間の活動力を悉く麻痺せしむる者なりと之を語るに悲痛を以てする者あり、或は満足を以てする者あり。満足せる者は曰ふ、

福音が健者強者の福音ならで弱者、傷者の福音なる事は余輩の夙に知る所、何ぞ今更の如く驚くを要せん。又今の世の人生は權利競争の生涯なりと云ふが如きは福音の預り知らざる所、又預り知るを好まざる所たるは余輩の常に知れる所なりと。吾人は之に對し、如何なる解答をか與ふべき。

余思ふに、斯かる言説を爲す者は未だ福音の何者たるを明かにせずして、妄りに之を世俗的のものと速断せるなり。忘る勿れ福音は内なる人に關するものなるを、即ち健康と病弱、好運と不運、苦戦の生涯と安樂の生涯等の別に係はりなき一定不變の根本的人性に關するものなるを、曰はずや、「我國は此世の國に非ず」と。然り福音が建設せんとする所のものは決して此世の王國に非るなり、彼の羅馬法王が建設せんとせる神政體を始め、有らゆる此世の王國は福音と毫も關係なき者たるは此一語によりて明かなり。否々、福音の意義は更に廣潤なるものあり、即ち消極的方面には唯宗教が直接に、法律的に萬般の俗事に干渉するを禁ずるのみなれども、他方には積極的に吾人に告げて曰ふ、汝の何人たるを問はず、汝の地位の如何に係はらず、即ち奴隸たると、自主たると、戦ひつゝあると、息ひつゝあるとに係はらず、汝の双肩に置かれたる眞の天職は常に同一あり。此處實に汝に對する唯一の關係と意向と

のある所、汝慎んで之を犯すなかれ、其重且つ大なる之に比すれば何物も空の空のみ。所謂唯一の關係及觀念とは他なし、神の子たるべき事、神の國の民たるべき事、及び愛を行ふべき事、是なり。若し夫れ地上に於ける汝が生活の方法や、或は隣人に對する道の如きは、一に汝の撰擇に委せんのみと、是れ使徒保羅が了解せる福音の意義なるが、余は保羅が此點に於て誤解せりと信する能はざるなり。されば吾人は、大に戦ふべし、競争すべし、虐げらるゝ者の爲には、義を唱へよ、良心の命に従ひ、人の益と信する所に従ひ、世事を處理せよ、されど福音より直接の助力を得べしと思ふ勿れ。凡て利己的要求を爲す勿れ、亡ふる者は此世と其慾とのみならず、其律法も富も亦共に逝くものなるを忘るゝ勿れ。余、再び之を曰はん、福音は唯一の目的と意向とを有し、人の之を等閑にせざらん事を切望するものなりと。若し耶蘇の言中、著しく權利の放棄を勸めて寧ろ苛酷に過ぎたるが如き者あらば、吾人は宜しく神に對する關係の至高絶對なる事と愛の觀念とを想起すべきなり。蓋し福音は世俗的發達の問題に超然たる者にて、關する所は物質的事物にあらずして、唯だ人の靈魂のみなればなり。

是に於て余輩は次の問題に入りぬ、而して其解答の半は已に之を終れり。

(四) 福音と労働即ち文化問題

茲に言はんと欲する所は已に論じ來りたる所と畧ぼ同一の問題なれば唯だ簡單に叙述して已まんのみ。

耶蘇の教訓は社會的職業に冷淡にして、又技藝學問の如き理想的所有物を輕侮せるが如しとは古來屢々受けたる非難の聲にして、今に至つて其聲愈々高きを覺ゆ。論者曰く、耶蘇は嘗て人に労働を勧めたることなく、又進歩的事業を獎勵したる事なし。吾人は耶蘇より元氣ある活動を樂むの語を聞く能はざるなり。學問技藝の如きは畢竟眼中に無かりしにあらざるや。ダビッド、フリードリヒ、ストラウスは憐れなる最後の著書『舊信仰と新信仰』に於て此點に關し、殊に過激なる批評をなせり。氏は福音の根本的缺點を指摘し、福音を以て社會文明の發達に對し極めて無頓着なる者、隨て腐朽用に堪えざる者なりと論難せり。斯かる説を爲すもの獨りストラウスのみならず、其前遠く敬虔派は既に之に似たる意見を表白し、彼等獨特の論法によりて此問題を論じ去らんと試みたりき。以爲へらく耶蘇たる者は凡て職業を有する各種の人の直接の模範たるべき筈なり。又人間の有らゆる事情に處して堪能な

るべき筈なり。輕卒なる觀察をなせばこそ、耶蘇の生涯は此要求に應せざるが如く見ゆるあれ。若し細密に觀察せんか、耶蘇は實に最良の左官、最良の裁縫師、最良の審判官、而して又最良の學者たりしを知るべく、又何事にても最も善く知り、最も善く理解せし者なるを發見し得べしと。斯かる論者は耶蘇の言行を曲解し、之を借りて、己が言はんと欲する處を現はし、且之を證明せんと試みたるなり。其爲す處素より兒戯に類せり。されど彼等が感ずる所の問題に至りては、慥に眞面目なる考察を爲すの價あり。彼等は自ら感ずらく、我良心と天職とは我をして一定の活動を爲し、一定の職業を有せざるを得ざらしむと。彼等は遁僧的生活の非なるを知れり。されど又何處までも耶蘇の摸倣者として生きん事を願ひぬ。以爲へらく耶蘇は吾人と同一の境遇又同一の地平線上に在るべき筈なりと。

此問題たる已に前回に於て論じたる者と同一の問題にして、唯範圍の廣くなれるのみ。福音を専ら世俗的に考へ之を以て處世の道を教ゆる者と爲すは人の陥り易き誤謬なり。古來人類は性質として高尚なる事物に對しては自由と責任とを避け、成るべく一定の律法に服従せんとする強き傾向を有する者なるが、此傾向は今や此處にも現はれぬ。蓋し道德的自由を以て生活せんよりは、假令嚴刻なるも一定の

權威の下に生くるは却て遙かに容易なればなり。そは兎も角福音が人の職業に對し、斯くも冷淡に見え、學問、技藝、文化等の人事に關係せざる如きは果して福音の缺點に非るなきか、是れ尙、一の疑問たるなり。

余は答へて曰はん

第一、若し福音に斯かる缺點なしとせば如何之によりて何の得る所かある假りに福音は世俗人事に深き關係を有せりとせんか福音は却て其中に捲込まれ己が本色を失ふの患なきか少くとも然か見ゆるの恐なきか勞役と謂ひ、技藝と謂ひ、學問と謂ひ、將又、文明の進歩と謂ひ、何れも抽象的に存立するものに非ず、唯だ一時代に於ける一定の状態中に存する者なり、然るを若し福音は斯かる状態と結合すべき者なりとせば、是れ實に轉變極りなき者と相提携せる者と謂ふべし、見ずや羅馬教會が一時代の文明と結合したるが爲め今や重き負擔の下に苦みつゝあるを、回顧すれば中世紀の頃なりき、羅馬教會は好んで社會文化の各問題に立ち入り、之に秩序と規則とを與へたりしが、其結果、教會の神聖なる教旨と本分とは當時得たる智識主義若くは趣味と相區別するなきに至り、今日となりては終に哲學及び國民經濟、一言すれば中世紀の全文明と固く結合して復た離す能はざるに至りぬ、之に反

して福音が只だ宗教の大絃のみを弾じて更に他の音律を顧みざりしが爲めに、類に與へたる功績の如何に多大なるよ。

第二、勞役の必要なる文化の貴重なる素より疑ふべくもあらず、吾人は之が爲めに粉骨碎身も辭せざるあり、されど忘るゝなかれ、是れ未だ最高の理想となすに足らざる事を何となれば之のみにては眞に人性を満足せしむる能はざればあり、勞役は快樂を生ず、されど快樂は勞役の一方面に過ぎず、然るに余が常に見る所によれば、勞役の快樂を唱ふる者は其實、烈しき勞役を爲し居らず、之に反して、常に營々として、烈しき勞役を爲す者は却て之を稱揚するに躊躇せるなり、然り世の勞働を談ずる者多くは是れ冗談のみ、僞善のみ、誠を曰へば、勞役の四分の三以上は畢竟人を痴鈍ならしむる者なり、されば辛き勞役を爲す者が黄昏の時を慕ふと彼の

見よや頭も手も足も

悦び合ひぬ諸共に

今日の仕事の果てにしを。

と歌へる詩人に同感なるべし。

然らば勞役の結果は如何にと曰へば、是れ亦た満足すべきものに非ず、人其業を成

し終れば、今一度試みばやと思ふならずや。是れ改めたき事多ければなり。我爲したる過失は實に心の憂、良心の煩たればなり。否、吾人の生命は勞役の中に存せずして人に愛せられ、又人を愛する所に於て存す。勞役の爲の勞役は吾人之れを厭ふ。フアウスト善く言へり。戀しき者は生命の流にぞある。嗚呼慕はしきかな生命の泉と。勞役の貴重なる例へば安全瓣に比すべし。されば勞役其者は本來何等の價値をも有せず。隨て吾人の理想中に置くべき者にあらざるなり。文化の進歩も亦之に同じ。吾人は文化の進歩を歓迎する者なれど、今日吾人を悦ばす所の進歩は明日は機械的となり、乾燥無味なる者と化するに非ずや。神經質の人は或は文明進歩の賜を感謝すべけれど、之によりて心の根本的變化は愚か根本的ならざる變化すらも起らざりしを感すべく、眞に彼を動かすに足るべき問題と、彼が立てる所の根本的關係とは毫も之か痛痒を感せざるあり。新たなる者來りて、重荷を卸したるが如く思ふは唯だ一時のみ。諸君よ、人漸く長じて深く人生の眞味を解するに至り、又胸中に靈的世界を有するに至らば、彼は必らず悟るべし。事物の外形上の變遷や、文化の發達の如きは要するに己が進歩の上、に何等の力をも貸さざると及び己も亦祖先が求めたる力の泉を慕ふ者なるを斯くて、彼は永遠と愛の國、即ち神の國の民たるの

已むを得ざるを感すべし。而して此國を宣傳し之を證明したる者は實に耶蘇基督あるを悟らば感謝の涙に咽ばざらんや。
第三之と同時に耶蘇の教訓が他方には進撃的、膨脹的性質を有せるとは耶蘇の明らかにかに知れる所なり。彼は曰ふ。われ火を地上に放たんとして來れりと。且つ曰く。我は其火焰の已に揚り居らんとを望むと。(路十二章) 彼は新人類を造らんが爲に審判の火と愛の力を呼び來らんとしたりき。而して彼が愛の力を語るや、單純にして卑近なりき。即ち飢たる者に食を與へ、裸かなる者に衣を與へ、病める者及び獄に在る者を訪ふの類なりき。然るに之と同時に彼の眼光は最爾たるパレスチナの天地を鏡として、人類精神の一大革新を達觀せしと明かなり。曰く。爾曹の師は一人なり。爾等は皆兄弟なりと。(馬太傳廿三章八節) 且以爲へらく世の終は已に來りたれど。此時に蒔かれたる信仰の種子は尙生長して喬木となるの時日を餘さずと。加ふるに彼は神に關する知識を世に示し、且つ信すらく此知識により、幼者は成熟し、弱者は強健となり、何れも神の勇卒たるに至らんと。此知識や荒野を變じて沃土と爲す源泉の如く、生命の水は滾々として之より流れ出でんとす。彼が此知識を最高最要なる唯一の財産と呼びしは之が爲めなり。又此知識を以て人間進歩の要件と爲したるも

之が爲めなり、吾人は更に曰はんとす此知識や實に萬事の成立及び進歩の要件なり、耶蘇の眼中には獨り審判のみならず義愛平和の國の存するあり、此國や天より來れりと雖も又此世界の爲めに存す、此國の何時來るや耶蘇自らも之を知らず知る者は父なる神あるのみ、されど耶蘇は如何にして此國が膨脹し、又如何なる様に膨脹するものなるやを知れり、彼の胸中には多面的なる戲曲的想像の往來せるあり、然れども其中に自ら明確なる直觀の存するあり、即ち彼は地上に於ける神の葡萄園を見たり、又神が働く者を園中に招くを見たり、(馬太傳十六章) 招かれかる者は福なるか、彼等は最早や市井の無賴漢にあらず、園中に働きて其報酬を得べき者たり、又銀貨を僕等に托したる主人の譬語を見ずや、(馬太傳廿五章) 之を托したるは働かせんが爲にて布に包み置くが爲ならざるを教へたるに非ずや、されば日々の課業と云ひ、労働と云ひ、將又膨脹進歩と云ひ、凡て神と人類との爲に爲さるゝ限り、又一時の事情に拘束せられずして、永切の光明に照さるゝ限り、耶蘇は之を是認せしなり。

以上之を概括して言へば次の如し、最初に述べたる如き非難は果して正當なるや、吾人は福音が文明の進歩と一致せんことを眞に願ふべきか、思ふに此點に於ては、

吾人は福音より學ぶ所こそあれ、更に之を咎むるの理由あるを見ず、福音は人類が勤むべき眞正の勞役を教ゆる者なれば、福音の使命を論ずる者は所謂文明的勞役と稱する賤劣なる立場より爲すべきに非ず、近時の一史家は曰ひぬ、基督の影像是、道德的文明の唯一の基礎にして、國民の道德的文明の消長は實に社會に印せられたる基督の影像の鮮明なると否とに由ると。

(五) 福音と神の子、即ち基督論問題

今や吾人は論歩を進めて以上述べ來りし諸問題の境を出でんとす、思ふに此等四種の問題たる實は同一の問題と見るを得る程互に密接なる關係を有せり、若し此等の問題に向つて正しき解答を與ふる能はざる者あらば、そは畢竟福音を見ると未だ高からざるが故なり、即ち福音問題を引下げて世俗上の問題となし、之と相錯綜せしむるが故なり、語を換へて之を曰へば福音の力は人間最深の根底に關する者なり、然り只だ之のみに關する者にて、其鐵槌は獨り此處にのみ置かれたるなり、されば此最深の根底に立歸り、茲に感ずる所、悟る所、あらざる者は、終に福音の眞義を解する能はずして、却て之を衰潰するか、若くは之を以て無用の長物と爲さんの

み。
 是より吾人は新問題に付て討究せんとす。何をか新問題となす。曰く耶蘇が福音を宣傳するに當り、彼自らは此使命に對し如何なる態度を取りしや。又彼は自から如何なる者として人に受けられんと欲せしや。是なり。耶蘇の弟子等が耶蘇を如何に受入れしや。如何に其心に銘せしや。又耶蘇に付て如何なる判断を爲せしや。等の問題は後回に譲り、今は耶蘇が己に關して自ら爲せる證明に付て語らんとす。然るに、一たび此研究に着手せんとすれば、忽ち一世紀より今日に至る數千年間の教會歴史を蓋へる大爭論の渦中に投せざるを得ず。此大爭論中、或は瑣々たる枝葉の問題の爲めに兄弟の交を絶ちたる者あり。或は罵られ、或は放逐せられ、或は獄に繋かれ。或は殺戮せらるゝ者幾千を以て數ふべく、其歴史や實に慘憺たるものありき。基督論問題の爲めに宗教上の教理は恐ろしき武器と變じ、人心爲めに恟々たりき。此狀態は今も尙持續せられ、基督論の研究は尙息まず、恰も福音中には他に問題なき者の如し。隨て之に伴ふ所の熱狂的行動も其跡を絶たず。本問題は已に斯の如き歴史上の災厄を有し、徒らに黨派の玩弄物となりたるが爲め、其解釋は一層困難となれり。と曰ふも誰か怪む者あらん。然れども若し、公明正大なる眼光を以て福音書を讀

ひ者わらば、彼は本問題が必ずしも解し難きものに非ざるを感せん。若し其中に到底吾人の了解する能はざる者あらば捨て、復た問ふと勿れ。蓋し耶蘇も意ありて之を秘したるなるべく、又問題の性質上了解すべからざる者にてあるべし。斯の如き者は只だ比喻を以て曰ひ現はすの一途あるのみ。語に曰はずや、世には記號(即ち)に由らざれば解する能はざる現象ありと。

耶蘇の自己證明を論ずるに先ち、確定し置くべき二つの重要な點あり

(一) 耶蘇は己が命じたることより以外の意味に於て、人の己を信ずると及び己を愛するを欲せざりき。——第四福音書は稍もすれば耶蘇の人格を福音の内容よりも高くせんとする傾向を示す者なるに、此點に關する思想は尙嚴として異はらず。曰く「若し爾曹我を愛せば我誠を守れ」と(約論傳十四)然るに人々の中には耶蘇の教訓に重きを置かずして、徒らに彼を尊び彼に信賴するの徒あるは、耶蘇が既に其在世中に經驗せし所なり。耶蘇此種の人を責めて曰く「我を呼びて主よ、主よと曰ふもの悉く天國に入るに非ず。之に入る者は唯天に在す我父の旨に遵ふ者のみあり」と(馬太傳七章)されば耶蘇は福音を離れて別に己が人格と尊嚴とに關する教を設くるの念を有せざりしや明かあり。

(二) 耶蘇は天地の主を呼びて己が神己が父となし又己に勝れる者唯だ獨りの善き者と爲せり。——彼は己が持てる物己が爲すべきとは皆此父より來ることを確信せり彼は父に祈り父の意に従ひ熱誠以て父の意のある所を知らんとを勉め又知りたる所は必らず之を遂げんと勵みたりき彼が目的も力も判斷力も功果も將た又堅固なる義務の念も一として父より來らざるは無かりしとは即ち福音書の言ふ所なり何の必要ありてか之を改造し若くは迂回して他に説明を求めんや此の感と祈り働き努力し又辛酸を嘗むる所の彼は其神に對して己を他の人間と相結合せしむる所の一個の人間にてありき。

此二つの要點を知れば耶蘇の自己證明に關する問題の範圍は自ら明かなりされど積極的には未だ此問題に付て何等の解答をも得たるに非ず然るに若し耶蘇が自己を呼ぶに用ゐたる二個の名稱を深く考察せば吾人は直ちに積極的に本問題の眞髓に通るを得べし二個の名稱とは曰く神の子曰くメシヤダビデの子若くは人の子。

神の子なる名稱は昔はメシヤ的意義を有したりしならんも現今は耶蘇をメシヤと呼ぶよりは寧ろ神の子と呼ぶとの一層吾人に解し易きを覺ゆ何となれば耶蘇

自ら神の子たる觀念に新らしき意義を與へ之によりて殆どメシヤ的意義を失はしめられたればなり少くとも彼はメシヤ的意義を有せしむるとの必要を感せざりし者の如し苟くも吾人が死せる言語を以て満足せざる限りはメシヤなる名稱は甚だ興味なき名稱なり見よ此名稱が果して如何なる威嚴を有し又如何なる意義と品位とを有するや等の問題は説明なくては否猶太人ならでは到底了解する能はざるに非ずや若し猶太の政治的形骸の滅亡後に於て「メシヤ」なる語が如何ある意義を有せしやを知らんと欲せば先づ歴史的研究によりメシヤなる語の眞義を發見し置くべきなり。

始に神の子なる名稱に付きて考察せん耶蘇は何故に又如何なる意義に於て神の子と自稱せしや耶蘇の語中此問題に向て殊に明白なる答を爲せる者あり即ち馬太傳(廿七章)に次の句あるを見る(例により約翰傳には斯かる句なし)曰く父の外に子を識る者なく又子及び子の顯はす所の者の外に父を識る者なしとされば神を識るとは神の子たるを得る必要條件たるなり此知識によりて耶蘇は天地の主たる聖なる者を父として殊に我父として認知するを得たりされば彼が自ら神の子なりと自覺するに至りたるは彼が神を父として殊に我父として認知したること

の實際上の結果に外ならず、乃ち知る神を識る事は神の子たる資格の一部にあらずして其全部なるを。然れども茲に二つの考ふべき點あり。

第一、耶蘇が先人未發の方法に於て神を識るを得たりと確信せしこと。

第二、耶蘇が言と行とに由りて神に關する知識、隨て神の子たる資格を凡の人に分與するとを己が天職なりと認知せしこと。

此自覺により耶蘇は自ら神に呼ばれて神に立てられたる子、即ち神の子なることを知りぬ。彼が天を仰ぎて、我が神、我が父と、呼ぶを得たるは、之が爲なり。此語の中には、耶蘇ならでは何人も感ずる能はざる一種の味の存するありき。然れども耶蘇が何によりて斯かる非凡の意識に到達せしや、又何によりて己が力を自覺し、又此力の上に横はれる責任と使命とを自識せしや、是れ耶蘇の中に隠るゝ秘密にして、如何なる心理學も之を探究する能はざるべし。唯だ約翰が耶蘇の口を借り、彼をして父なる神に向て「爾は世の基を置かざりし先に我を愛し給へり」(約翰傳十七)と曰はしめたる信任の語により、髣髴として耶蘇の確信のある所を伺ふを得るのみ。探究は茲に終りぬ。最早や一步も進む能はざるなり。耶蘇が始て神の子たるを自覺せしは何時頃なりしや、此自覺を得たる時、彼は少しも疑を抱かざりしや、彼は神の

子てふ觀念が果して實際の我と相一致調和せりと感せしや、若しくは心中に疑雲起り躊躇決せざる所あざりしか。斯かる問題に關しても吾人は何等の解答をも與ふる能はざるなり。此深奥なる秘密に近づくとは、獨り耶蘇と同様の經驗を有する者のみ之を善くす。或は預言者にして此秘密の幕を開かんと試むる者もあらん。されど吾人は唯だ己を知る事と謙遜とを教へたる彼耶蘇が特に己のみを神の子と稱せし事實を承認して己のみに耶蘇は父を知れることを自覺せり。彼は此知識を天下に傳播するを以て己が責任となし、是を以て神の業を爲すと、なりと確認せり。此業たるや神の業の中に最大なる者にて、天地創造の目的は實に茲に在り。と謂ふべかりき。今此大業は耶蘇に依託せられぬ。彼は神の力によりて之を完成せん事を欲し、且つ己に神の力を感じ、之に由りて必勝を期したりき。故に曰く「父は萬物を我に授け給へり」と、今之を人類の歴史に見るに、古來預言者なる者屢々現はれ來り、自ら神の使命を帯びたるを自覺し、好むも好まざるも之を世に宣傳するを我義務ありと感せしとあり。されど其使命や不完全にして、缺損多く加ふるに政治上其他特殊の事情と相纏綿し、唯だ一時の事情に應せんが爲に案出せられたる者ならざるはなし。加ふるに預言者自らも其使命の模範たると甚だ覺束なき者多し。

之に反し、耶蘇の帯びたる使命は深遠廣大能く人間秘奥の絃線に觸れ、狹隘なる猶太國民の墻壁内にありながら、尙能く全人類を蓋ひたりき。此使命は即ち父なる神の使命なれば、完全無缺にして、且つ其眞髓に至りては、時代的形式の束縛より容易に脱却せしむるを得べかりき。此使命は歲月と共に衰頹することなく、今日に至る愈々強健に又益々活潑に有らゆる出來事に向て常に凱歌を奏し居れり。此使命を宣傳せし彼は未だ何人にも其地位を譲らす、今尙依然として人生の上に意義と目的とを與へつゝあるなり。——彼は即ち神の子たるなり。

是に至つて論歩は將に第二の名稱即ち「メシヤ」の論に移らんとす。今之を略説するに先ち一言し置くべきは、有名なる學者例へば「グェルハウゼン」の如き人が耶蘇の「メシヤ」と自稱せしとに疑を抱けると是なり。然れども余は同氏の説に賛同する能はず。何となれば若し此の如き結論に達せんと欲せば、勢ひ福音書の記事を抹殺せざるべからざるが故なり。耶蘇が自ら呼んで「人の子」と云ひしとは疑ふべくもあらぬ事實なり。而して此「人の子」なる語は「メシヤ」てふ意義より他に了解するの道なきが如し。又他の記事は暫く置き、耶蘇がエルサレムに入りたる記事(路加傳十九章廿二節)の如きは、若し耶蘇が自ら約束の「メシヤ」なりと信せし事なく、又「メシヤ」として

人に受けられんと欲せし事なかりしとせば、全く削除さるべき者たるなり。加ふるに耶蘇が自己の意識と使命とを曰ひ現はせし語の如きも、「メシヤ」的觀念を離れては全く了解する能はざるべし。且つ此説の積極的根據たる、甚だ薄弱にして尙疑問に屬する者多きが故に、吾人は安んじて耶蘇が「メシヤ」と自稱せしとを信するを得るなり。

そも、當時猶太人が想像したる「メシヤ」と「メシヤ」に關する一切の觀念とは、相聯結せる二條の線路に沿ふて發達し來れり。一は王の系統にして一は預言者の系統なり。此外にも之が發達を助けたる他の勢力少からず。而して神は他日見るべき形を以て其民を統治すべしとの希望は、此觀念に向つて大なる光輝を與へぬ。抑、メシヤてふ觀念の特徴は、イスラエル王國の太陽が西天に沈みて、餘光尙燦爛人々光榮ある理想的王國を夢みたるに基く。加ふるにモーセを始め其他の大預言者等に關する記憶も亦此想像を助けたり。然らば耶蘇の時に至る迄「メシヤ」に對する希望は如何なる形にて存せしや。又耶蘇は如何に之を取捨し、又之を變更せしや。是れ余輩が次回に畧説せんとする所なり。

耶蘇在世の頃猶太に行はれたるメシヤ論は一定の教理をなせるにわらず、又嚴然たる律法上の規定と連結せるに非ず。只吾人は、その國民の宗教的、政治的、希望の由て懸かる所なるを知るのみ。抑メシヤ論は獨り根本問題に於てこそ變らざれ、一步を此外に出づれば雜然として説の歸する所を知らず。古の預言者等は燦然たる未來を心に描き、他日神自ら現はれ來りてイスラエルの敵を征服し、茲に正義と平和と喜悅の世界を造るべしと信せり。然るに彼等は又ダビデの家より賢にして力ある國王出て來りて輝ける聖代を現出せしむべしと預言せり。彼等は更に進みて曰へらく、イスラエルの民は即ち神の子にして、世界諸民の中より殊に撰はれたる者ありと。以上三種の觀念は、後世メシヤ的觀念を造るに至れる要件たりき。斯くてイスラエルの民が抱きたる凡ての希望は此樂しき未來の希望の中に包まれたり。然るに基督降世前二百年の間に又々次の如き思想の加へられたるを見る。

(一) 猶太の歴史の膨張に連れて猶太人は次第に世界諸國民に注意するに至り、人類てふ觀念茲に起り、メシヤの目的及び事業に關係し、世の終の審判も今は全世界に及ぶものとなり、メシヤは即ち全世界の統治者及び審判者とはなりぬ。

(二) 樂しき未來の生活は善良にして高潔なるべしとは、昔の猶太人の已に想像せし所あるが、彼等は敵國の征服を以て此理想界に伴ふ第一の要件と心得たるが如し。然るに今や道德的責任の感漸く強く、神は聖なりとの信念益々深く、其結果メシヤ時代の民は聖善なるを要すとの思想となり、随つて來るべき審判は必らず一部のイスラエル人の頭上にも來るべしと信するに至りぬ。

(三) 個人主義漸く盛あるに隨ひ、神と各個人との關係大に重せられ、イスラエル人は各自ら國民の中心ありと心得、國民とは畢竟個人の集合體に外ならずと信せり。彼等は政治上に於ける神の攝理と相並んで、個人の上に於ける攝理を信じ、隨て個人の價値と責任とを感せり。加ふるに末日の必ず來るべきを信せしが爲め永生の希望茲に湧き、永遠の刑罰を恐るゝの情起りぬ。此等内部的發達の結果として生きたるは、重きを個人的救済に置くことと復活の信仰とにてありき。然るに顧みれば此民の汚濁なる、其罪の大なる、逆も榮光の國に入るべきものに非ざれば、入るべき者は只聖善の人のみなるべしとは、鋭き良心あるもの、已に看破せる所なりき。

(四) 未來に關する猶太人の信仰は、歳を追ふて超經驗的となりぬ。即ち超自然的超

世界的傾向を示すに至りぬ。以爲らく未だ見ざりし者天界より降り、茲に人の知らざりし世界歴史の新潮流を現出すべく、否々地上の變化は最早最終の目的にあらざるべしと、斯くて絶對圓滿の幸福は唯天に於て得らるべしとの思想起りぬ。是に於てか猶太人が待ち望みたる「メシヤ」は最早此世の帝王にあらず、イスラエル國民の全體にも非ず、又た神にも非ずなりぬ。素より「メシヤ」は人として人の中に來るべきも、現世の特色を帶ぶる者に非ず。彼は永遠の昔より神と共にありしが、一朝天より降臨し超人的手段によりて其業を完成すべき者たり。茲に至りて人々「メシヤ」の道德性に重きを置き、「メシヤ」を以て神の命令を悉く實行する所の完全なる義人となしぬ。管に義人なるのみならず、彼の道德は人を益すべしとの思想さへ起りぬ。されば以賽亞書第五十三章に暗示されたる受難の耶蘇てふ思想には未だ到着せざりき。

然るに此等の新思想は未だ粗莽なる舊思想を全く排斥するの力なく、又國民の大多數が從來抱き來れる愛國的、政治的、見解をも除去する能はざりき。國民の大多數は以爲らく、神自ら王節を取り、其敵を征服し、イスラエル王國の基を置き、一人傑を撰びて王となし、此國を統御せしめ、庶民等は己が無花果樹の下に、或は己が葡萄園の

中に安坐して、天下泰平を歌ひつゝ、其足は敵人の頸背を踏みて、多年の怨恨を晴らしむべしと。是れ獨り愚昧の民の所信のみにも非ざりき。されど一部の人士は已に斯かる迷信を脱し、神の國は必らず之に應ずる道德的生活を要すると、隨て獨り義人にのみ來るべきを感じたりき。或者は正義の途は嚴格に律法を守るにありと信じ、熱心之に従事したるも終に及ばざりき。或者は深く自ら省みて罪の念に心を刺され、僅かに悟る所ありき。曰く我等が渴望する正義は獨り神の御手より來るものなれば、罪の重荷を卸さんと思ふものは、神の祐助と慈悲と憐憫を仰くの外あらじと。

斯の如く、基督時代の未來觀は、全く相異なる感情や相反對せる思想が悉く一點に集注せる一大混亂の状態にありき。思ふに氷炭相容れざる思想が宗教の勢力の下に斯の如く相結合せるが如きは、古今東西の歴史に於て他に見ざる所なるべし。或時は眼界狭くエルサレムを圍める山岳の外に出でざるも、或時は浩濶にして全人類を包含したりき。或時は心靈と道德の高尙なる立場より凡てを觀察すれども、忽ちにして國民の政治上の勝利を以て局を結ばんとする者の如し。此所には信神の念甚だ篤く、されどてふ聖き命令に従つて勇戦する正義の人あり。彼處には道心微

なる愛國熱に浮かれたるが爲に、宗教的感情の冷却せるもありき。未來に關する希望已に斯の如くなれば、メシヤの觀念も亦矛盾多きを免れず。メシヤは如何なる形にて來るべきやとの形式問題の一定せざりしのみならず、メシヤの本質及び使命の問題すら毫も説の一致を見る能はざりき。されど道心漸く深く信念漸く篤からんとする人等は、メシヤを以て政治的、武斷的帝王となす能はず。寧ろ一種の豫言者ありと信せり。斯かる思想は已に相寄りて、メシヤ的觀念を構成したりき。曰く、メシヤは神を我等に近くべし。曰く、彼は世の審判者なるべし。曰く、彼は我等の爲に心の重荷を除くべし。是れ彼等のメシヤ觀なりき。其頃猶太に斯かる希望を抱ける、少なくとも之を排斥せざる信神家ありし事は福音書に記されたる「バプテマス」の約翰の物語によりて知るべし。即ち人々の中には約翰を見て、メシヤならんと思ひしものありたるなり。試に思へ、メシヤならんと思はれし彼約翰が身に駱駝の毛衣を着け、誰が目にも王族のものと思へざる一個の青年説教家にして、其使命と云へば墮落せる民に審判の近きを告げて人の悔改を促すに過ぎざりしとせば、メシヤの觀念が如何ばかり曖昧にして、一部の人が其本來の意義を如何に遠く離れしかを知るに足らん。更に福音書を讀んで、耶蘇が權威を持てるもの、

如く教へ、又不思議なる力によりて病を癒すとをなせば、直に耶蘇を指して、メシヤか、りといへる者、少なからざりしを見れば、メシヤ的觀念が既に根底より變化したるを知るべきなり。素より彼等は斯かる所業が單にメシヤ的事業の端緒に止まり、彼の奇蹟を行ふものは日ならずして、最後の假面を脱ぎて、新王國を建設すべしと思ひしや明かなり。されど今茲に曰はん、欲する所は人々が耶蘇の出所と経歴とを知り、且つ其爲す所は尙ほ悔改の説教と、天國の近きを告ると、病を癒す事の外に出でざりしを知りながら、約束のメシヤとして、彼を歓迎するを得たるとなり。吾人は耶蘇が「我は神の子なり」との意識より一步を進め、「我は約束のメシヤなり」との意識に達せしまで、如何なる内部發達をなせしやとの問題に觸れざらんとす。されど人々の中に、メシヤ的觀念が何時となく變遷し來り、終には打て變れる性質となり、始は政治的、宗教的なりしも、後には心靈的、宗教的となれるを思へば、此問題をして全く孤立せしむる能はざるべし。若し「バプテマス」の約翰及び十二使徒等が耶蘇を「メシヤ」と認めたる事及び彼等が耶蘇の人格を尊重しつゝ、尙ほ彼の外觀の賤しきを擯斥せんとはせで、却て當然の事と思へるを見れば、當時メシヤ的觀念の動搖甚だしかりしを知ると同時に、耶蘇自らも此思想を採用したるを知るに足るべし。語

に曰ふ力は弱きによりて全くなるべし。貧賤の地位にありなからしむるなり。自稱せし彼耶蘇は宇宙間には此世の方と榮華とに據らざる否な寧ろ之と相反對せる神の力と榮光とあるを知りぬ。又聖と愛との威靈ありて之を受くるものは救はれて福を得べきを知りぬ。獨り耶蘇のみならず耶蘇を神より膏を灌がれたる

イストラエルの王なりと信じたる者も亦之を認めたりき。耶蘇は如何にして我は即ちメシヤなりとの意識に達したるか。吾人は之を論究する能はず。唯だ此問題に關係ある二三の點に付て一言するを得べきのみ。最古の傳説は耶蘇が洗禮を受けし時其心に起りたる一種の經驗を以てメシヤ的意識の起原とせり。されど吾人は斯かる經驗に立入りて批評し得べきに非ず。而して之を否定することは尙更爲し得べきに非ず。思ふに耶蘇が始めて身を公生涯に投せし時、心既に一個の確信を有したるや疑なし。福音書は惡魔誘惑の物語を以て耶蘇の公生涯を記し始めたが、此物語に依りて耶蘇が當時既に自ら神の子たるを自覺し、且己は神の民の爲に重大なる事業を依託されたるを感せしこと及び彼が此自覺に伴ふ誘惑に勝ちたる事を知るべし。約翰獄中より人を耶蘇に遣し、問はしめて曰く、「來るべき者は爾なるか、我等他に待つべきか」と。(太三十一)之に對する耶蘇の答は能く

約翰をして耶蘇の眞にメシヤなること及びメシヤの使命の何たるを知らしめたりき。耶蘇嘗てカイザリヤビリビにありし時、ペテロ耶蘇に向ひ「爾は待望める基督あり」と曰ふや、耶蘇心に喜びて其言葉を善しとせり。(太十六章十)耶蘇一日「パリサイの人に問ふて曰く、爾曹は基督に付て如何に思ふや、是れ誰の子なるか」と斯くて此對話を終るに「然らばダビデ既に之を主と稱へたれば如何で其子あらんや」との新たなる疑問を以てせり。(太廿二の四)終に彼は萬衆の前にエルサレムに入り、其の神殿を潔めたりき。是れ耶蘇がメシヤなることを自ら天下に宣言したる者として見たり。而して此最初の明白なる宣言は又更に最後の宣言にてありき。何となれば之に續く者は荆棘の冠と十字架なりければなり。

余は耶蘇が公生涯の始に一個の確信を有し、己が使命の何たるを知りたるもの、如しと曰へり。されど未だ耶蘇が此時より既に其使命の内容を悉く知り居たりとは曰はざるなり。彼には尙受難の經驗の残れるあり、神にのみ絶りて進むべき十字架の途は尙彼方にあり、加之ならず神の子なる意識も今や實際上の試験を受くべき時とはかりぬ。蓋し父なる神が委託せし事業の何たるやは實際自ら勤勞して凡ての障礙に克つ事によりて始めて曉るを得べきなり。嗚呼、耶蘇が我こそは即ち昔

時より豫言者の語りしメシヤならめど自覺せし時彼がアブラハム、モーセ以來の全歴史を己が使命に照して達觀せし時、又彼が我はメシヤなりとの確信の終に避くべからざるを感じたる其瞬間、彼の胸中には如何なる波濤の打ち寄せたらん然り彼は避けらるゝ者ならば此確信を避けたしと思ひしなるべし、何となれば吾人は耶蘇が最初此確信を以て最も恐るべき責任と感じたりと考ふるの外途なければなり、顧みれば余輩は餘りに論歩を進めたり、最早言ふを得べき者なし、唯だ此點に關して福音書記者、約翰が耶蘇の言として屢、擧げたる所は能く當を得たることを認め置かんのみ、曰く「我已より言ふに非ず、我を遣し、父、我言ふべきこと我語るべきことを命し玉へり」(約十二の)と、又曰く「我獨りあるに非ず、我を遣し、父と共にあるなり」(約十六の)

「メシヤ」の意義の如何は暫く置き、心に神の召を感じたる者が苟も世界最深最高の宗教史たる、否將來は必ず人類唯一の宗教史たるべき猶太の宗教史上の大立物として認めらるゝ爲には、メシヤの觀念は絶對的に必要なる條件にてありき、抑、神の子と自覺せる耶蘇が如何なれば先づ此國の敬神家によりて、歴史上最高の地位

に置かれしやと曰へば、メシヤの觀念ありしが故なり、茲に至りて、メシヤの觀念は已に其職を果せりと云ふを得べし、耶蘇は最早、メシヤにして、メシヤに非ざるあり、「メシヤ」に非ざる所以は彼が「メシヤ」的觀念以上に超越したるに由り、又彼が此觀念を満たすに廣大なる内容を以てし、本來の意義を失はしめたるに由れり、抑、メシヤの觀念たる今日の吾等には殆ど解し難き所なるも其内容の一斑は尙之を伺ふを得べし、試に思へ數百年の間、猶太全國民の心を繋ぎ、其理想を悉く傾注せしめたる程の「メシヤ」的觀念にして全く吾人に了解されざるの理あらんや、乃ち顧みて「メシヤ」時代を眺むれば吾人は再び昔の人が懐きたる黄金時代の希望を想起すべし、此希望や之を道德化すれば有らゆる人生大活動の目標となすべく、又宗教的に見たる歴史の上にも缺くべからざる要素たるなり、次に猶太人が望みたる「メシヤ」は人格的にてありき、是れ歴史上人を救ふ者は亦實に人なるべきを教えたるなり、彼等は又唯一の「メシヤ」を待ちたりき、是れ人類の統一が若し各人最高の目的と、其深奥なる力を一致せしむる事に由りて完成せらるべしとせば、人類は皆唯一の主、唯一の師を承認すべき者なるを教えたるなり、されど此外には如何なる意義、如何なる價值をも「メシヤ」の觀念に附加する能はず、耶蘇自らも然かせざりき。

耶蘇の「メシヤ」たること已に承認せられたれば、篤信なる猶太人等は彼の人格を其使命と固く相結ばしめたりき、蓋し彼等は以爲らく「メシヤ」の働によりて神自ら其民に来るべし、「メシヤ」は天高く神の右に坐し神の業を爲す者にて、彼は實に人の禮拜を受くべき者なりと、然るに耶蘇自らは其福音に對して如何なる態度を取りしや。彼は自ら福音の一部を占めんとせしか、之に對する答二あり、一は消極的にして他は積極的なり。

(一)福音の本領に關しては已に數回の講演に論じ盡したれば、今更ら之に加ふべき者あらず、所謂本領とは神と靈魂靈魂と其神にてあるなり、耶蘇は神が律法と豫言者との中にも發見せらるべき、又已に發見せられたるを疑はざりき、預言者の書に曰く、爾曹の爲めに善きと、又神が爾曹に求め給ふ所のものは爾曹の已に聞ける所なり、即ち神の語を守り、愛を行ひ、神の前に謙遜なるべしとの是あり(米迦六)と、彼は神殿にありし税吏「レバタ」二つを納めたる貧しき寡婦、悔改めたる放蕩息子等を引ききて其模範を示しぬ、彼等はみな基督論の何たるを解せざるの徒なるに、尙税吏は謙遜によりて義とせられたるに非ずや、若し此事實を曲げて解釋せんとする者あらば、彼は耶蘇の教訓の平易と壯嚴とを其尤も樞要なる點に於て傷くる者あり、論

者曰はん耶蘇の考にては全教訓は只だ他日の準備たるに過ぎず、されば彼の死後、復活後、他の意義に解釋せらるゝは當然なるのみならず、或部分は殆ど無用の者として捨つべき者なりと、亂暴なる臆説と謂ふべし、否々、耶蘇の教訓は教會が信せんと欲する所よりも一層單純なるなり、一層單純なるが故に一層宇宙的にして又一層嚴肅のものたり、されば何人も己れ未だ基督論を知らざるが故に、耶蘇の教訓は我に係りなしとの遁辭を以て此を避くる能はざるなり、耶蘇は人々の前に人生の大問題を掲げ、且つ神の慈悲と憐憫とあるを約束し、以て人々の決心を求めたりき、所謂大問題とは神に事へんか財に事へんか、永遠の生命を取らんか此世の生活に甘んせんか、靈に従はんか將た肉に従はんか、謙遜ならんか將た己の義に誇らんか、人を愛せんか將た私慾を飽かしめんか、眞理に就かんか將た虚妄に留まらんか是なり、人間萬事這般問題の解決によりて定まる、神に來りて永遠の生命を得んか或は此世に留まりて亡びんか、吾人は神の愛にして我等は其子なりとの喜の消息を聞て此處一番決する所あかるべからずとは耶蘇の教ゆる所なりき、されば耶蘇の宣傳したる福音は子なる神を傳ふる者に非ず、唯だ父なる神を傳ふるものたるなり、斯く曰ふ余輩は決して奇論を吐くに非ず、又推理説を唱ふるにも非ず、唯だ福音

得る限り純粹に現はれたるを證明すべく、又耶蘇が彼を信する者には福音の力たる事を感じずならん。耶蘇に關する斯の如き經驗と知識とを得たる者は之を世に宣傳したるが宣傳されし所のものは今尙生ける勢力を有せり。

(六)福音と教理、即ち信條問題

本問題の要點は已に論じ盡したれば、今は極めて簡短に論じ去るを得べし。福音は理論的教理に非ず、哲學に非ず、唯だ父なる神の實在を教ゆる點に於て教理と曰ふを得べきのみ。福音は即ち福音の音信にして、吾人に永遠の生命を保證し、此生命に必要な事物と力とが如何ばかり貴重なるやを示すものなり。福音が永遠の生命を語るや、先づ正義の生涯とは如何なる者なるやを示しぬ。福音は又人間の靈魂、謙遜、憐憫、清き心及び十字架の如何に貴重なるや、又金銀財寶と此世の憂慮とが如何に陋劣なるやを告げ、正義の途を踏む者は假令戦争の生涯を送るとも、平和と安心と不朽の靈魂とは其月桂冠たるべき事を約しぬ。之に由て見れば吾人の「信仰の告白」なるものは神を以て我父、我審判者と信じ、以て神の聖旨を爲すことにあらずして何ぞ耶蘇は此外に「信條」なるものを語りし事あらず。彼が「凡そ人の前に我を

告白する者を、我も亦天に在す我父の前に之を告白せん」と(路十二)曰ひし時すら、其心には只耶蘇に従ふ者が心と行とを以て爲す所の告白を指せるのみ。若し福音の前に基督論的信條を掲げ、人は先づ基督に付て正見を有すべく、然る後來つて福音に就くべしと説くに至りては、耶蘇の思想と命令とを距るとの何ぞ遠きや。斯の如きは物の前後を誤れる者なり。吾人は先づ耶蘇の福音に適ひて生活すべきなり。然る後始て其經驗に應じて正しき見解を有すべく、又正しく教ゆるを得べきなり。耶蘇の教訓の前には人の先づ通過せざるべからざる關門あり、人の先づ受くべき束縛なし。福音の思想と約束とは始なると同時に終なり。人は凡て直接に其前に立つべき者たり。

次に自然界の知識も福音に入るの門にあらず、又之と相關する者にもあらず。福音は宗教と道徳とに關する者にて、吾人に生ける神を紹介する者なれば、此點より見るも耶蘇は神を信じ其聖旨を成す事の外、一の信條をも有せざりき。是れ耶蘇の眞意のありし所たり。此信仰に基ける知識は——此知識や廣濶なり——之を有する人の内部的發達及び理解力の強弱によりて大差あり。嗚呼天地の主を呼んで我父よと曰ふ。天下何物か此經驗に及ぶ者あらん。而して心の尤も貧しき者、此經驗を有

し之が證人たるを得るなり。
 經驗なる哉。自ら經驗したる。宗教の外に何の告白をか爲し得べき。此外の告白は耶蘇より見れば偽善なり有害なり。已に福音の中には浩瀚なる宗教論のあるなし。況してや人は先づ教理を受入れて之を告白すべしとの命令をや。信仰と云ひ信條と云ひ。本と人が此世を一蹴して神に向ふの一大決心を爲したるより生じ。又之によりて生長すべき者にして。信條は即ち信仰の實際的證明に外なるべからず。使徒ポロは人悉く信仰を有するものに非すと曰へり。されど人は悉く誠實なるを要す。而して唇のみにて神を崇むること、無分別に告白を爲す事とを誠めざるべからず。或人二人の子ありしが長子に來りて曰ひけるは。子よ。今日葡萄園に往きて働け。答へて否と曰ひしが。後悔て往きたり。又次子にも前の如く曰ひけるに。答へて。君よ。我往くべしと曰ひしが。遂に往かざりき。(太二十一三十)

余は此處に議論を結ぶを得べきも、尙一の反對説に對して一言辯じ置くの要あり、其説に曰く、福音の壯嚴にして偉大なること及び歴史、上世を救ふの方たりし事は我之を信ず。されど如何にせん。福音は已に老廢せる昔時の世界觀及び歴史觀と相結ばれたる者なれば、惜ひ哉。今や其價值を失ひ、吾人に取りては最早何の意義をも

有せず、且吾人は未だ之に代ふべき者あるを知らざるなりと。之に對して二箇の辯解を試みんとす。

(一) 福音と相抱合したる世界觀及び歴史觀が、今日吾人の有する思想と異なるは固より言を俟たず。吾人と雖、斯かる陳腐の説を再興するの勇氣なし。然れども福音と此等世界觀及び歴史觀との間には離すべからざる關係ありしに非ず。余は既に福音の根本的要素を示さんと試みたるが、此根本的要素は超時間的のものなりき。且福音の目的物たる人間も、同じく超時間的なりき。詳言すれば人は常に進歩發達する者あるも、其内部の本質と外圍に對する根本的關係とは依然として變ずる者に非ず。夫れ然り此故に福音は今尙吾人の力たるなり。

(二) 福音の由て立つ所は靈と肉、神と此世、善と惡との對立にあり。是れ福音の世界觀及び歴史觀の眼目なり。世の思想家は一元論を基礎として、人間最深の要求に應ずべき満足なる倫理學を組織せんと苦心慘憺たるあれども、未だ其功を奏するに至らず。思ふに何時までも成功の期なかるべし。されば要するに道德的感情を有する人に關する此對立に向て、如何なる名稱を與ふるも、其本質は敢て痛痒を感せざるあり。之を呼んで神と世と云ふも可なり、現世と來世と云ふも可なり、或は見るべき

者と見る可らざる者、物質と精神、情慾と自由、物理と倫理等孰れの名稱を以てするも可なり。此等兩極の統一は只だ經驗によりて知るべきのみ。即ち經驗的に一を他に服従せしむる事によりて統一は來るなり。而して此統一は只だ二者の争闘の結果として得らるべき者にて、決して精巧なる機械的方法の能くする所にあらず。然らば此統一は如何なる者なるやと問はば、是れ無限の問題にして、吾人は只之に向て解釋の歩を進むるを得るのみ。一大勢力あり、萬有を繫縛す、されど己れに克つ人は能く此繫縛を免れん。』とはゲーテが美妙なる筆を以て這邊の眞理を現はしたる言葉なり。是れ永遠の眞理にして、能く福音か描ける當時の戲曲的生活の眞相を穿てり。即ち福音は屢々比喻を以て人生に於ける靈肉兩極の衝突を語り、戰によりて此衝突を鎮むべきを教へたり。自然界に關する知識の増加は、此世は其慾と共に亡びん、されど神の旨を行ふ者は永存すべし（約翰一廿二）との信仰を妨ぐる者なるや否我之を知らず。只知る吾人は是非とも二元を相手とせざる可からざるを。其二元は如何にして來りしや我又之を知らず。されど吾人が道德的實在として確信せざるを得ざる者茲にあり。即ち二元は畢竟吾人をして心の戰に勝ち、以て統一に達せしむる爲に與へられたる者かれば、同一の理由によりて、吾人は更に根本的一大統一なる者ありて、此處には一切萬有の大調和を見るべく、善の王國茲に至て實現すべしと爲すこととなり。

或は曰はん是れ邯鄲の夢のみ、吾人の眼に映する所は斯の如くならずと否々夢に非ず、人間眞正の生命は實に其根を此處に置けり。此思想や素より缺陷多かるべし。何となれば時間的空間的知識と精神的生活の内容とを悉く集めて一團となし、以て統一的世界觀を造るが如きは、吾人の爲す能はざる所なれば也。吾人は只凡ての理性よりも高き神の平和の中に此統一あるを豫想すべきのみ。されど余輩は已に問題の外に馳せたり。其問題とは福音の根本的特色及び其重要なる關係を知らんとする事にてありき。余は此問題の範圍内に於て論せんと試みしが終に臨て少しく軌道を脱せり。今や再び當初の問題に立歸り、是より本講演の第二部に入り、歴史上に於ける基督教の進路を觀察せんとす。

第九回

本講演の後半に於ける問題は基督教の歴史の特徴を叙し、そが使徒時代に於て、又加特力教及び新教に於て如何ある發達を遂げしやを究むるにあり。

使徒時代に於ける基督教

耶蘇の集めたる弟子中の弟子たる十二の使徒等は相寄りて教會を組織せり。耶蘇自らは禮拜の目的を有する組織的團體を造らざりき。彼は唯だ教師として生活し、弟子等は即ち彼の門人にてありき。然るに門人の一團が間もなく教會と變じたる事は、基督教將來の全歴史の基礎とはなりぬ。此新團體は何を以て其特色とせしや。若し余にして誤らずんば之に三個の特色あり。第一、耶蘇を生ける主と認めたる事。第二、此新教會に於ける各個人は僕婢に至る迄實際的に宗教を経験し、神と我との間に生ける關係を自覺したる事。第三、心の清きと兄弟の交とに由れる聖き生活を爲せし事及び既に近ける基督の再臨を待望める事はなり。

新教會の特色は此三要素を以て盡すことを得べし以下精細に之を觀察せん。す。

第一、主なる耶蘇基督——弟子等は耶蘇を主なりと告白して、第一に耶蘇が弟子等の最高の教師なる事、耶蘇の言葉は永久に弟子等の生活の標準たるべき事、及び弟子等は何事にても耶蘇の命せし所を守るべき者なる事を承認せり。然れども「主」

なる觀念の内容は未だ之にて盡きざるのみならず、其特徴すらも含まれ居らざるなり。初代の教會が耶蘇を主と呼びたるは彼が人の爲に生命を犠牲と爲したるに由り、又彼が復活して今は神の右に座せりと信じたるに由る。基督の死と復活の意義を極めて重大なる事と爲すは使徒パウロに始まれるに非ず。此點に於てパウロの信仰が教會一般の所信と異ならざりし事は確實なる歴史上の事實なりとす。パウロ、コリント人に送りて曰ふ「わが爾曹に傳へしは我が受けし所の事にて、即ち傳説によりて、其第一は即ち聖書に應ひてキリスト我儕の罪の爲に死に、又聖書に應ひて葬られ、第三日に甦へり……給へること也（哥前十五の三と四）」パウロが基督の死と復活とを特別なる思考の題目となし、全福音を此出來事の中に集注せしめたるは事實なれど、耶蘇の直接の弟子及び初代の教會が既に之を以て根本的要件と爲したる事も亦事實なり。吾人は曰ふを得べし、耶蘇基督を永久に承認する事、及び彼を尊敬し彼を拜する事は此處に第一の根據を得たるなりと。基督論の全體は此二の事實を本として發達したりき。然るに耶蘇基督の死後六十年にして人間が捧げ得べき尊敬の言葉は悉く彼のの上に注がれぬ。曰く神の右に擧げられたる者、曰く死に勝てる者、曰く生命の君、曰く新生命の力、曰く途かり眞なり生命なりと。皆耶蘇を生ける

主なりと信じたるに基けり。斯の如く一神教的信仰を傷くる事なくして、耶蘇を神の位に置くを得たるは、全くメシヤ的觀念の之が準備を爲したるに由れり。然れども耶蘇の特質として最も著しく感せられたるは、彼が各人生活の活動的要素たる事なりき。曰く「もはや我れ生けるに非ず、キリスト我にありて生けるなり」と。(加二の) 彼は實に我生命なれば、身を殺して彼に接近するを得るは即ち我の益なりと感せられぬ。人類の歴史を尋ね見よ、其師と飲食を共にし、直接に其人間的形骸に接したる者等が彼を大豫言者、神を現はす者と宣傳せしのみならず、聖なる歴史の指導者、天地創造の始源、新生命の靈的勢力と爲す者、他に何處にか其類を見んや。マホメッドの弟子等も其豫言者に付て斯の如くは語らざりき。之れを以て單に「メシヤ」の性質を耶蘇に移したる者となし、又は耶蘇榮光を以て再臨すべしとの思想より來れりと爲すは甚だ悉さるるなり。耶蘇再臨の希望の爲に、彼が低き様にて來れる事の看過せられたるは事實なり。然れども弟子等は全體如何にして斯の如き強固なる希望を抱くを得たるか、耶蘇が受難終に死に至れるにも係らず、如何にして彼を約束の「メシヤ」と爲すを得たるか、「メシヤ」に關する想像は卑俗を極めたるに、如何にして彼を現在の主、又教主かりと感じ、之を心に刻するを得たるか、思へば唯だ驚嘆の外なきなり。實に耶蘇の犠牲的死と復活とは彼の人格より得たる弟子等の印象を固め、「彼は我儕の爲に犠牲の死を遂げ、而して今は活けり」との信仰を堅く繫ぐを得たるなり。

然るに現今此二點を異とし、之に對して冷淡なる態度を取る者多し。其理由を問へば、耶蘇の死に關しては曰く、此種類の事件に對し如何でか斯の如き大なる意義を附するを得んと、復活に付ては曰く、是れ信すべからざる事を論定する者なりと。耶蘇の死と復活に關する觀念を辯護するは、今吾人の問題に非ず。されど吾人は歴史家の義務として能く此觀念を研究し、そが有したる又現に有せる所の意義を明瞭ならしめざるべからず。何人も此二の觀念が初代の教會に於ける眼目なりし事を疑はざるべし。ストラウスさへも之を拒絶せざりき。大批評家なるフエルデナンド・クリスチャン・パウルも初代教會が此信仰の上に立ちたる事を承認せり。されば吾人は此等の觀念に對し明快なる知識を得べきのみならず、更に進んで深く宗教史を探究せば、外面甚だ没理的なる思想の中にも、尙信仰の根底たる正義と眞理とあるを發見するを得べきなり。

吾人は先づ耶蘇十字架の死は犠牲の死なりとの思想を觀察せんとす。若し表面的

形式的考察のみによりて犠牲的死てふ觀念を論せば、吾人は直に議論の終極に達し、何の了解する所もなくして已まんのみ、若し又神は如何ある必要あつて斯かる犠牲の死を要求せしやを研究せんとするも同じく路窮つて進む能はざるべし。

(一) 吾人は先づ最も普通なる宗教史上の事實を想記すべし。即ち耶蘇の死を犠牲なりと信じたる者は直に神に献する醒き犠牲一を切廢したる事是あり、素より斯かる犠牲の功力に付ては疑を挟む者ありし事既に久しく、其風習は次第に衰へつゝありしが、今基督の死により全く跡を絶つに至れるなり、假令其消ゆるや一時には非ざりしも——斯の如きは關する所にあらず——尙短少歲月にて足れりき。即ちエルサレム神殿の破壊を俟たざりき。其後基督教の傳へらるゝ所、祭壇は荒敗に歸し、牲獸は顧客なかりき。されば基督の死が宗教史上腥き犠牲を廢滅したる事は疑ふべからず、抑々斯かる犠牲を爲す心の底には深き宗教上の信念あるは此風習が數多の國民間に廣く擴がれるに因りて知るべし。是れ冷淡盲目の唯理論者の判斷に托すべきに非ず、生きたる感情を有する人間の判斷すべき問題たり。若し犠牲を献ぐるは人の宗教的要求に適合せりとせば、若し斯かる人間の本能が基督の死によりて満足を得、犠牲の風習茲に一掃せられし事、最早疑ふべからずせば、若し希伯

書に見る如き「彼れ一の獻物を以て潔まる者を永遠に全うすべし」(十の四)の宣言ありしとせば、基督の犠牲的死てふ觀念は最早怪むべきに非ず。何となれば是れ歴史の證明する所、且吾人自らも之を感じ始めたればなり。基督の死は實に犠牲的死に價す、若し然らば犠牲の源たる人間の本能に逼まるの力を有せざるべきなり。されど基督の死は従前の犠牲と同一の者に非ず、若し同一ならんには犠牲の終たる能はざりしならん。基督の死は従前の犠牲を完成して之を終らしめたるのみならず、大凡そ物質的犠牲の効力は之が爲に全然破壊せられたるなり。されば若し一個の基督教徒又は教會が他日物質的犠牲を爲すに至らば、是れ其昔に歸れる者と云ふべし。初代の基督教會は犠牲の必要全く無きに至れるを知りぬ。其理由を問ふ者あれば、基督の死を指して之に應へたりき。

(二) 歴史を知る者は認むるならん、正義純潔の徒の受難は歴史上の強壯劑たる事。凡そ歴史上一大進歩を爲さしむる者は言葉に非ずして事業なり、事業に非ずして犠牲的事業なり、犠牲的事業に非ずして己が生命を與ふる所の事業にてあるなり。されば假令、耶蘇が人に代りて死せりとの説を信せざる者と雖も、尙以賽亞書五十三章に「誠には彼は我儕の病患を負ひ我儕の悲を擔へり」と曰へるが如き内部的眞理

をも承認せざる者甚だ稀ならん」人其友の爲に己の生命を指つるは此より大なる愛はなし」(約十五)とは弟子等が始より基督の死に付て懐ける觀念なりき。人の道念愈々鋭ければ歴史上の大事件の起るに際し、愈々深く代表的受難を感じて我起たざるべからずと思ふに至るなり。寺院にありしルーテルは唯だ己の爲にのみ勞せしや。彼が傳來の宗教と戦ひ、其心血を流したるは凡て我等の爲ならざりしか。人類は耶蘇基督の十字架を知るに至り、始めて死を以て證明されたる純潔と愛との力を經驗したりき。此經驗や人類が永遠に忘るゝ能はざる所、人間歴史の一、新紀元を造れる者なりき。

(三)人間の理性的省察も明快なる考慮も、人類の道徳的思想の中より、不義と罪とは必ず罰せらるべく、義人の苦む所には、人を、して、視然として己が心を清むるに至らしむる一種の贖罪の存するあり、との確信を除去する能はざるべし。何故に此確信あるか、是れ人間智力の究むる能はざる所なり、何となれば萬人共通の心奥より出で吾人の見る能はざる世界より來ればなり。假令之を以て陳腐なる眞理なるが如くに嘲弄し、又は否定する者あるも、此信念を破壊するは人間の道徳的感情の許さざる所なり。今や斯かる思想は基督の死によりて既に始より覺醒せられ、又之に向

つて集注せられぬ。此外にも基督の死によりて起されたる思想あるべきも——此等は大切なる者に非ざるも時に應じて其力を現はせり——最も強大なる者は此思想にてありき。此思想は「基督は死の苦によりて重大なる事を爲せり、而してそは全く吾等の爲なりき」との固き確信となれりき。吾人が往々見る如く此重大なる事件を冷かなる腦髓の計算、記録に一任するが如きは背理の極なり。吾人は昔の人が感じたると同様の自由を以て、唯だ之を感ずるを得べきなり。若し之に加へて耶蘇自らも己が死を以て人の爲なりと語れる事、及び彼が壯嚴なる働作(主の晩餐)により、永遠に己が死を紀念するの途を確立したる事——余は此事實を疑ふべき理由を見ず——を思は、如何に此死と十字架の耻辱とが中心問題たるべきかを了解するを得べし。

然れども耶蘇が「主」として宣傳せられしは、獨り彼が罪人の爲に死せるが故のみに非ず、又實に復活せる者、生ける者たるが故なり。若し此復活にして肉あり血ある身軀の復活を意味せる者とせば、吾人は此傳説に付て多言を費すを要せざるなり。されど事實は然らず。新約聖書自らも一方に耶蘇の墓の空かりし事、及び彼が人に現はれし事の消息を置き、他方に耶蘇復活の信仰を置き、以て兩者を區別せり。新約聖

書が前者にも大に重を置きたるは疑なきも、尙之に由らずして復活の信仰を有すべきを要求せる事も事實あり。トマスの物語(約二十の二十九)は人は假令肉躰上の復活の證據を有せずとも、尙耶穌の復活を確信すべき者なる事を深く感せしめんが爲に語られたるなり故に曰く「見ずして信する者は福なり」と。又弟子等がエマヲに往ける時、耶穌に責められたる理由は彼等が聖書の教に由り、又「耶穌は即ちメシヤ」なり」との信仰告白に基き、耶穌復活の事を確信すべき筈なるに、尙も之を信せざりしに由りてあり。路廿四の十三以下ポーロは曰へり「主は靈なり」と。此確信の中には耶穌復活の信仰も含れぬ所謂耶穌復活の消息とは何ぞ、曰くアリマタヤのヨセフの庭園に於ける驚くべき事件(約二十の始)——而かも誰も見たるものなき——曰く一二の婦人と弟子が空しき墓を見たる事、曰く耶穌が變れる姿にて現はれ、其華美なりしと爲せし所の者是なり。此消息は次第に完成して愈々人の信を博するに至りぬ。然らば耶穌復活の信仰とは何ぞ、曰く十字架に死せる耶穌が死に勝てるを信する事、曰く神は力にして義なるを信する事、曰く多くの兄弟の中にて始に生れたる者(基)今も尙生けるを信する事はなり。使徒ポーロが耶穌復活に對する信仰の根據は、一は「第

二のアダムは天より出づ」(哥前十五の四)との確信に基き、一は彼がダマスコに行く途にて神より生ける基督を啓示せられたりとの經驗に基く。ポーロは「神其子を我心に示し給へり」(加六の十六)と曰へど、此内部的啓示には目に見ゆる啓示をも伴ひたりき。此の如き啓示は再び見る能はざる者にてありき。此時使徒ポーロは已に空しき墓の消息を耳にしたるか。有名なる神學者にして之を疑ふ者あれど、余は寧ろ信すべき事と思ふあり。唯だ充分なる確證を得る能はざるのみ。されど確かなる事はポーロ及び其以前の弟子等が尤も重を置きたるは、空しき墓に非ずして唯だ基督再現の事實なりし事なり。何人かポーロ及び福音書の言句に基き耶穌の肉體的顯現に關する明瞭なる光景を描くを得べしと斷言するを得んや。若し此事にして不可能ありとせば、又若し之に關する傳説が一として絶對的に確實なる者なしとせば、争で復活の信仰の根據を斯かる記事に求めんや。されば吾人の撰ぶべき途は二のみ。即ち斷じて吾人の信仰を動搖せる基礎即ち新疑問の已まざる基礎の上に置くか。或は全く斯かる基礎を棄て、又之に伴ふ有形的奇蹟を棄つるか。是なり。然るに耶穌の肉體的顯現を信する事の根底にも亦眞理あり事實あり。墓に關し又耶穌の顯現に關し如何なる事の起りしものにせよ、茲に動かすべからざる事實あるなり。即

ち死は滅びて永遠の生命は始れりとの堅牢なる信仰が此墓より出でたる事なり。此信仰の由来を説明するにプラトーンを引くは無益あり、波斯の宗教若くは後世猶太の思想と文書とに尋ねるも無益なり。斯の如き者は已に滅びたるべく又實に滅びたるなり。而かもヨセフの庭園に於ける墓と相關聯せる復活と永生の確信は滅びざるなり。且耶蘇は尙生けりとの確信は今日も尙吾人が永遠の都の市民たるを得べしとの希望の基礎たるなり。此永遠の都ありてこそ人生は價ある者となり苦痛も之を忍ぶを得るなれ。イエスは死を畏れて生涯繋がるゝ者を放ちたり。二五の十とは希伯來書の記者が爲せる告白なるが、是れ亦余輩が曰はんと欲する所なり。又假令例外は之あらんも今日尙自然現象が與ふる凡の印象に反對して、人間靈魂の無限の價值の強く信せらるゝ所、死が人を恐怖せしむるの力を失へる所、又此世の苦痛が未來の光榮と相對照せらるゝ所には、斯の如き生活感情が耶蘇基督復活の確信及び神が彼の眼を醒まして生命と光榮とを與へたりとの確信と相結合するを常とす。初代の弟子等が耶蘇を生ける主と信じたる根本的理由は、耶蘇より流れ出でたる力にありし事、是に於てか證明するを得べきなり。彼等は滅びざる生命が耶蘇より來るを感じたり。耶蘇の死が彼等の心に恐慌を起したるは唯だ一時

のみにて、主の力は終に凡の者に勝ちぬ。神は彼を死の中に長く葬らざりき。彼は凡て眠れる者(死)の第一の果實として生けるなり。人類の中、此信仰を有する者が時間と超時間とに於ける永遠の生命を確信するに至れるは——此永遠の生命は即ち人類の目的にして、人類が微かに豫想せし所たり——哲學的考察の結果に非ず。耶蘇の生命と死とを直感する事、及び耶蘇が永遠に神と一致せる事を感じる事の結果たるなり。是に依りて個人的生命を貴重なりとする信仰は始て確立せられたり。然れども靈魂不滅の確實なる事を議論的に證明せんとする者は宜しく或詩人の句を讀むべきなり。

人は唯だ信じて行ふ外ぞなき

神の抵當我になければ。

生ける主を信じ永生を信するは神より出でたる自由が爲す所の働にてあるなり。されば耶蘇は十字架に死せる者として、又復活せる者として我儕の主たるなり。此告白の中には吾人が彼に對する一切の關係は含まれ居るなり。此告白や單純なりと雖も吾人の沈思熟考に對しては内容の無盡藏たるなり。此「主」てふ觀念の中には種々なる「メシヤ」的觀念及び之に似たる各種の舊約的約束の包含せらるゝあり。さ

れを耶蘇に關する緻密なる教會的教理は未だ存せざりき。何人にて、唯だ耶蘇を主なりと告白する者は、即ち教會員たるを得たるなり。

第二、經驗的宗教——初代教會の第二の特色は、教會員が僕婢に至る迄皆自ら神を經驗したる事なり。是れ大に注意すべき事なりとす。何となれば人心恰も基督に熱注し、彼に對して絶對的尊敬を拂ひし時なれば、熱心なる信徒等が基督に對して是れ命之に服従し、殆ど隨意的に基督の奴隸となるべしとは吾人が先づ起す所の感想なればなり。然るにポーロの書簡及び使徒行傳を見るに事情全く之と異なれり。二者何れも耶蘇の言葉が絶對的尊敬を受けし事を記せるも、之を以て初代教會最著の特色とは爲さざりき。而して最著の特色は各信徒が神の靈に動かされて、神と生ける直接の關係を結びたる事にてありき。余輩は近頃ワイナル博士の好著を得たり。題して「使徒以後の時代に於ける聖靈及び靈の働」と曰ふ。此書は多くの點に於て觀察を使徒時代に遡らしめ、グンケル博士の聖靈論が當時の事情に關して強き感動を與へたるよりも更に一頭地を抽きんでたる者なり。ワイナル博士は聖書が如何なる範圍まで、又如何なる形に於て、初代基督教徒の生活に影響せしや、又之に關

する諸現象を如何に判斷すべきやとの捨てられたる問題に關して見事なる説明を與へたり。其要領に曰く、初代の教會に於て聖靈を受け又聖靈によりて行ふとは如何なる意味なりしやと曰ふに、獨立にして且直接なる宗教感情と生活とを有する事及び最強の實在と感せられたる神と心の結合を爲す事にてありき。斯の如きは獨り耶蘇を以て唯一の崇拜物となし、彼にのみ從はんとする者には、到底望むべからざる事なりと、神の子となる事及び聖靈を受くる事は取りも直さず耶蘇の弟子たる事にてありき。人は神の靈に満たさるゝ事によりてのみ耶蘇の弟子となるを得べしとは既に使徒行傳に見る所なり。見よ使徒行傳の劈頭には聖靈人に灌がれたりとの記事を見るに非ずや。思ふに記者は基督教なる者は各個人が神と直接なる生ける結合を爲すに非ざる以上は、未だ最高點に達したる者に非ざるを知らしなり。斯の如く耶蘇に全く服従する事と聖靈によりて自由なる事とが一心に結合する事は、實に基督教最大の特性にして、基督教の偉大なる事を證するものなり。斯くて聖靈の働は何れの方面にも現はれぬ。即ち或は五官の上に、或は意志と行爲の上に、或は深玄なる考究の上に、而して又鋭き道德上の悟性の上に現はれぬ。單純なる力を有する宗教的本性は長く教理及び儀式の下に埋もれたりしが、今や其繁

縛を脱して或は狂喜となり、休徴となり、奇蹟となり、人の生活は何れの方面にも大に發揚し來り、往々病的現象となり、或は疑はしき性質を現はすに至りぬ。而かも當時の信徒等は斯かる騒がしき奇異の現象が唯だ個人的なることを知れり。又此個人的現象と相並んで何人にも興へられ何人も失ふ能はざる聖靈の働ある事を忘れざりき。見よ使徒パウロは記して曰ふ「靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、撻節なり」と。(加五の廿)實に基督教が己より出でたる幼稚なる力を過重せざりし事、精神的內容と其訓練とを凡ての狂喜よりも貴しと爲せる事、及び神の靈は如何なる發現を爲すとも、要するに聖と愛との靈あるを確く信じて動かざりし事等は、基督教第二の偉大なる特色なりとす。是に於て余輩は初代教會第三の特性に移らんとす。

第三、神聖なる生活——余輩が茲に曰はんとする所は初代の教會が純潔にして兄弟の交を爲し、基督の近かく再臨するを待ちたる事なり。教會歴史の蹈み來れる進路を眺むれば、教會が新約聖書中、初代基督教徒の生活の記事及び道德的訓誡を載せたる部分よりも寧ろ教理に關する者を深く探究したるを見るべし。然るに新約聖書は其書簡の大部分は素より、所謂教理的部分に於ても全く道德的訓誡を重んずべ

き者として弟子等に教えたるなり。初代の教會も神の聖旨を行ひ聖なる團體として存在するは生活の第一要義たるを知れり。初代教會の存在と使命とは悉く其基礎を此處に置きぬ。茲に、耶蘇の教に基きて教會が守るべしと定めたる二大要件ありて、道德的行爲は一切其中に含まれぬ。即ち純潔なる事及び兄弟の交是なり。純潔てふ事は最深最廣の意義に解釋せられ、凡そ聖からざる者を避くる事と清淨なる者、眞ある者、愛すべき者、快く聞ゆる者等を深く悦ぶ事とにてありき。純潔と曰へば其中に身體上の清潔をも含みたりき。曰く「爾曹の身體は神の殿にして、神の靈、爾の中に在ます事を知らざるか、されば爾曹身に於ても神の榮を顯はすべし」と。(哥前、三、十六)初代の信徒等は斯かる高尚なる意識を以て、異邦人が罪とも思はざる汚濁の罪てふ者と戦ひぬ。彼等は「玷なく雜なく神の子となり、姦惡の世にありても責むべき所なき」と。(腓、二、十五)者たらん事を欲したりき。管に欲せしのみならず、實際斯かる生活を送りたりき。神の如く聖なれ、耶蘇の弟子の如く純潔なれとは彼等の主義にてありしが、此中にも當時の教會が有したる遁世的分子あるを見るべし。而して彼等が主張たる遁世主義は「世の汚に染まざること」にてありき。第二の要件は兄弟の交なり。其初耶蘇が愛神と愛隣とを相結合せしむべき事を教えたる時、已に其眼中に

は人間の團體ありしが、此點に於て初代の信徒は能く耶蘇を了解せる者と云ふべし。彼等は唯だ言葉のみに由らず、行に由り、即ち生ける實現によりて、始より已に兄弟の團體を造りたりき。彼等が自ら「兄弟」と呼ぶや、此名稱に應ずる凡の義務を感じたり。且律法に由るに非ず、自由意志により各自其力と天賦の性能とに従ひ、其義務を果さん事を勉めたり。使徒行傳の曰ふ所に由れば、エルサレムにては彼等は更に進んで隨意的に物品共有の講社を造りたるなり。而かも吾人はポーロが一言、此講社に及びたるを聞かず。假令此不明瞭なる消息を以て實際信を置くに足る者とせずも、ポーロ及び異邦の基督教會が斯かる講社を以て模範的生活と爲さざりし事明かなり。生活上の外形的制度は當時未だ要求せられず、又之れを適當と考ふる者もなかりき。聖徒たる者が常に實行すべかりし、又實行したる所の兄弟の交は、要するに次の二主義に歸したりき。曰く「若し一の肢あたま苦まば凡の肢共に苦むべし」。(哥前二十の二) 曰く「爾曹互の勞を負へ、斯くしてキリストの律法を全ふすべし」。(加六の二)

第十四

初代の教會は耶蘇を己が主なりと信じ、此告白により彼を生命の君として絶對的

尊敬と信任とを現はしたりき。信徒等は各々靈によりて直接に神と交通するを得べく、其間に祭司又は媒介を要せざりき。且彼等は相寄りて聖徒の團體を組織せるが、此團體は心の清き事と兄弟の交を眼目とせる嚴格なる道徳的生活の義務を有したりき。此最後の點に關して尙一言を費さんどす。

宗教上の經驗より湧き出づる熱心わらしにも係はらず、過大狂激宜しく排斥すべかりし舉動の比較的稀なりしは、新教訓の靈的にして其道徳的勢力の強き事を證明する者あり。假令斯かる舉動にして吾人に知られざる者尙多かるべしと雖も、信徒等が未だ規則を建つるに至らざりしは明かなり。彼等が熱心の餘り稍もすれば狂激ある舉動に出でんとしたるを制止せんと勤めたるは、獨り使徒ポーロのみに非ざりき。ポーロは素より彼等の熱心を冷却せんとしたるに非ざるも、テサロニケ教會に於けるが如く、熱心終に此世の業務を厭はしむるに至り、或はコリント教會に於けるが如く、徒らに狂喜的談話に耽るを是れ事とせるを見ては、彼は嚴肅に之を誡めざるを得ざりき。曰く「人若し働く事を好まざれば食すべからず」。(撒後三) 又曰く「我方言を以て一萬の言を語らんよりは、寧ろ人を教えん爲に我心を以て五言を語るを善しとす」。(哥前十四) 然れども信徒の指導者が其道徳上の訓誡の中に沈

着と力とを現はしたるは又一層著しき事實なりき。是れ獨りポーロの書簡に於て見る所なるのみならず、ペテロ前書及びバヤコブ書に於ても之を見るを得べし。彼等は基督教的品性は人間生活の單純なる根本的關係の中に存在すべき者なるを認め、又此品性を強くし之を維持し之を照らす所の聖靈あるを知りぬ。妻に對する夫、夫に對する妻、子女に對する兩親、僕に對する主人の關係に於て、否々主權者に對し、周圍の異教徒に對し、又鰥寡孤獨に對する關係に於ても、彼等は神に對する忠義を示さざる可らざりき。彼が如き強き超世界的意識を有する宗教が斯くまで此世の社會的生活の道德的基礎を確立するを得る事、耶蘇の福音の如き者、歴史上何處にか其比を見出さんや。新約聖書記者の信仰談を聞きて左まで心の動かざる人にも、福音の道德的知識が純白にして豊富、力ありて又溫雅なる事を見ては感嘆斜めならざるを得ざるべし。此道德的知識は彼記者が與ふる忠言をして無上の尊嚴を有せしむる者たるなり。

初代基督教徒の生活に關し、尙茲に注意すべき者あり。彼等は近き未來に於ける基督の再臨を俟ちたるが、此希望や彼等をして此世の事物、此世の苦樂に無頓着ならしめたる強大なる動機とはなりぬ。彼等が此希望に於て欺かれたるは論を俟たざ

れども、此希望が彼等をして世界以上に昇らしめ、小を小とし大を大とし、一時と永遠とを判別するを得せしめたる屈強なる力たりしは疑ふべからず。凡そ強大なる宗教的動機が已に活動を始むるや、此活動を助くる隨伴的要素あることは、宗教史上屢々繰返さるゝ所の現象なりとす。聖オーゴスチン時代以後、罪と恵に關する宗教的經驗は盛んに勃興せしが、此經驗に向つて彼の豫定説が如何に大なる助力を與へたるよ。而して豫定説なる者は本と宗教的經驗より出でたる者には非ざりき。又特撰説の觀念が如何にクロムエルの軍隊に活氣を與へ、大西洋兩岸の清教徒を固くしたるよ。而して此思想も亦外來の一要素に過ぎざりき。又中世紀に於て聖フランシスクスの宗教的經驗より發達し來れる新信念が、如何に宗教上の貧困主義に助けられたるよ。而かも貧困主義は一個獨立の力にてありき。彼の復活せる耶蘇を見たりとの使徒時代の信仰も、恐らくは同一の論法によりて説明するを得べきなり。若し然りとせば、宗教其者と雖も自由に又孤立して働く者に非ずして、必ずや之を包みて發達せしむる所の外皮を要する者たるなり。然れども使徒時代に關して吾人の最も注意すべき要點は、信徒等が宗教的熱心と強き末日的希望とを有したるにも係らず、此世の生活を聖化すべき使命を、等閑に附せざりし事なりとす。

初代基督教徒の特色として余輩が挙げたる三大要素は、猶太教及び其教會にも適用するを得べし。即ち猶太教に於ても耶蘇は「主」として承認せられ、新信仰は傳來の宗教と相結ばれ、兄弟の團體は猶太的集會の形に於て造られぬ。誠を曰へばパレスチナに於ける初代の基督教會も猶太教的集會の如くなりしなり。然れども初代基督教徒が有したる彼の三要素は、其力強大にして遙かに猶太教を凌駕する者ありき。即ち彼等が主と崇めたる耶蘇は、單にイスラエルの主のみに非ず、人間歴史の主、又全人類の主にてありき。彼等は神と直接に交通する新經驗を有し、從來の如く媒介と祭司とに由れる禮拜をして復た用あきに至らしめたり。又彼等が組織せし兄弟の團體は他の團體の上に卓絶し、之をして殆ど顔色なからしめたり。此新傾向の中に潜勢力として存したる内部の發達は、今や一時に活動を始めたが、之を始めたる者はポロに非ず。彼散らされたる無名の信徒等はポロに先だち或は相並びて、已に異邦人を新團體に加ふる事を爲したり。彼等は又律法の中、枝葉に亘れる者又は餘りに法文的なる者を捨て、且説明して曰く是れ唯だ記號のみ。吾人は其精神を取らざるべからずと。パレスチナの外なる一部猶太教徒の間には、理由こそ變

はれ、此説明の精神を採用せし事已に久しかりき。彼等の間には哲學上の解釋によりて猶太教を制限し、之をして一種の靈的世界的宗教となさんと試みたるもありき。凡て此等の内部的發達は基督教歴史の序論たるの觀を呈したるのみならず、實際多くの點に於て然かありしなり。彼の無名の信徒等は已に斯かる發達の路に上りたるが、此路を進むに隨ひ彼等は次第々々に傳來の猶太教や、不用なる宗教上の規則を脱却せんとするに至りぬ。然れども是れ未だ發達の終極點に非ざりき。前の宗教は已に往けりとの最後の宣告の未だ下らざる間は、新解釋も一代の後には忽ち去て再び舊來の文字的解釋に歸らんとする恐ある者なり。古き教理と禮拜とが已に人の心に満足を與へざるに至れば、之に向つて新解釋を施して、之が満足を買はんとする傾向の起りしと、宗教史上幾十回なるを知らず。一見すれば其目的の達せらるべきが如く、人の感情も知識も此新宗教を歓迎すべきが如し。然れども實よ、舊思想は俄然として歸り來るべし。儀式に於て、禮拜に於て、又祭司等の教に於て曾て聞き慣れし語言は、何よりも強く人の心を引くべきなり。是故に若し新宗教思想にして枝葉の點は兎も角、眼目の點に於て斷々乎として過去の思想を捨て、獨立せる一個體となるに非ずんば、終に自ら維持する能はずして亡ぶるの外なから

んのみ、世に強固なる組織を有する宗教は、保守的にして粘着力ある者はあらず。斯かる宗教は全く破壊せらるゝに非ざるよりは、高等の宗教に頭を屈する能はざる者なり。されば使徒時代に於ても徒らに律法を曲げ、又は其意義を變更し、以て新信仰と律法とを兩立せしめ、若くは新舊兩信仰の調和を計りしならんには、此新信仰も亦永續すべき運命を有せざりしなるべし。茲に起ちて「古き者は已に往けり」と一喝せし人あるを要す。古きに從ふは罪なり。萬物已に新らしくあれりと告げし人あるを要す。幸にして此任を負ふて起ちし人あり。彼を使徒ポロと爲す。彼が世界歴史の大立物たる所以は茲に在り。

ポロは初代基督教の歴史に於て最も輝ける人物ありき。而かも史上に於ける彼の地位に關しては所説大に一致せざるものあり。兩三年前余輩は或著名なる新教の神學者が斯の如く言へるを聞きぬ。曰く「ポロはラビ的神學によりて基督教を廢棄せしめたる者ありと。之に反し他の論者は基督教の眞の創設者は即ちポロなりと説けり。然れどもポロを精しく觀察せる人の大多數は、彼が其師耶蘇を了解し又其師の業を繼續せし者なるを斷言せり。是れ實に正當なる見解たるなり。彼を基督教の廢棄者なりと難する者は未だ彼が精神の一呼吸だも感ずる事をせず

して、唯だ其衣服と博學とを見たるのみ。又彼を宗教の建設者として賞讃し、若くは批評する人はポロの自ら語れる所が肝要なる點に於て、之を否定する者なるを覺らざるべからず。若し又此説を眞なりとせば、ポロの全心に満ちて其力となれる所の意識は一個の幻影にして、自ら欺ける者なりと説明せざるを得ざるべし。然れども吾人は歴史よりも賢くからん事を欲せざるが故に、而して歴史は彼を耶蘇の傳道者なりと知れるが故に、又彼の自ら語りし所が彼の目的と人物とを證明するが故に、吾人は彼を耶蘇の弟子として、殊に最も多く働き最も大なる事を爲したる使徒として了解せんとするなり。

ポロは基督教をして猶太教の束縛を脱せしめたる人なり。如何にして脱せしめたるか、請ふ次の諸點を考察せよ。

- (一) ポロは福音は即ち既に成就したる贖罪の使命、又現に存在せる救の使命なるを明かに了解したりき。彼は十字架に死にて甦へりたる基督、又我等を神に交はらしめ其結果として義と平和とを來らせし基督を宣傳したりき。
- (二) ポロは福音は即ち律法的宗教を不用に歸せしめたる新宗教なりと斷定したる人にてありき。

(三) ポーロは新宗教が個人に關する者隨て全人類に關する者なるを承認せり。斯く承認したる彼は充分の確信を以て、世界萬國の民に福音を傳へ、之を猶太人の地より希臘、羅馬の世界に輸入せり。彼は福音の下には希臘人、猶太人の別なく皆相一致すべき者なりと教へたるのみならず、猶太教時代は既に過ぎ去りし事を告げたりき。彼が福音を東洋より西洋に移植したるは、吾人の深く謝する所なり。東洋の地は其後再び此宗教の隆盛を見る能はざりき。

(四) ポーロは福音を以て靈と肉、内的生活と外的生活、死と生との一大對立的關係となしたる人にてありき。猶太人として生れ、パリサイ人として教育されたる彼は、獨り希臘人と言はず實に全人類が了解するを得る所の言語を福音に與へ、又福音をして歴史が既に貯へ來れる精神上の資産と相結合せしめたりき。

以上は宗教史上ポーロの偉大なる事を示すものなり。此等諸要素の裏面に存する相互の關係に付ては、今茲に詳論するを得ざれども、唯だ第一の要素に關し余は現今宗教史家として最も著名なるグールハウゼンの説を引かん。曰く「天國の福音を一變して耶穌基督の福音となしたるは主としてポーロの力によれり。是に至る福音は最早天國に關する預言にはあらで、耶穌基督により已に預言の成就したる事にてありき。未來に於ける贖罪は今や一變して既に完成したる現在の贖罪となれり。ポーロは希望よりも信仰に重きを置けり。彼は神の子として未來の幸福を現在に感じたり。彼は既に死に勝ち、地上に於て新生命を有したり。彼は弱きによりて強かるべき力を貴び、且神の恵の已に足れるを感せり。又現在と將來とを問はず。如何なる暴力も彼を基督より離す能はざるを知り、又神を愛する者には凡の物働きて益を爲す事を知れり」と抑々新宗教を其生誕地より引離して別天地に移植するには、如何なる洞見と信任と力とを要せしならん。アラビヤに起りし回々教は何處に行くも、常にアラビヤの宗教にてありき。佛教は常に其生地たる印度に於て最も強固なりき。然るに基督教は、パレスチナに起り、建設者耶穌は其傳道を此地にのみ限りたるに、其死後數年を出でずして此墳壁は破られ、ポーロは基督教を以てイストラエルの宗教と兩立せざる者と爲すに至りぬ。曰く「基督は律法の終となれり」と。

(四) 斯くて基督教は他國に移植さるゝととありしが、是に由り却て基督教本來の使命が茲に存したる事明かなるに至りぬ。是より基督教は羅馬帝國のみならず、泰西の文明諸國を保護し、其基礎を強固ならしめたりき。若し第一世紀の頃、羅馬皇帝に向ひ、陛下股肱の臣たるべき者あり、アンテオケより來れる猶太の一小宣教師は

即ち是なり。彼は羅馬帝國を盤石の上に置くべし、と曰ふ者あらんか、人は呼て狂者と曰ひしならんも、其語りし所は眞理に外ならざりき。』とルナンが曰へるは正當なり。ポーロは羅馬帝國に新たなる力を輸入し、以て泰西の基督教的文明の根據を据えたり。アレキサンドル大王の事業は崩れたるも、ポーロの事業は今に至て尙朽ちざるなり。然るに若し主耶蘇の一言だに、直接には聞かざりし、ポーロが唯だ聖靈の助に由り、己が學識にも反對して大膽極まる企圖を爲したるを讚嘆すべしとせば、之と同じく耶蘇と寢食を共にせし弟子等が烈しき心の戰の揚句斷然決意してポーロの主義に合するに至れる事に向て、深く尊敬を表せざるを得ざるなり。而してペテロが其一人たりしは疑ふ可らざるも、他の弟子等に付ては少くとも彼等がポーロの主義を是認したるを聞けるのみ。試に思へ師より聞きたる一言一句は今尙耳に鳴りつゝあるに、又帥の容姿舉動は一伍一什尙生けるが如く、其記憶に存せるに、其教訓と殆んど根本的に相異はりて、イスラエルの宗教を滅亡せしむるが如き、ポーロの教訓を是認せん事は、弟子等の爲に非常の奮發を要する事たらざるを得んや。此點に於て歴史は明白に又簡單に宗教の外皮と眞髓とを區別して吾人に示したりき。外皮とは即ち耶蘇の教訓に附隨せし猶太的制限にして、彼「イスラエルの

迷へる羊の外に我は遣はされし』(二十五)の語の如きは弟子等の爲めには外皮の一にてありき、然るに彼等は基督の靈の力によりて此外皮を打破するを得たるなり。見よ基督に關する直接の記憶の已に亡びにし二三世紀以後と曰はず、現に耶蘇と寢食を共にしたる弟子等が、已に斯かる大試煉を受くべかりしなり。是れ使徒時代に於ける記憶すべき事實なりとす。

ポーロは福音の本領を傷くる事なくして之を世界的宗教と化し、以て將來起らんとする大教會の基礎を置けり。所謂福音の本領とは耶蘇基督の父なる神を絶対的に信仰する事、主耶蘇を信任する事、罪の赦、永生の確信、心の清き事及び兄弟の交是なり。斯の如く一方には宗教の古き外皮の已に除去さるゝありと思へば、他方には已に新制限の入り來るありて、單純なる靈的運動と其力とを變更せんとせしこを是非なけれ。余輩は今使徒時代の觀察を終るに當り、此變更に向て吾人の注意を拂はんとするなり。

第一使徒等が猶太教會を離れ、全然獨立の團體を設置せし事は、茲に著しき結果を生じたり。彼等は素より基督の團體即ち教會は靈に屬する者なれば、目にて見るべからざる天の教會なる事を確信せり。然れども彼等は又信じたりき、此見るべから